

# アート シネマ



100

鉄砲玉の美学





真昼のひととき、束の間の命を妖しく燃やす昼顔  
 夜がささやけば、愛する人の胸にふるえる清い花びら  
 ■ドヌーブ二つの顔は清純と犯されることへの秘かなあこがれか、女の本能の二重性  
 を描破したJ・ケッセルの文芸作、完璧の映画化！

優秀映画鑑賞会推薦/ヴェネチア映画祭<グランプリ受賞作品>

カトリーヌ・ドヌーブ  
 ジャン・ソレル

監督ルイス・ブニュエル  
 撮影サッシャ・ヴィエルニイ  
 原作ジョゼフ・ケッセル  
 <カラー作品>  
 フランス映画  
 東映洋画



ひる がお

# 昼顔

2月24日よりロードショー

銀座東急 (571) 3411

渋谷東急レックス (407) 7019

新宿ロマン劇場 (352) 2940



## 「アート・シアター」100号によせて

### 飯島 正

《アート・シアター》100号に際して、ぼくにはぼくなり感慨がある。

いまぼくの本棚にたててある《アート・シアター》は、第1号からはじめて、約50センチ横にならんでいる。ぼくが雑誌を第1号からためてもっているなどということはめったにない。ほかの雑誌は最近の2度の引越してあらかた払ってしまったので、これは貴重な生きのこりである。それだけこれは大切な役に立つ雑誌だといえよう。

《アート・シアター》は映画に関するかぎり、ユニークな雑誌である。新劇などでは劇団の雑誌がちゃんとあるだろうが、映画では現在この種のものはこれが唯一だろう。最近映画館で売っているパンフレットなどには、全然その小屋の個性なんかない。《アート・シアター》にはA・T・G・の個性が気魄となってこもっている。映画の前衛の旗じるしがここにある。

創刊は1962年であるから約10年まえになる。ちょうど＜ポウランド派＞や＜ヌーヴェル・ヴァーグ＞の意気さかんなころであった。A・T・G・は当時商業主義の小屋では上映できないようなそういう種類の映画を上映したから、《アート・シアター》はその推進役としての役目をもっていた。ぼくも意気込んで＜ポウランド派＞や＜ヌーヴェル・ヴァーグ＞について書かせてもらった。

ところでいま、当時の《アート・シアター》をひねくりながら考えたのだが、映画業界誌やファン雑誌には見られない作家や作品に関する研究的な記事が、ここにはたしかにあった。うまくはいえないが、これは純粋度の高いものだった。一種宣伝雑誌の性格はも

ちながら、かえって宣伝臭がないのは筆者の態度が作家や作品に直接にむすびついていて、ジャーナリズムとは無縁だったからだとおもう。これは今日ではめずらしいこの雑誌の特徴である。バック・ナンバーをそろえておきたいのはそのためである。

ぼく個人としては、さきにあげた＜ポウランド派＞や＜ヌーヴェル・ヴァーグ＞、それからブラジルの＜ノーヴォ・シネマ＞などについては、いろいろ知らないことをしらべて書くのが実にたのしかった。そういうことはこの雑誌でなければできないことなのである。

ここ三、四年来A・T・G・は日本映画のほうがおおくなった。もちろん、ぼくもそれは日本映画のために結構なことだとおもっているが、一方外国の前衛的な映画の上映がすくなくなったことはやはりさびしい。誌上の記事もそれだけへるからである。ぼくはいっそ日本映画にかぎらず、この雑誌は世界の映画の前衛的な傾向をひろくとりあげ、主義主張にかたよらない研究記事をおおいにのせて、前衛映画雑誌としてのユニークな存在価値をさらに高めて行ったらどうかとおもっている。

現在そういう記事がほかの映画雑誌にないわけではない。しかしそれは散発的であったり、激越な調子がするどすぎたりする。《アート・シアター》のような平明な個性の編集で、ぼくはそれを読みたいのである。この点でぼくはこの編集ぶりに仲間としてのしたしきを感じるものである。

### 大島 渚

A・T・G・映画を上映している劇場で売るパンフレットの「アート・シアター」が、100号





No.69 「少年」

になったという。なにはともあれ、めでたいと言わなければならない。なにしろ、「アート・シアター」を編集する多賀さんの努力たるや、たいへんなものである。多賀さんが、ATGの重役であり宣伝・責任者であることは人も知るとおりだが、なんといってもATGは少人数の世帯だから、彼はほとんど一人で、この「アート・シアター」にかかりきりなのである。ぼくなどが、日比谷の東光ビルの5階にあるATGの部屋へ行くと、多賀さんの机の上には、いつも「アート・シアター」のためのスチールや割付用紙が置いてある。そして、多賀さんは、ほんとにいとしそうに、このパンフレットをつくっておられる。手づくりの楽しさと言おうか、多賀さんはいかにも幸せそうに見える。そこで、ぼくなどはちょっとひがんでしまうのだ。＜多賀さん、パンフレットばかり大事にして。かんじんの映画のいりなんか、どうでもいいと思ってるんじゃないでしょうね。もっと映画の宣伝してくださいよ。宣伝！ 宣伝！＞などと言いたくなってしまうのである。おまけに、この「アート・シアター」が売れすぎるのも、シャクの種である。ほとんど毎号売り切れてしまうという、こんな割のいい出版物がほかにあるだろうか。ATGとぼくは、フィフティ・フィフティの仕事をしている。ところが、このパンフレットの売上に関してだけは、ぼくの方はまったく関係なしなのであ

る。わずかに、シナリオの掲載料をもらうだけ。売れてなきゃひがまないんだろうけど、あまりにいい商売になっているようなので、つい口がすべる。まったく！ 青息吐息でがんばっているATGとその周辺のなかで、この「アート・シアター」だけは固い商売なのだ。しかし、それは最初からそうだったわけではあるまい。ここまで信用を築いて来たのは、やっぱり多賀さんの力だろう。多賀さん、100号、ほんとにおめでとう。ひがみも何もかも正直にさらけ出した上で、ぼくは心からおよろこびを申しあげる。

このバックナンバーを揃えることがはやっているそうだが、その気持がわかるような気がする。映画を上映することも見ることも、何がしか、はかない作業だからである。そう思う時、人は並べられたパンフレットのバックナンバーのなかに、映画に寄せたおのれの情熱の残り香をかぐのである。

## 尾崎 宏次

ここしばらく「アート・シアター」の編集にタッチしてきた。試写をみてから何日かおいて、頭がひえて、それから編集会議にでるというのが、いちばんいいようである。部屋があいていない日には、私たちは近くの静かな喫茶店へ移動して、そこでコーヒーを飲みながらプランをねる。

私はちいさな新聞社でそだったせいか、その日を処理するように頭を使ってきたので、逆に、こういう仕事では、ゆっくり、古くなくても新しいというような、そういうものを作る頭の使い方をまなんだ。しかし、パンフレットにはいちいち批評がはね返ってくるわけではないから、作ったほうで勝手にできあがったものを批評しているより仕方がない。

去年の暮れに、早稲田をでてからS書店へつとめるようになった甥が訪ねてきた。もうそこへ勤めだしてから三年余りになるので、古い本の価値などもだいぶわかるようになって



た。甥は私の部屋へ入ってくるなり、本棚をみていたが、おじさん、「アート・シアター」のパンフレットあまってませんかね、と言った。このパンフレットは閉じ込みにして11冊になっているので、甥の目にもすぐ入ったのであろう。あまるわけがないだろう……と言うと、残念だなあ、と甥は腕を組んで天井を仰ぐような真似をしてみせた。値がついてるんですよと言うのである。

そこで私も少し興味がわいてきたので、1号から持ってる人が簡単に手放すわけではないから、それじゃバラでもいいのだな、という、そうですと答えた。そういうケースは必ずしもファン心理だけがつくるものでもあるまいと思って、バラにしたら、どれが欲しい？ときいてみた。

そりゃ「野いちご」の載ってる号です、これが一番高くて、ぼくらのところへもツテを求めてきます、と甥は言った。値段もきいたのだが、忘れてしまった。ただ、古くなっても新しいものがあるのだ、という実感をそのときに味わったことだけは確かであった。

## 金井 俊夫

「アート・シアター」のバックナンバーを繰っていたら NO.55の「絞死刑」が2冊もでてきた。発行日付は昭和43年1月となっている。ちょうど5年前、私が映画記者になったばかりのころである。その号のグラビアには私も見学した芝園館での撮影風景がのっている。それを見ていたら、厳冬のさなか、とりこわし直前の古い映画館の中に組んだセットのあの底冷えのする寒さがよみがってきた。この「絞死刑」は「人間蒸発」につづいで、ATGが、こんどは本格的に打ち出した“1千万円映画”だけに、モーレッツ宣伝部長の多賀さんが新米記者に勉強させようと、2回も手渡したのかもしれない。

それ以後、多賀さんをわずらわしては、私は「アート・シアター」のバックナンバー補巻

のほうに精を出した。残念ながらまだ10号ほど欠けているが、この補巻作業は昔果たせなかった悔恨に根ざしているのである。「アート・シアター」を初めて見たのはたしか「ラブド・ワン」のときだったろうか。ともかくその第一印象は、少年時代に母親の月給を盗んでは買っていた「映画春秋」を思い出させた。その雑誌はキネマ旬報社から発行されており、昭和25、6年に廃刊になったが、当時としては高級な映画雑誌だった。表紙がまずよかった。上半分を白地にして上方に中細の活字体で誌名、下半分が外国スターのカラー。「キネマ旬報」の当時の表紙をモディファイしたレイアウトだった。それを、めくると、やはり上下半分にしてスチルと活字による作品研究のページがあり、清水千代太、飯田心美、南部圭之助氏らが健筆をふるっていた。そのほか飯島正氏のフランス映画史（カットは荻須高德）、津村秀夫氏らの論文やエッセイ、シナリオの一挙掲載など豊富な内容だった。これらの執筆者が田舎の少年にはなんとまぶしかったことか！ いつかはここに大論文を書きたいというのが少年時代の夢でもあったが、毎日キッチンキッチンと買えるほど豊かではなかった。そのウラミ、ツラミがこんどは「アート・シアター」に爆発したわけだが、いかんせんまたもや手遅れとなったのである。

それはともかくとしての創刊のころの、「アート・シアター」を見ていると、編集方針が  
No.7 「野いちご」





「映画春秋」と実によく似ており、創刊当初の編集委員の顔ぶれもほとんど変わっていない。最近はATGの宣伝部が主となって編集しているようだが、単なるPR雑誌とは違って、日本における映画研究の定着をめざした創刊当時の精神をいっそう推進しているように思えるのである。このスマートな編集はかつて「映画の友」にいた多賀さんの経験が結実したものであり、ユニークな執筆者選びは西村さんの教養が奏功している。

## 川喜多かしこ

ATGの誕生と共に始まった「アート・シアター」誌が愈々100号になりました。そのうち約4分の1が独立プロ・ATG提携作品の特集号です。

この特集号が独立プロ・ATG提携作品を海外に紹介する場合大変役に立ちます。

大島作品をはじめ羽仁、吉田、寺山、実相寺、松本作品等が海外の映画祭や日本映画週間で紹介されていますが、その為の文献として非常に役立つのが「アート・シアター」誌なのです。

昨年はイタリアのペザロとロンドン映画祭が日本映画特集を扱い、ペザロで15本、ロンドンで7本の日本映画が上映されました。

ロンドン上映作品は熱烈な拍手を浴びた衣笠監督の1926年度作品「狂った一夏」をはじめとして大島氏の「夏の妹」吉田氏の「告白的女優論」松本氏の「修羅」勅使河原氏の「サマー・ソルジャー」土本氏の「水俣」寺山氏の「書を捨てよ町へ出よう」でした。

こうして見ますと独立プロ・ATG提携作品は国内で屢々赤字を出し、製作者を苦しめています。この雑誌は海外では若い作家の日本映画として芸術面からだけでなく、日本という、この複雑な社会機構と人間を知る上の貴重な資料として高く評価されています。

残念なことに誌面は全部日本語で、日本語の読める外国批評家は殆んどいないので、必

要な場合は在仏のゴヴァース・弘子夫人をわずらわさなくてはなりません。

それでも、この特集号を見れば「讃歌」なり「鉄砲玉の美学」なりの作家の意図（評論家とのインタビュー等による）、批評家の作品解説、作家のフィルモグラフィ、場面写真や、そして、完成シナリオが一目でわかります。

1本々々の作品（邦画、外画とも）がこれ程行き届いた取扱いを受けて紹介される例は外国にもありません。これは、商業主義の浸蝕を受けて原点の理想主義から後退しつつある、（例えば優秀短編併映の低料金一本立て興行形態等）ATGの最後の砦として永久に続けられなくてはならないと思います。

更に希望をのべさせて頂ければ題名、スタッフ、キャストだけ英文の一頁が加われば外国に紹介する場合非常に便利だと思います。

固有名詞は日本人でも正確に読みにくいので、これは我々に取っても必要だと思うのです。

## 植草 甚一

あれは三年まえだったかな。それとも、もうすこしあとだったかもしれない。神保町の古本屋がいつも「東京古書即売展目録」というのを送ってくれるので、それに目をとおしているときだった。

こういう目録でぼくが見る欄は、文芸書のところにきまっていて、ぼくは明治41年生まれだから、小説ならたいてい初版の原物を本屋に出たとき見ていた。ただ詩集は、荻原恭次郎の「死刑宣告」とか堀口大学の「月下の一群」などは別とし、見たことはないのだ。そうして目録にざっと目をとおすようになったのは、昭和初期の古本が、高くなったからで、そんな本がよく部屋のどこかで、ほかの本といっしょになっていたからだ。

ずうっとまえの話だが安房公房の「壁」があったのを、遊びに来ていた古本屋がほしそうな顔をしているので、そんな本がいいのか



い、ほしかったらあげるよと言ったのを、あとで思い出したりし、すこしは古本の相場を知っておいたほうがいいなと思ったのである。そんなとき、ぼくは店のなかに洋書がないので入らないが、その神保町の古本屋の出品目録に、安部公房のガリ版刷り「燃えつきた地図」のシナリオ台本が、2万円としてあって、そのつぎにATGの「アート・シアター」の安房公房「おとし穴」特集号が600円となっていた。

ぼくはすぐATGの多賀祥介さんに電話して「おとし穴」の号は古本屋のカタログでは6倍の値段になっているけれど、残部はありますかと訊いたら、あの号は売り切れになったというのだ。

ところで古本屋には「古本屋常套語」というのがあって、たとえば、ATGの「おとし穴」のガリ版シナリオ台本をしまっていたのに気がつき、これは「燃えつきた地図」より値打ちがあるのは判っている。それでどうだい買うかいと言ってみると『安部公房には二寸ぐらいの厚さのガリ版シナリオ台本で何とか（早口で言ったので聞きとれない）いうのがあって、あれだといひんですけれど』と返事するのが一例だ。

どうして古本屋は育ちがわるいんだろう。そのうち「古本屋常套語集」をつくってみようかと思うけれど「アート・シアター」誌の古本値は、そういう気持から判断しなければならないが、数年後の「古書即売展目録」を見たでしょう。そのある号には150冊そろい3万5千円と出ていると思うのだ。現在でも100号そろえて持っているファンは、わりあいすくない気がする。正確に計算してないが、100号ぶん買ったのが約1万5千円で、それが数年後には2万5千円になるという予想なのだ。

古本屋で「アート・シアター」がバラで5、6冊とか30冊くらい売っているのを最近ちょいちょい見かける。値段はマチマチだけれど欠号を、それで埋めておくのもいいだろう、ぼくはいまの古本屋より古本のことは知っているはずだけれど、変てこな話になっちゃった。



No.1「尼僧ヨアンナ」

## ——目次——

### 「アートシアター」100号によせて

	飯島 正	3
	大島 渚	3
	尾崎宏次	4
	金井俊夫	5
	川喜多かしこ	6
	植草甚一	6
作品研究「鉄砲玉の美学」	田山力哉	8
シネ・ギャラリー	橋本 勝	15
中島貞夫論	佐藤忠男	16
ネチヨネチヨ生きられなかったアイツ		
	高沢瑛一	20
見放されたうさぎの中の清	押川義行	23
調理されない素材、	川島のぶ子	24
中島貞夫、自己を語る	品田雄吉	26
中島貞夫監督作品表		43
シナリオ「鉄砲玉の美学」		46
編集デスクから	南部圭之助	70
口絵		33



(1)

中島貞夫は「893愚連隊」で脚光を浴びていらい、東映路線の中でも最も個性的な監督のひとりと言われてきた。その彼がATGで映画を撮るという話を聞いたとき、正直いって驚いた。彼の個性は東映の中でもかなりフルに発揮されているのではないかと私は考えていたからである。

だが企業の中で映画を撮るということは、ハタ目にはよく見えた場合であっても、当人にしか分らないヒシヒシとした拘束を感じ、それでやりきれない思いをする場合もないではないだろう。もとより、その拘束の中からも、その隙き間をブチ破って出てくる個性的なものは、われわれ見る者にとって極めて魅力的なものであり、だからこそ私などは大手企業の映画を見る楽しみを未だに捨て切れずにいるわけである。

だが作家の側としては、できるだけの自由を求めて創作活動をしたいと願うのが当然であり、かつて有数の映画作家たちの多くが五社体制を去ったわけであるが、東映に籍を置きながらATGで仕事をする願望を果たした中島貞夫の場合、一度でも作家としての自由の中で仕事をし、自らの限界を試そうとしたのも分るような気はする。

私は中島監督とは面識がないが、人伝てに聞くところによると、この「鉄砲玉の美学」を撮りながら、初めて自分が映画を撮っているというほんとうの実感を得た、ともらしていたそうだ。例えば企業内で映画を撮れば尺数が大体決まっているから、否でも応でもその中でまとめなければならず、この映画がもし長ければうさぎの場面など多少はカットすることを余儀なくされていたことも考えられる。

だが肥らせるも、やせさせるも、それは持ち主の利益に応じて決まるといつたうさぎの存在は、中島監督にとってはこの映画の中心的モチーフであつたろうから、このうさぎの場面を少しでも切ることは彼にとって全く本位でないことにちがいない。そういう意味で彼はATGにおいて全く“本位”な仕事をし

作品研究

## 鉄砲玉の美学

田山 力哉

たということになり、それだけに彼の資質云々がこの一本の作品で鋭くなされるのはやむを得ず、彼としてはあらゆる批判の矢面に立つ立場に自らを追いやったことになるわけだ。では一体「鉄砲玉の美学」で中島監督は東映ではやれない何をやりたかったのか、そのあたりを第三者の眼から探りながら、作品の分析を進めて行こう。

(2)

この映画の魅力のひとつは、主人公のチンピラの弱さ・汚さ・みじめさなどのすべてを含めた上で、作者がかなりの共感をもって熱っぽく追いもとめている点であろう。東映のやくざ路線のヒーローたちのような美化されたものは、この主人公には全くない。彼がええカッコしている時でも、実はその裏のからくりが観客にスケスケに見えるようになっており、実は彼は全くの型なしなのであるが、しかしそれでも作者はこの人物一本にしばって徹底的に追いつめながら、最後まで共感のこころを失なっていないのである。

まず結論的に考えられることは、中島監督





がここで明らかに、東映的ヒーローの虚像を完全にひっぺがえしてみせようという意図に出発しているであろうことである。東映のスター渡瀬恒彦に演じさせたこの映画のヒーロー小池清は、例のヒーローらしいカッコよさを見せようとすればするほど、その卑小さを観客の前に見せつける結果になって終る。言ってみれば、現代において個人的なヒーローなんて物の数ではありはしない。殊にやくざの世界において、彼らはみな例外なく組織の操り人形でしかあり得ないのだ。

そうしたやくざ予備軍は、現代の繁栄のゴミ箱のようなところにウヨウヨといる。この映画の最初のシーケンスは、そうした現代の大都会の裏表を映像によってあばき出すことに費されている。やけっぱちの主題歌が画面外からかなりたてる中に、大都会の偉容が画面いっぱいに見られる。華麗であり、ダイナミックであり、ネオンの光に充ち、高層ビルの乱立する大阪の町——が、その繁栄の町はどこか、ひとりひとりの人間をはじき出さずにおかないような圧迫感と疎外感を身につけていることに誰もが気づく筈だ。

この大都会での無限の胃の腑の力を、映像は男女の唇の動きのアップで見せる。どぎついルージュをつけた唇が肉のアブラでテラテラと薄気味悪く光っている。ホルモン料理の大鍋。そしてその食欲の残りかすである大きなゴミ箱の食物の破片の山が、薄汚く見る者の眼を射る。画面は繁栄の都会の外観に始まり、それは裏面へ裏面へと移行し、下へ下へとさがって行く。

そのさがり切ったところに主人公の小池清がいる。彼は路地の兎売りだ。自分で飼っている兎を、なるべく食物を与えずにおき、肥っていない小兎として売りつけようとしている。が、路地で威勢よく掛け声をかけても、通行人たちはまるきり無関心である。売れたとしたってたった三百円、そんなもので暮しの足しになるわけもない。要するにこのヒーローは、自活する能力もない、社会のツマ外き者にすぎないのだ。

大都会の巨大な食物のエネルギーをよそに、彼は八百屋の店先きに散らばったキャベツの屑を拾い、その少量を飼っている兎に与え、残りをインスタント焼きそばかなにかに



混ぜ、ぼそぼそとひとりめしを食う。彼は女をトルコで働かせて、それで食っている、いわばヒモなのである。

当然、する事もない彼は、同じような仲間と麻雀で時を過す。この麻雀のシーンの、ぐうたらした零囲気表現もなかなかいい。殊に荒木一郎が例によってふてくされた調子で「希望という名の、あなたを尋ねてェ」などと口ずさみながら“ポン”などとやっている感じが面白く、こうした怠惰・倦怠のチンピラたちの生活実感のようなものが、よくにじみ出ているのである。

彼らは一様に貧乏だ。金儲けの話などしながらイイチャン終ると、小池清の四千二百円負け、直ぐに払う払わないで、憎悪に充ちたいがみ合いが始まる、金のなさからくるヒリヒリした感情・人間関係が表面化する。清は外へ飛び出し、トルコで働いているよし子呼び出して一万円借りる。それで借りを返し、もう一回勝負を挑むが、オケラになっただけに終る。なんとどうしようもない生活ではないか。

### (3)

家へ戻ると同棲しているトルコ嬢のよし子が、これまたボソボソとインスタント・ラーメンを食べており、清のほうは彼女が買っておいてくれた安ウィスキーの大瓶をゴクゴク飲むといった有様で、こんなわびしい家の中の描写も、彼らが今の世の中の最低ラインに

近い生活をしていることを示している。よし子に扮する森みつるという女優が、こんなダメな男にもホレきって、面倒をみなけらばいられないといった女らしい心と身体の微妙さをよく演じている。

女がつくすから、チンピラは能もないのにエラぶって威張りちらすばかり、ということで、清は彼女が兎に多くの野菜をもりもり食わしたことを知って烈火のごとく怒る。女を蹴倒し、“男のマラなぶってゼニもらう”以外に能がないくせにと罵倒する。さすがのよし子も怒って、「あたいに威張りちらす以外になんの能があるの。チンピラのくせに」と言い返す。“チンピラ”という言葉で、清の自尊心は傷つき、女をめったやたらに暴力をふるう。

このあたりで清という男が、なんとかしてヒーローぶりたい気持ちが強いくせに、実はどうしようもないチンピラにすぎないということを自覚し、それに極度のコンプレックスをもっていることが描かれる。だから“チンピラ”といわれて、彼は無駄な暴発運動を起こすばかりなのである。「殺すこともできないくせに」というよし子の言葉通り、彼はそのままヤケを起して家をとび出して行くだけである。彼はせいぜい、バーでやけ酒といった程度だ。……が、その彼のところが癒されるべきチャンスが到来する。

実は映画の冒頭から、画面で清の言動と生活ぶりを写し出す反面、画面外からの声がや





くざ組織の幹部の連中の対話を聞かせている。それは東映やくざ映画の悪玉でおなじみの遠藤辰雄などのなじみの深い声であり、彼らは鉄砲玉として九州へ飛ばすチンピラを探しているということがその対話で示されるのだ。彼らの組織は大阪の天佑会。宮崎の小さな組をつぶすために、血の気の多い鉄砲玉を送りこみ、彼が殺されたら一気に宮崎へ進出しようという、いわばオトリだ。

遠藤辰雄ら薄気味の悪い声の持ち主は、ついに最後まで顔を画面に現さないで終る。表面に出て派手にいいカッコする、いわゆる、“ヒーロー”は実はみなかいらいにすぎないのであって、ほんとうに実力をもった悪玉というものは一切表面には現れず、ただ蔭にあって人形を操るだけなのだ、ということをこの手法はいみじくも暗示している。黒幕は陰気っぽい声を聞かせ、気味の悪い含み笑いをひびかせるけれども、自らは一切手を下すことがないのである。

コンプレックスだらけの癖に、見栄は人一倍強く、ヒーローになりたい願望を抱いている小池清には、ねがってもない話であった。ヤケ酒を飲んで、大暴れした彼の無鉄砲ぶりが、組織の目に留ったのであろう。彼には百万円と拳銃が与えられる。まるで夢のような話である。いい背広も着れる。うまいものも食える。そしてまるで東映映画のヒーローのように、さっそうと凄んでみやることもできるのだ。

そうした彼の偶て、数人の青年が車の中で若い娘を輪姦している現場を目撃する。青年たちは目撃者である彼を襲い、なぐったり蹴ったりするが、彼は隙をみて拳銃を取り出して狙う。「こら、おもちゃとちゃうでェ！」今まで彼を攻めていた若者たちが、急にガタガタとふるえ出す。「何やったら、人の殺し方教えてろやないけ！」これまで散々虚勢の言葉を吐いてきた清が、これは初めて実力の裏づけをもって凄んだタンカなのである。若者たちはひれ伏して彼にあやまる。

清は拳銃を見つめてニツタリ笑う。彼は初めて拳銃の威力を実地に知ったのだ。そしてそれを手にした彼自身の威力を。だがその威

力が実は彼自身のものでなく、彼を鉄砲玉に仕立てあげた天佑会の威力を一時的に借りたものにすぎず、本質的に彼自身は元通りのチンピラにすぎないことを知るには、彼は余りにも若かった。彼は見違えるような服を着、拳銃を腰にさし、さっそうと宮崎へ乗りこむのだ。

ここまでがいわば「鉄砲玉の美学」の序奏部とでもいうべきものだが、やや映像表現の中に“繁栄の中の貧困”といった図式的なものが覗えるのは惜しいが、それでもつづく九州での場面のドラマチックな高まりへの布石の役割を果たしているわけだ。彼は虫ケラのような生活とオサラバし、女もそのまま置き捨てて、九州へ乗りこむ。

#### (4)

東映映画のヒーローだと、この後の九州での行動のひとつひとつこそ、彼の男をあげるエレメントになるわけだが、最初にも少し触れたように、この映画では渡瀬がいいカッコするようになればなるほど、逆に観客は彼のみじめさを感じるようになるのである。そしてまた、観客のそうした気持に反比例するように、彼自身はいつか錯覚の泥沼の中に落ちこんで行くのだ。

宮崎へ着いた清は、まずロイヤル・ホテルなる最高級のホテルに泊る。部屋へ入ると百万円の札束をホレボレ眺め、今度は鏡の前で恰好をつけ、いろんな表情をしながら「俺は天佑会の小池清や」というセリフを口にしてみる。いい気持のように見える。だがボーイがドアをノックしただけで、ハッと緊張し、拳銃に手をやり、「だれや」などと大げさで上ずった声を出す、といった描写から、彼が実は内心では小心翼翼、ビクビクの連続なのだということが示される。

彼は十万ばかり財布に入れてバーに行く。得意げに注文するジョニコロ。女たちの見る目が変わる。いい気になって大番振舞い。他のやくざ風の客たちにえらそうにインネンをつける。そして、彼の後をつけ回していたこの土地のチンピラをつかまえ、拳銃でなぐり倒す。漸く調子がついてきたようである。



だが、その彼がホテルの一室へ入ったときは、思わず泣き出してしまう。緊張していたのだ。怖かったのだ。当然であろう。昨日まで大阪で売れもしない兎を売り、下手なマージャンを打ち、女から金を捲きあげる位しかできなかったチンピラだ、それがいかに天佑会のバックがあるとはいえ、単身宮崎の組織に挑戦しにきたのだから、本来彼の荷に勝ちすぎたことなのだ。清はいつか、自分が虫ケラのように殺されてしまうという思いにかられ、恐怖に慄然とした筈である。

天佑会からみれば、清にはただ暴れ回って死んでもらうのが目的なのだ。彼が殺されなければ意味がない。翌朝、早くに清のところへ電話が掛る。ベルが鳴ると、不安でたまらない清、受話器を取ってそれが天佑会の者だと分ると、「兄貴ッ」と、なつかしそうに言う。彼はまだ天佑会の人間は、ほんとうに自分のためになってくれる味方だなどと信じているのだろうか。

彼は電話の指示通り、アモーレというバーへ出掛け、マスターの杉町（小池朝雄）という男を罵倒して挑発する。が、杉町はその表情に凄味をただよわせながら、天佑会と事を起こすのを怖れ、彼に丁重に応待する。「お前など貫目不足や」と清がわめいた時、ビリビリと顔をけいれんさせる杉町を演じた小池朝雄の芝居がなんともいえず不気味なムードをただよわすが、清は自分がタンカを切っても無事に通用するので、だんだん本格的にいい気になってくる。

そうかと思うと、バーの女を金でモノにし、自棄的な感じでその肉体をむさぼるあたりの清には、やはりいずれ命を失なう予感からまた病んだ心が反映しているのだ。しかしそうした主人公の、ヒーローぶった態度と、その内心の弱さとを描くために、演出はやや絞切型に、その画面のシーンを交互に出して示すだけという、図式に捉われすぎていたようだ。自分のヒーローぶりを過信して行く彼が、しかし一枚裏をはがせばチンピラの（そして人間的）な弱さに充ち充ちたままでいるというあたりの心情を、中島貞夫ほどの演出力があれば、もう少し微妙に描きこなせなか

ったであろうか、と、その辺がやや私は物足りない気がした。要するに、この主人公の人物全体に、私はある種の“図式”を感じたのである。

だが中島貞夫のこのチンピラ主人公に対する人間的共感が、図式的なところはあってもこの映画の魅力の大きな部分になっていることは確かであろう。その共感、清がやりたい放題のことをやることができ、とっかえひっかえ女をモノにするようになり、ますますいい気分になってきたあたりで、さらに強まってきているように思われる。だから観客はこの主人公に一掬の涙をそそぐことはあっても決して最後までさげすんだり憎んだりする気持にはなれないのである。

というのも、この主人公から作者は、彼自身の、そして観客である我々自身の“人間”をも描き出そうとしているからである。我々もまた“清”的なものを内部に抱えているのではないか。我々もまた誰かに操られた人形なのではないか。それなのに偽りのカッコよさ気取りをすることがあるのではないか。中島監督はこの主人公への共感を通して、現代に生きる人間全般の共通項を惹き出そうとしているようにも思われる。

そして清は……

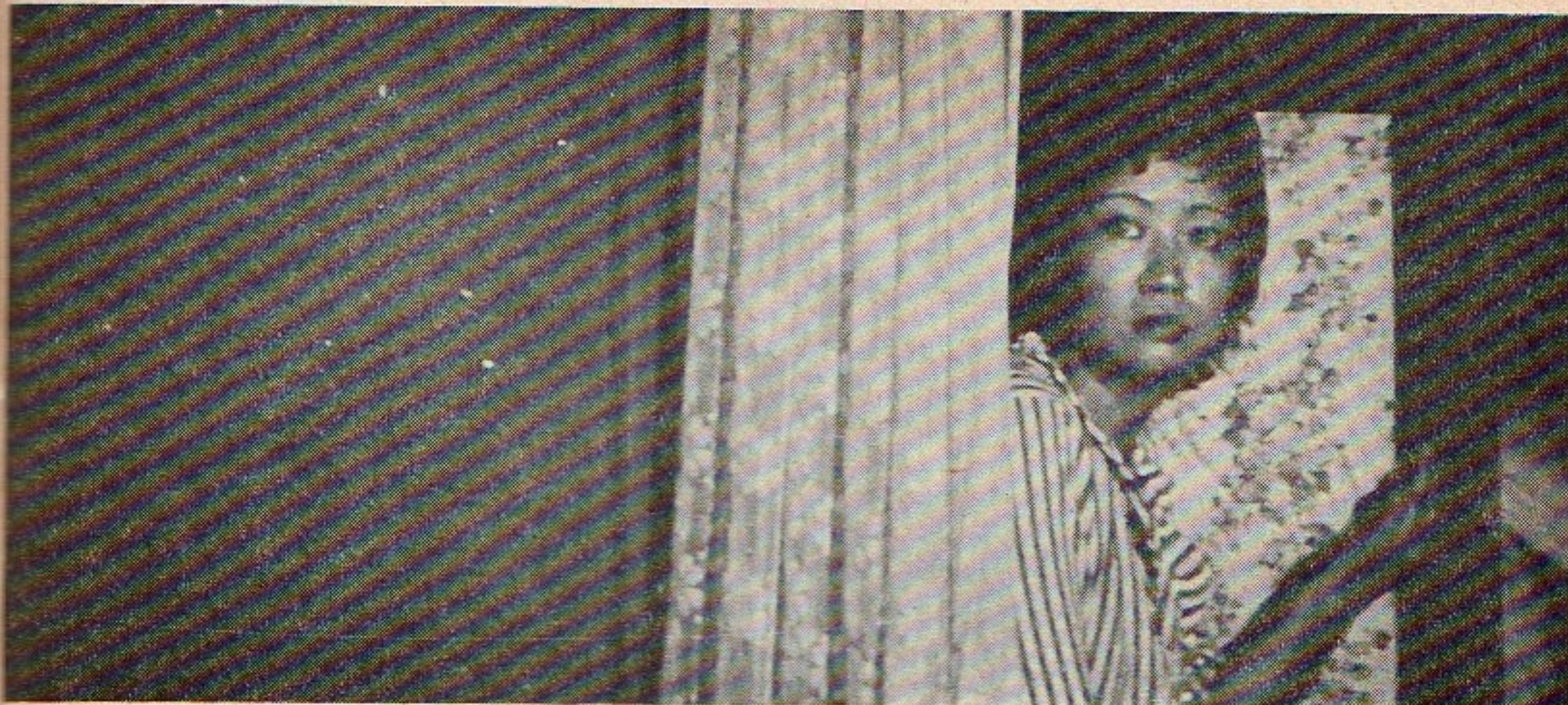
## (5)

小池清が図にのればのほど、我々には分るその不自然さが、カタストロフを予感させるのである。好きなだけ女が抱けるようになると、それだけでは満足できなくなる。彼は彼をふり返ろうとしない潤子（杉本美樹）に憧れる。彼女は杉町の情婦である。

ある時、最初彼に拳銃でなぐられた土地のチンピラが清に襲いかかる。清は逆にその男をなぐり倒したが、杉町たち土地のやくざはこの事を清が天佑会に報告するのを怖れ、この男を気のすむようにしていい代りに、このことは天佑会には知らせないようにと懇願する。

清は拳銃でそのチンピラを射殺しようとするが、手がふるえてそれができない。そしてそのままホテルへ逃げるように戻ってきてし





まう。彼は自らの錯覚を今や思い知る。ヒーローどころか、彼を襲った虫ケラのような土地のチンピラひとり殺すこともできなかったのだ……彼は傷つく。

だが浅薄な彼が再び自分をヒーローと錯覚する事態が起る。杉町の情婦潤子が彼を誘いにきたのだ。都城へ一緒に行こうという潤子は清のことをこう言う、「私ってその時々の最高の男性にしか興味がないのよ」

都城のホテルでのベッド・シーンで、さすがに杉本美樹は、その肉体の魅力でねっとりとしたエロチシズムを表現してくれる。男のすべてを発散させようとする清の体の下で、あえぎ、もだえる彼女の全身が“女”というものを現してやまない。

そのベッド・シーンの中に、清の回想シーンが出てきて、セックスの恍惚の中における彼の無限の感慨が示されるのだ。潤子の肉体をモノにしたということは、いわば彼が自分のみじめな境涯から脱して、ほんとうのヒーローになったということだろうか。彼はそういう錯覚におちいったようである。潤子とのセックスのエクスタシーにふける間に、彼がかつてうだつのあがらぬコックであった時の様々の姿が示される。ゴミを捨てる彼。便所の中で落書きをしマスにかくみじめな青春。やくざ達に袋叩きにされる彼。鼻血にまみれる彼。——そういう回想の中に、彼は潤子をのけぞらせる。

清はまた、潤子という女王のような女に、

犬の真似をさせる。“最高の男性”という言葉が彼を有頂天にさせたのである。今や彼は自分が単なる操り人形であることを忘れた。結局、いまの時代には、そういうのが多いのだ。たとえやくざの組織ではなくても、企業に操られながらデカイ面をする人間はいる。彼は自分がかいらいであることをいつか忘れて、なにか大きな錯覚におちいる……清のような一介の野良犬が、突然にこれだけチャホヤされる身分になれば、錯覚を起こすのも無理はない。作者はだから、彼の卑小さを決して嘲笑ってはいない。人間の必然的な弱さとして見つめているのだ。

清はホテルの窓のかなたにそびえる霧島に昇りたいと思う。潤子と一緒に昇りたいと思う。それがたまたま、彼の誕生日であった。そしてこの瞬間が彼の最高の得意のときなのであった。彼の破局が我々には予見できるだけに、彼の姿は余計にみじめで哀れで、残酷に見れば滑稽に見えるのである。第一、彼はこのときに、女と幸せなときを過すことに専念していて、もはや全く鉄砲玉の役割を果たしていない。彼自身の側からも、彼はいつか自らの武器を捨て、東の間の幻影に酔いしれてしまったのだ。

そしてその朝、清がひとり有頂天になっている間に、潤子は組からの電話を受け、黙って去ってしまう。もう彼は“最高の男性”ではないのだ。しばらくは茫然とするが、まだ夢からさめぬ清は、「女はおんどれ一人とち



ゃうで」と虚勢の言葉、片っ端から宮崎の女たちに電話を掛けて霧島のドライブに誘う。

この時、ヌーッと部屋に入ってきたのが大阪に残してきたよし子だ。彼女の顔つき姿は清には不偶時代が再び眼の前に現れたようなシラけた気持ちにされる。しかも彼女は宮崎の組が連合会を味方につけたため、天佑会は九州から手を引いたことを知らせる。信じられない。

そうとすれば清はもう何の価値もない。宮崎へ戻れば直ぐにメッタメタに殺られてしまうだろう。慌てて大阪の天佑会へ電話したが、剣もホロロの言葉、清はまたまた、もとの野良犬である。

潤子が去った直後に、よし子がスッと姿を見せるなどという御膳立も、ややこの映画のイージーなご都合主義の現れで、見ているほうはなにか興ざめるものだ。そういう一種のリアリティーのなさ、ナマナマしい実感を消す図式がやや迫力を損じていることは確かで中島監督のリキみすぎが、全編にそういう硬さをもたらしたのではないかと思う。

主演の渡瀬恒彦も監督同様にかなりリキンでいる。しかし自分の失望を知ってヤケを起こし、ジョニクロをガボガボと飲み、やけ電

話を掛けるあたりの、いら立ちと絶望と怒りの表現など非常に熱っぽい芝居でなかなか迫力がある。彼は結局、前に輪姦を目撃した女のところへ駆けこむ。だが今は人妻になったその女は、彼の脅迫を怖れ、刑事を呼んでいた。

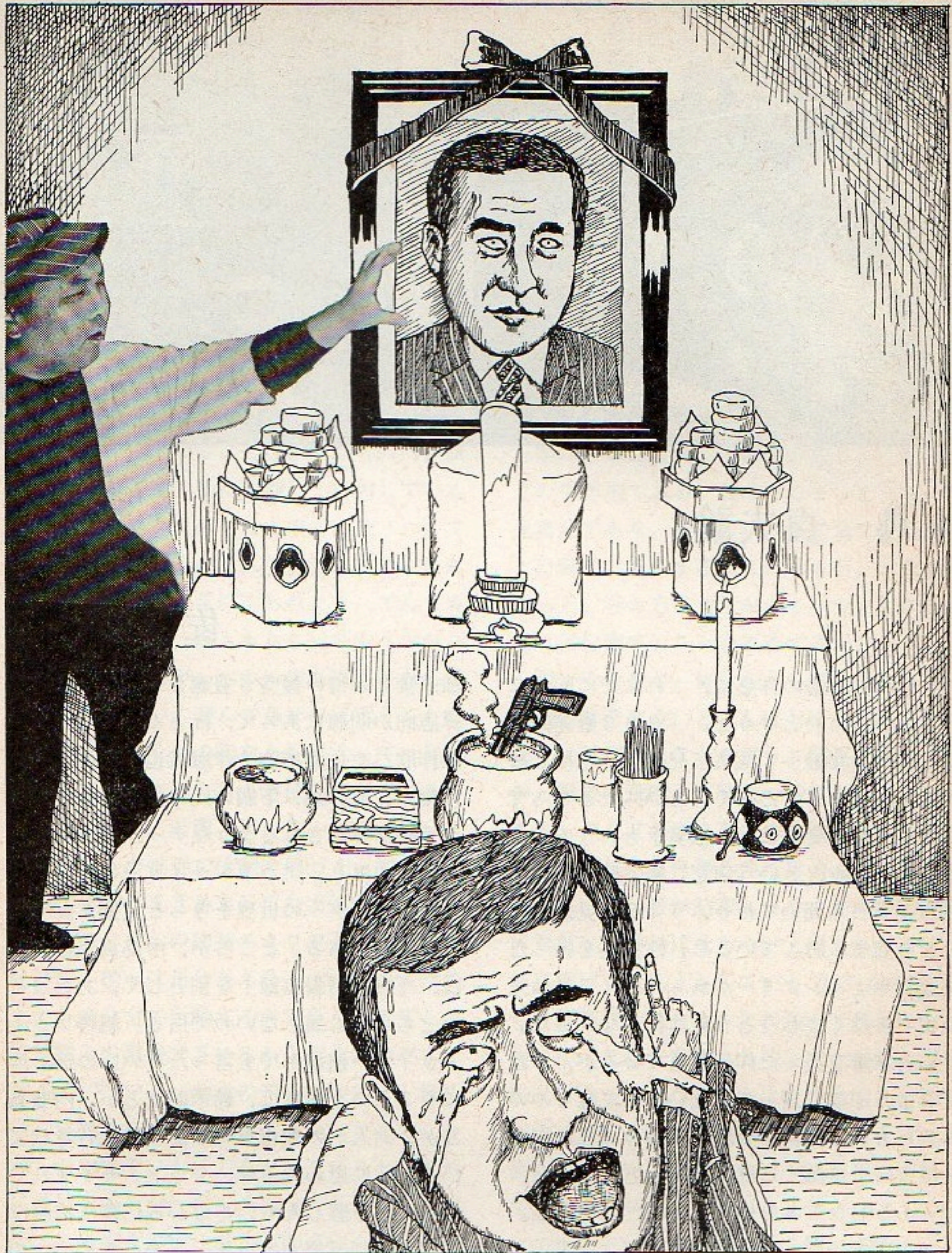
後は清の暴発運動があるだけだ。彼は拳銃を抜き、刑事のひとりを撃ち、逃げて行く。彼も撃たれて血みどろになる。腹からどくどくと血がにじむ。野良犬のなれの果てか……しばらく後、霧島行きの観光バスの座席に、ひとりの青年が窓に顔をむけたまま、血だらけになって死んでいた……

小池清は最後まで霧島に執着したが、それは彼がなにか高いもの崇高なものに憧れる青年であったことを示している。彼のこころの中にはいつも“夢”があった。だがその夢を充すには、組織のからくり人形になるほかに道はなかったのである。そして結局は野良犬のままでたれ死にする以外になかった。しょせん束の間の幻影だけが彼の人生だったのだろうか。

バスの中の彼の蒼ざめた死に顔には、中島貞夫の彼に対する共感だけがこめられているようである。







虚構の世界人間にとって生きるとはなんなのか?! 清は、まるで虚構というナワバリへ実世界から無意味にとばされた鉄砲玉。清の死はムダ死なのだ。そこに虚構を犯すべきいかなる武器があるのか、そこで実世界でのいかなるオトシマエをつけようというのか。現実と虚構の安直なる手打ちによってのつまらぬあまりにつまらぬ死……

それはモノに化すが故の崇高な死ではない。個人の神話。というギマンによってある死なのだ。「勝手にしやがれ」の刑事に撃たれ街に犬コロのように死んだベルモンドほど、ホップな死でもなく、「真夜中のカーボーイ」のバスの中にフロリダ

の夢をみながら死んだダスティン・ホフマンほどおかしくも哀しい死でもなく……

清が向けた銃口、それは決して意外ではない、そう少なくともこの映画の創作者たちにとっては。

清よ、お前をそのように殺すしかなかった創作者を撃て!! 死んで行くにはそれだけの意味がなくては、結局は一人の「不運」な男の物語に帰結するしかない。不条理は現実の矛盾を虚構内に円環させてしまうのだ。虚構の人物たちよ、実人間の虚構の世界に対する思いあがりを撃て!!

虚構の人物にも生きる権利はあるのだ!!





## 中島 貞夫論

中島貞夫監督の作品で、これまでに印象に残っているものという、「893愚連隊」「日本暗殺秘録」「血桜三兄弟」「木枯し紋次郎・関わりござんせん」といったところである。「温泉こんにゃく芸者」というのが素晴らしかった、という声を、鑑賞眼の信頼できる友人から聞いており、うっかり見逃したことを残念に思っているし、性倒錯を扱った長篇ドキュメンタリーがあったが、これは気がすすまなくてとうとう見に行かなかった。特別攻撃隊を扱った作品も見ているが、これはあまり印象に残っていない。特攻隊ものの古典ともいべき、家城巳代治の「雲ながる果てに」を越える部分が殆んどない、と、がっかりしたことを憶えているだけである。

この印象に残っている作品をざっと思いうかべてみると、当然のことながら、そこに一貫した特徴があることが分る。印象的でなかった特攻隊ものを除けばアウト・サイダーの物語りばかりだ、ということである。もっとも、中島貞夫の所属する東映という会社が、やくざ映画とセックスもの、不良もののばかりの会社である以上、これは当然のことであるが、そのアウト・サイダー路線のなかでも、たとえば加藤泰や山下耕作の作品には画面の

「日本暗殺秘録」

## 佐藤 忠男

様式美と人情の優美さ豊麗さへの、一種の上昇志向が明瞭にあって、ほとんど健気だし、深作欣二や佐藤純弥や伊藤俊也の作品には、反権力、反体制、下層の民衆の怨念、といった言葉に要約されるようなテーマがあって、これもやはり、アウト・サイダーの世界からイン・サイダーの世界をきっと見据えようとする姿勢がある。ところが、中島貞夫の作風は、「日本暗殺秘録」を別として、あとはそのどちらにも属さないのである。純粹アウト・サイダー路線とでも言ったらいいのか。他にもこういう作風は、鈴木則文とか、内藤誠とか、何人かの監督たちによって共有されているように思われるが、アウト・サイダーであることを悲しんで、そこから仁義任侠の世界や反体制反権力の世界へと志を高めてゆくというのではなくて、愉しからずやアウト・サイダー、と、ニンマリ笑ってみせるのである。ニンマリ笑ってみせる、というのは、居直ってみせる、というのとは、ちょっとニュアンスが違う。その、ちょっとのニュアンスの違いが重要だ。

「893愚連隊」は、その中島貞夫が初心を表明した宣言文のような作品であり、監督



協会の新人賞を受ける、というかたちで、その宣言が真向うから受け止められた作品である。以来、彼は、この公約に忠実に歩んできているのである。

この作品は、主演の松方弘樹、天知茂をはじめ、あまり華々しいキャストではなく、大物スタアぬきの二線級の顔ぶれで、いかにもそのものふうの小品であるが、内容的にも、はなばなしい見世場をわざと外したような、小味な喜劇的な扱いに特色があった。場所は京都で、松方弘樹をはじめ、四、五人のチンピラ・グループの行動が描かれる。チンピラだから、やっていることはケチなもので、駅前のタクシー乗り場に出没して行列している人たちを白タクにあっせんする、というていどのことである。それで警官にどやされたりタクシーの運転手に追われたり、てんでカッコよくないし、本人たちも、多少イキがったところはあるが、べつに男を売ろうなんて考えてもいない。遊んで暮せれば言うことなし。なまじやくざの組なんかに入って、兄貴分たちにどやされたりこき使われたりするのはまっぴらだ、と思っている。やくざは、アウト・ローの世界で体制を形づくっている。そんな体制にまき込まれてたまるか、というところに、彼らの独特のスジの通し方があるわけだ。彼らは自分たちを、やくざのように上からの命令で行動するのでなく、やることは協議と多数決できめるから民主主義だ！と思っている。地元のやくざの組は、彼らを、自分たちの組に吸収するか、さもなくかぶつつぶすぞ、と圧力をかけてくるが、これに抵抗するのが、彼らの意地でもあり、生甲斐でもあるらしい。そこが面白い。

このチンピラたちの思想は、ほとんどそのまま、作者である中島貞夫の映画作家としての仕事のやりかたを語っているようである。必ずしも芸術的な作品ばかりをねらわない。社会派的正義派的な方向を目ざそうとも思わない。小粒で二流の娯楽作品でかまわない。人を指導しようとしたり、人に尊敬されたいようとは思わない。が、しかし、人に指導されることもおことわりであるし、体制に巻き込まれることもしない。そういうやりかた

でどこまで行けるか、やってみようじゃないか、というのだろう。

そういうゆきかたをしようとするとき、それに対立する者が三つ、現れる。ひとつは、言うまでもなく、彼らを吸収するかぶつつぶそうとするやくざの組である。中島監督自身、「鉄砲玉の美学」の抱負を述べた言葉のなかで、裏目読み批評を拒否したいと言っているので、あえてたとえ話をするのは気がひけるが、これは、たとえば会社の商業主義であろう。主人公のチンピラたちは、これとは正面衝突することを極力避けてゆく。

第二の対立者は、天知茂の演じる刑務所帰りの中年男である。彼はこのチンピラたちの兄貴分であり、刑務所から出てきてまた彼らと行動をとともにすることになるが、どうもちょっと、考え方にズレがある。やくざに命令されて行動することを拒否する、という点は一致するのだが、貧しさから這い上るために頑張るやろう、と、しばしば、眉間にシワをよせて悲愴なことを言う。刑務所に入る前の、戦後の荒廃した時代の感覚のままなのである。やくざの組に入るのを嫌がるのも、特攻隊くずれた自尊心のためのようである。だから、弱い者が結束してやくざの組の搾取に対抗しなければならないと考えるし、やくざに虐げられようとしている女には同情もし、義狭心も見せる。ただ遊んで暮したいために小さな稼ぎを細々とやっていられればいいというチンピラたちとは、ことごとに意見が違ってくる。これは、たとえば言えば、芸術派、あるいは社会派の同僚の映画作家たちであろう。チンピラたちは、彼とは考えが違っても、とにかく共同戦線を保ってゆく。そして、彼がやくざたちと真向うから勝負して倒れたあとでは、その復讐戦にのり出す。

第三の対立者は獅子心中の虫である。チンピラたちがキャバレーに遊びに行くと、受験浪人の小僧っ子が生意気そうに遊んでいる。生意気だというのでとっちめて、ついでに自分たちの仲間に入れてやる。愚連隊のイロハから仕込むと、スジがいいのか、人妻を誘惑して情婦にしてバアに売り飛ばす、というような仕事にメキメキと上達する。この若僧、





じつは全く悪い奴で、チンピラのグループにやくざの組から圧力がかかると、当然のことのようにグループを裏切り、グループの中のスパイになって彼らを組に売り渡す。この若僧は、たとえば言えば何者か。まあ、強い奴へ強い奴へと尻尾を振っていく奴はどこにでもいるだろう。じつは、この映画でいちばん面白く描けていたのはこの若僧である。

こういう三つの対立者とからみ合わせながら、チンピラたちの行動が、半ばは喜劇的に、半ばは大真面目に描かれているところがこの映画の特色で、バカな奴らの話のようだが、じつはこれは他人事じゃあないんだ、と言っているような、身につまされるおかしさがあったのである。

「日本暗殺秘録」は、幕末の井伊大老の暗殺、明治初期の大久保利通暗殺からはじまって、二・二六事件まで、近代日本の政治的暗殺事件を、つぎつぎに並べてみせた作品である。かなりの長尺で、おそらく、中島貞夫のいちばんの大作だと思うが、あるていどの尺数を使って、ドラマとしてまとまっているのは、井上日召の血盟団に参加して昭和七年に当時の大蔵大臣井上準之助を暗殺した青年のエピソードであり、他には二・二六事件にいくらか触れているだけで、あとの事件はほとんど殺し場だけを並べたものだった。その殺し場の連続がなかなかすごかったことと、このころから日本映画の残酷描写のエスカレー

### 「血桜三兄弟」

ションが目立ったことがあって、この映画は、政治的事件に名を借りて、残酷描写だけを見世物的に羅列したものと見られ、商魂だけの作品ではないかとうさん臭がられもした。

しかし、この作品は、十分に成功したものではなかったかもしれないが、そうとうな野心作であったことは確かだと思う。残酷な殺し場の羅列は、さいごに、二・二六事件の被告たちが銃殺刑にされるところでクライマックスに達する。十字架に縛りつけられて並べられた青年将校たちが、端から一人々々、正確に照準を定められた小銃で額を射ち抜かれて死んでゆくのを横移動で撮ってゆくのであるが、青年将校たちはみんな、「天皇陛下バンザイ!!」という言葉で声を限りに叫んでは額から血しぶきを噴きあげて死ぬ。この言いようのない残酷さの中で、これでもか、これでもかとばかりに「天皇陛下!!」という言葉が繰り返されることの壮絶さ。政治と天皇制の残酷さ。それがこの作品の言いたかったことか、と納得がゆくのである。

もっとも、それだけではやはり、残酷見世物映画にさいごにちょっとした弁明がついていただけだ、と思われるかもしれない。しかし、この作品のほぼ半分を占めている血盟団の青年のエピソードは、たんなる残酷映画とは言えないシリアスな内容を持っている。千葉真一の演じるこの青年は、茨城県の農村の



身で、昭和初期の不景気のさなかを、小さな商店や工場に転々と勤め、真面目に正直にやろうと努力すればするほど社会に裏切られ、愛する女も救えない。そして正直者がバカをみるという現実をいやというほど思い知らされて、絶望のどん底につき落されたうえで日連宗の信仰に入り、その信仰上の指導者であった右翼思想家井上日召（片岡千恵蔵）の下でテロリストになる。このエピソードでいちばん印象的だったシーンは、絶望した青年が、着物にマントを羽織ったまま、故郷の海岸の波打際にひざまずいて、いつまでもいつまでも、涙をボロボロ流して嗚咽しつづけるところだった。カメラを据えっぱなしにしたロング・ショットで、砂浜を両手で叩くようにして絶望に身もだえする青年を見つづける。この青年はやがて右翼に走り、憎むべきファッショスト、テロリストになるわけだが、これだけ深い絶望に身をさいなんだ者を、いったい誰が批難できるか、といったおもむきがそこにあった。この映画の、なんとも言えない息苦しさは、殺し場の残酷さもさることながら、殺人によってはじめて解放されるテロリストの暗い心を内在的に掴もうとしたその姿勢によるものだとと言えるだろう。

「893愚連隊」のチンピラたちの、遊んで暮せば何も言うことはない、という生きかたと、この「日本暗殺秘録」のテロリスト青年の生真面目な思いつめかたではずいぶん

違うようであり、そこには、前者が中島貞夫自身のシナリオであるのに対して、後者は悲壮美に充ちたかすかすの任侠映画のライターである笠原和夫のシナリオであるという差は明らかにある。しかし、最下層の、杵からはみ出た若者の、俺にはこういう生き方しかない、という一点に向って描写を集中してゆくゆきかたはおなじである。カッコ良さ、とか、正義とかいうより、まず、飢えがあり、どうにもがまんのない生活というものがあって、そのうえに、杵からはみ出た若者の生きるかたちがある。そういう描き方の筋道は一貫している。いいも悪いも、これしかないじゃないか、というところを、どこまで確かな手応えをもって描けるかが中島貞夫の作品の勝負どころなのである。

「血桜三兄弟」では、そういう問いつめの果てにケッサクな人間像を生んでいた。みんなからバカにされているチンピラが、誰からも警戒されていないために、ひょいとしたひょうしに大物を倒し、おまけに、さいごの悲愴な殴り込みには、ノコノコついては行ったものの、途中でちょっと小便がしたくなり、立小便しているうちに、置いてけぼりにされて、助かってしまうのである。これを演じたのが荒木一郎で、「日本暗殺秘録」のテロリスト青年は、じつはこの荒木一郎のように生きられたら良かったんだ、と、はるか想いをこらして描き出しているように思われたのだった。

「木枯し紋次郎・関わりござんせん」





## ネチヨ ネチヨ 生きられなかったアイツ

「893愚連隊」と「鉄砲玉の美学」とKという

今から10年ばかり前の話だが、私の親友にKというチンピラがいた。チンピラとは言っても、私と一緒にいる印刷会社で働いていたのだから、足を洗ったチンピラといった方がより正確だろう。Kは、高校時代に唐手をやっていた。だから、堅気になっても、喧嘩があると、5、6人のチンピラなど、1人でたちまちノシてしまう、というエピソードがいくつもあった。

Kの本拠地は池袋であった。そして、高校時代から、愚連隊の予備軍として活躍していたらしい。ある時、Kは失敗をやらかして、どうしても指をツメなくてはならない羽目になってしまった。だが、Kの母親が、兄貴分だか仲間だかに泣きこんで、指をツメることだけは許された。その代り、左手の小指と薬指との間をドスで裂かれることになった。そのキズは、私に思い出話をしてくれた当時もなまなましく残っていた。

Kは、サラリーマン生活をかなり一生懸命やっていたように思う。他の社員が愚痴をこぼすところを、Kはいともほがらかにやってのけた。前身をおもんばかり、足許をみすかすような、上司からの仕事の押しつけも、かなり楽々とやってのけた。ただ、Kの前身をしのばせるものは、その恰好ばかりであった。キレイにドライヤーをあてた髪、三つぞろえのダーク・スーツ、先の極端にとがった靴。そして、Kは歩く時、いつもガニ股のような恰好で歩いた。

上司の命令は至上命令として受け取ったKも、おしゃれには目がなかった。そして、盛り場へ出ると、ガラリと態度が変わった。まるで、盛り場全体をのんでいるのである。Kと、Kが言うところの“高ヤン”こと私は、連れだって、よく池袋の路地裏を歩いたもの

だった。ゴキゲンな喫茶店に入り、ホステスにウINKする時のKは生き生きしていた。だが、少しでも気に入らないような男が近くにでもいると、その目つきはおそろしいまでにけわしくなった。

Kは、母親とたった1人の妹には弱かった。母親は、たしか池袋で連れこみ宿などやっていたらしいが、“オフクロさん”は前述のエピソードでも分かるように、Kの愛情の対象であったらしい。その後、Kは堅気の娘さんと結婚した。よかったナ、と思っていると、1、2年して現われたKは、私がやめた後でその印刷会社をとび出し、嫁サンとも別れたと語った。それがなぜか、はKは私に話したがらなかった。今から7年ほど前——Kのその時の商売は、不動産屋であった。不動産屋で何をやっているのかも、Kは話したがらなかった。おそらく、用心棒だろう、と私は察した。

その後、生きているのか死んだのか、あるいはヤクザの大幹部におさまっているのか私は知らない。

だが、私はあの当時のKが今でも好きだ。日活のヤクザ映画スターにでもしたかったようないい男だった。喧嘩は強いが、人間のもろさと強さの軌跡を、スッパリ私に見せてくれたK。私は、もう一度あのチンピラに会いたい。

中島貞夫監督「鉄砲玉の美学」——この映画で面白いところは、主人公の小池清（渡瀬恒彦）と、その日常生活を代表する“スケ”，トルコ娘のよし子（森みつる）と清がバイをする“兎”との対比である。マージャンに負け、サントリー・レッドをがぶのみする清にみついでくれる人間は、アパート住まいの、さっぱりツラのよくないトルコ嬢。そのアパ



チンピラについて

## 高沢 瑛一

ートには、清の生活のもとである“兎たち”が、白い毛に赤い目玉をパチパチさせながらしじゅうエサに飢えて、口をもぐもぐさせている。白くて暖かい兎と、深情けのトルコ嬢のアパートの中で、センベイ布団のぬくもりにひたりながら、トルコ嬢を抱いたであろう清。だが、この甘い甘い生活は、鉄砲玉として九州へ送りこまれるという“非日常”への引き金となった。

“血の気が多くて……クソ度胸があって……出来るだけでかい音をたててハジけるヤツ”——関西に本拠をもつ広域暴力団の注文通り、現ナマ 100万とハジキを手にいれて、清は、兎とトルコ嬢との日常生活をとび出した。「わいは、天佑会の小池清や」と見得を切るだけでふるえあがる九州の暴力団。ハクイスケに、御機嫌なホテル住まい。組織が言うところの“鉄砲玉”の意味も知らずに、清は組織の罠にはまっていく。

だが、組織の思惑とはちがって、清は本質的に臆病者で、肝心な時にハジけることができない。いつの間にか、天佑会と九州の暴力団との間に手打ちが成立し、“鉄砲玉”とし

ての清の存在理由はなくなってしまうのだが清は、まったくそれに気がつかない。それから、転落また転落——すべてが幻想となってしまう時、清は堅気の女とのイザコザで警官を射ってしまい、自らも瓦礫の中でくたばっていく。

このみごとなズッコケぶり！ この大喜劇としての幕切れ！ 私は、こんなにもありふれた清のバカぶり、そのズッコケぶりが大好きだ。清の死の中に、私はあのポーランド映画の大傑作、アンジェイ・ワイダの「灰とダイヤモンド」のマチェクの死を、何の脈絡もなく思い出していた。

党という組織の個人に対する裏切りによって、瓦礫の中で殺されていったマチェクの死。小池清の死は、たかが数日のうちに 100 万円をつかってみせるという、きわめて単純で非政治的な、欲望の、あまりにも日本的な状況の代償であった。

だから、観客である私たちにとって、もっともリアルな個所は、清が転落していくプロセスの中で、トルコ嬢がやってきて、清に日常生活への復帰を求めるところである。清は本質的には、彼が飼っていた赤い目玉をした兎と同じである。

もともと、ジメジメして、なまあたかくて、居心地よい穴グラからぬけ出したくない臆病兎。トルコ嬢の説得は、清が無理してかわり合っていこうとする非日常よりもリアルであった。

「893愚連隊」





清の“非日常”，つまり金と武器をもってハジけてみせる，ということは，おそろしく観念的な作業であった。そのリアリティのなさ，おそろしくズッコケて，その観念のありようが，われわれ観客にまでスケスケに見通されてしまう。だから尚更，トルコ嬢と兎が代表する日常の淀みの方がリアルに迫ってくるのだ。

だが，清は「893 愚連隊」で松方弘樹の愚連隊が，「いきがったら，あかん。ま，当分はあかん。ネチョネチョ生きとるこっちゃ」と言って非日常からひっこんでしまったように，巧みに身を処すことを知らない。むしろ本来の目的よりも，あらぬ方でハジけフットンでしまうのだ。鉄砲玉として己れ，あるいは組織に向けてハジけることもできず，不気味な日常の中にのめりこんでいくこともできず，いともおさまに。そのありようは，あさま山荘事件で，連合赤軍たちが，その後の森恒夫がたどってきた精神構造に似ていなくもないように思われる。

中島貞夫の昭和41年作品「893 愚連隊」はいわゆるチンピラもの，鉄砲玉映画の中で，日本映画が生んだ傑作だ，と言ってよいだろう。この種の映画では，増村保造の「やくざ絶唱」や，舛田利雄——小沢啓一ラインで，渡哲也を主演にした「無頼」シリーズなどが印象に残っている。だが，それらの作品は，志向していく所は同じだが，それぞれテーマもニュアンスもちがう。「鉄砲玉の美学」に結びつけようとする時，やはり同じ中島監督の，あの名作「893 愚連隊」を思わずにいられない。

「893 愚連隊」のストロー・ハットの愚連隊たちは，まるで組織からはズッコケた男たちであった。「ほんまに，しのぎにくい世の中」に，彼らは「愚連隊は民主主義やで」と信じている。白タクの客引きやスケコマシといった爪に火をともすようなしのぎの中で，彼らには組織のピラミッドはない。その日の稼ぎを公平に分けて，しのぎをするという民主主義だ。彼らの夢は，自分たちを事毎に痛めつける暴力組織とはりあって，大金をせしめることであった。

だが，その夢がついえた時，「当分，ネチョネチョ生きとるこっちゃ」ということになる。当時，この「893 愚連隊」をみたわれわれは，雨で血のように赤くしょぼくれた赤旗のイメージを抱きながら，60年安保の終った学園を去り，尚更に強固になった反動組織の枠におさまリ，果しのない日常の中で，かなりズッコケた惨めな己れを抱えながら，この「ネチョネチョ生きとるこっちゃ」というセリフに支えられていたものであった。それから7年，まだ，われわれは「ネチョネチョ生き」続けている。

だが，「鉄砲玉の美学」の清は，この時点で，ついにがまんできないようにハジけてしまった。そして，やはり，かなりあらぬ方向へ向けてハジけてしまった。これは，いったいどうしたことなのであろうか？

清が，「893 愚連隊」で松方弘樹の演じたチンピラと似た精神構造をもっていたのは明らかである。だが，7年前のチンピラは自己をも当然含めた既存の組織を冷静に見つめ，批判し，やることだけはやってのけ，日常にまた返るという余裕があった。自分と非日常のかかわり合いを，冷静に読んでいくユトリがあった。だが，清には，そうした余裕はない。「早くやっしまわんと」どうなるか分かったものではない，という切羽つまったところがあるのだ。彼のズッコケぶりは，いろいろな意味で私は大好きなのだが，それがどううつるかは，観客それぞれの姿勢のありようだろう。「893 愚連隊」では，かなりきばったはずの荒木一郎が，ここでは，マージャン屋でその片鱗をみせるだけというのも面白い。

任侠の美学のみを謳い続けてきた東映の中で，中島貞夫だけは，「893 愚連隊」以来，ズッコケた男たちの青春を描いてきた。こうした中島流の青春像を，裕次郎から渡哲也に至るまで，全社あげて描き上げてきたのが日活だったのだが，小沢啓一の最後の傑作「関東破門状」を最後に，その幕を，閉じてしまった。その主人公，渡哲也は何とガランとした映画館の中にまで，血にまみれたドスをもって敵を追って行ったのである。



## 見放されたうさぎの中の清



押川 義行

青春映画である。

テンピラの清は、にせアンゴラうさぎの売人だが、実は自分こそ、大きくならない程度にしか餌を与えられていない飼育殺しのうさぎであるとは、もちろん気がつかない。ただ、若者らしい粗雑な夢を持ち続け、それが報われないことにイラ立っている。札ビラを切る豪勢な生活、むらがるお高い美女たち、それによって自分に集中する世間の耳目。——その点で彼は、スターに憧れるタレント志望の若者たちと、何の変りもない。自分の属する社会を土台にしてしか、ものを考えることが出来ないだけだ。

そんな彼が、思いがけなく突然脚光を浴びることになった。としたら、その青春はどう変るか。

それが、この映画のモチーフである。

やくざの世界とは限らない。スポーツや芸能の世界にだって、似たような話はわんさどあるはずだ。監督・中島貞夫が敢えてテンピラやくざを取り上げたのは、それが彼の扱い馴れた素材だから——ではなくて、むしろ、最も純粋に人間くさい存在だったから、であろう。

われわれだって、時にはやくざに憧れる。その怖いもの知らずの睥睨の魅力で。そのウムをいわさぬ行為の威丈高さで。そして、常識をせせら笑う、単純明快なその生活意識で。

テンピラ清が、ほんの一時のあてがいブチとも知らずにその特典に酔いしれたのは、むしろ当然なのだ。組織は彼を、縄張り拡張のための起爆剤として利用したにすぎないが、清にとっては、それこそが長い間夢みて来た“ほんとの人生”への第一歩だった。何んの裏付けもない彼の青春は、こうしてマッチのように一瞬の光影を放ち、はかなく消える。

都会のあさましいばかりの食欲と、捨てても捨てても溜まるばかりの廃棄物。一転して、大きくしないために僅かな餌で飼われているうさぎと、それを売る清。出だしのそんな描写が、ゴミのような清の立ち場を端的に表現して、まず効果を上げる。が、この映画が従来のいわゆるやくざ映画とハッキリ線を劃しているのは、主人公・清を操っているボスと、その謀略に押されて“鉄砲玉”の清に手を出せないでいる相手方——つまり、やくざ映画でいえば一方の立役となるべき悪役を、全く画面に登場させない点だろう。それが、冷酷さ非情さとして清の青春を踏みにじって行く無気味な存在を、却って強烈に印象づけることになる。

彼らは、ただ無表情な声だけで清を操り泳がせる。一方清は、捨て金として与えられた百万円とハジキの威力に小おどりし、敗者からいきなり勝者になった青春のダイゴ味に有頂天の有様なのだ。要するにボスたちは、清のそんないじましい青春をクローズ・アップ



するための、無色の存在であればこと足りる。野上龍雄の脚本は、あざやかにその視点をとらえた。

エリート女性・律子とのかかわり合いにも、清のひとりよがりの青春図が、みごとに浮き彫りされる。三人の若者に輪姦されている律子を清が救う結果になったのは、単にハジキをちらつかせたからにすぎないのだが、それが彼を二重の優越感に浸らせることになる。まず三人の若者を縮み上がらせた。次に“上流の女”を支配下に置いた。トルコ娘のヒモにすぎなかった清の、優者の快感はたちまちふくれ上がる。飼われていた身が飼う立ち場に変ったのだ。その無邪気で無器用な喜びの描写が、非常にいい。

いざとなるとハジキ一つぶっ放すことも出来ないウブなやくざ清は、こうして次第に平凡な若者の姿をさらけ出して行く。借りもの

に保証された目先きだけの青春が、冷静なおとなたちの計算で砕け散るのに、時間はかからない。

森の石松が喜劇ではなく悲劇の主人公だったように、チンピラ清も彼の青春を悲劇でいろどった。実は見放されたうさぎにすぎないのだが、彼が執念のように霧島岳に辿りつこうとして果てるラスト・シーンは、一人の若者の孤独感を、見る者の胸にしみ込ませる。吹けば飛ぶような一匹のチンピラ。その青春などに何ほどの価値があろう。しかもなお、人々は、彼の青春を悼まずにはいられまい。彼が無意識のうちに欲したのはたった一つ、“自由”だったのだから。

渡瀬恒彦の好演は注目されていい。ドラマチックであるよりは、むしろ乾いたその演技には、兄・渡哲也とは対照的な“現代”が閃いている。

## 調理されない素材

潤子を演ずる杉本美樹―渡瀬恒彦のやくざのチンピラが、自分の青春の暗い穴を、あがいてかけのぼろうとするロープの役目を果すのが、潤子―杉本美樹のドキュメントな女優の姿だった。

渡瀬というカッコいい若者が、なぜにドロ臭くてセンスのない杉本美樹の妖術にかかってしまったのか。

カッコよさはドロ臭い。ドロ、にひとたまりもなく埋まってしまう。世に。ドロ臭い。バイタリティほど。おそろしい。ものはない。

この映画の杉本美樹は、表面の華麗さとはうらはらに、素顔のドロくささが、微動だにしない。

その。ナマ、のニュアンスが中島貞夫監督の狙う。女のナマの性、だったのではないだろうか。

チンピラの清(渡瀬)はウサギの子を売り、年上のトルコ娘と同棲しているいわばヒモで

## 川島 のぶ子

ある。

都会の隅にうごめく、暗い谷間の若者像が鮮烈に浮かび上がりすぐれている。その空虚な生活感が描出されるくだりである。

清は集団就職のコック見習だった。それがチンピラになり、やくざの幹部の命令で、ピストルと百万円をフトコロにして鉄砲玉のようにはじけようとする。

清は町でフェアレディのスポーツカーを運転する潤子の杉本美樹に出合い、心を奪われる。

彼女は地元の幹部杉町(小池朝雄)の情婦だが、杉町から派遣された女だ。

そして清のホテルにやってきて、「すべて私には関係のないこと、私には断わる自由はあるわ、私にはその時々最高の男性にしか興味がないのよ」

という。

清にとってこれまでの青春は満たされない日々であり抑圧されつづけみじめだった。い



つかは最高にいい女をこの腕の中に……そしてフトコロも重くなる日もあることをユメみていた。

男にとって「最高の男性にしか興味がないのよ」といい寄られたら、清ならずとも有頂天になるだろう。

二人は当然のようにベッドで裸身をからませる。

ベッド・シーンにオーバーラップするのが清の過去なのだが、これまでみられなかったベッド・シーンの処理方法である。

清自身の生いたちと集団就職人間の哀しみが自然と巧みに表出されているのだ。

それは喘ぐ杉本と清のセックス描写の中でコック姿の清が露地でゴミを棄て、道行く女性のセクシーな肢体に心を奪われるシーン、清がトイレにしゃがみ丹念に落書きをする。日活ロマンポルノや従来ポルノシーンにはみられないとらえ方だ。

いま「最高の女」をその腕の中に、組みしだしている「幸福」の一瞬である。

だが、この渡瀬と杉本のベッド・シーンはいささかも足りない気もする。そうしたベッド・シーンの迫力シーンが目的（見せ物）ではなかったことをつぎの場面でハッキリしてくる。

ベッドルームで清が潤子に向かって、「這え、はい回るんだ、ほえろ、ワンとほえろ！」

と強要する。

潤子は裸で「ワン、ワン、ワン」と這い回る。清が優越感にひたる。

この場面は、女もそして男をも従屈させようとする願望が凝縮しているといえる。

清が潤子を征服した時点で、「平凡な青年」の素顔をみせはじめてゆく。

「猛ける男」にとって最大のカンフルは、女の優しさと「従屈」なのかも知れない。

清は24才の誕生日をホテルで迎えて、彼はパーティとドライブを計画するが、彼女はメモを残して消えてしまう。

そして終局を迎える。

刑事に追われて撃たれ、逃げのびて観光バスの中で死んでゆく。

はかなかった鉄砲玉の青春、僅か数日の充実した生きざまであったのだ。

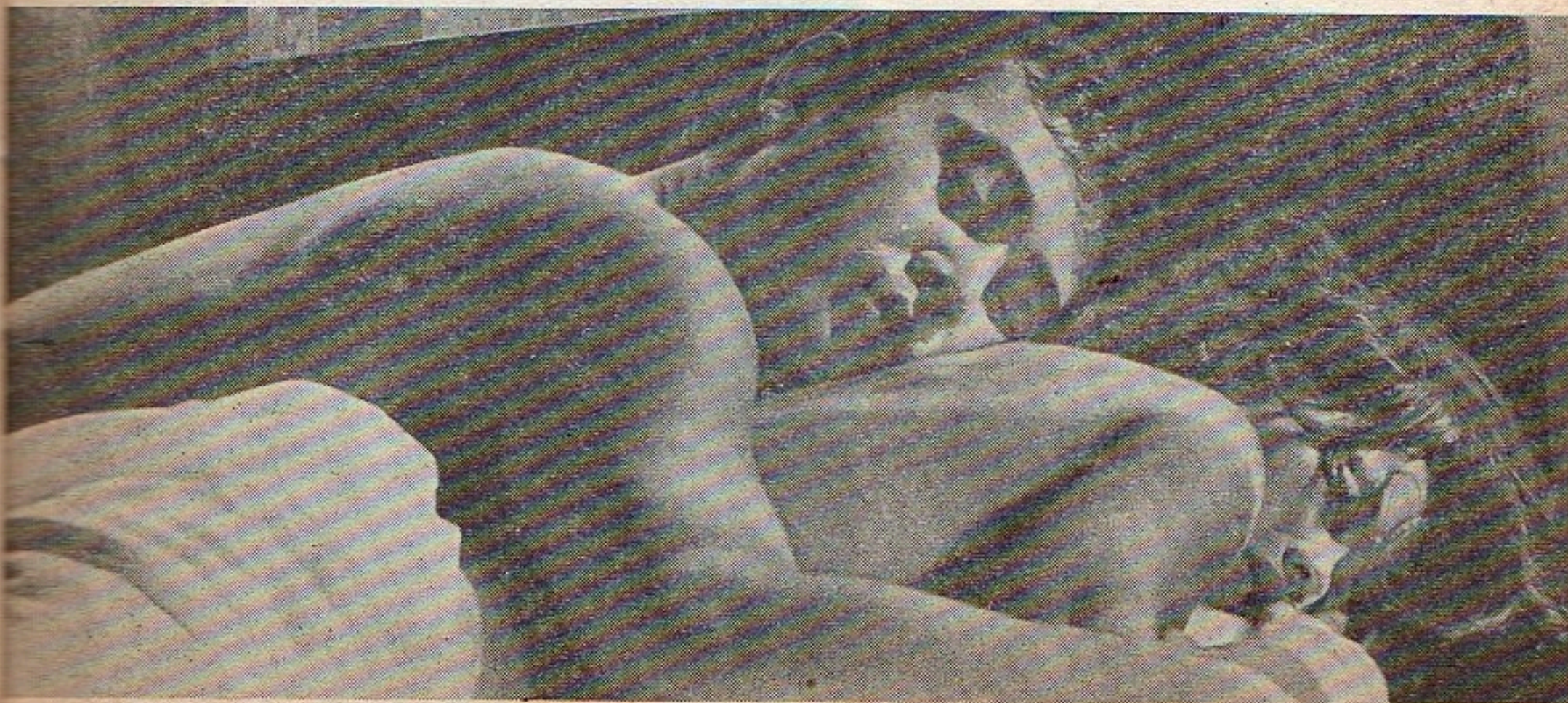
この清の青春をはじけさせた潤子役の杉本美樹は、これまで、東映ポルノ路線で売られた女優だが、決してうまい演技者ではない。

それに美女でもない。いまの世代の女くささ、ナマな現代の若い女の感触がそこにある。その未消化であり、調理されない「素材」をそのまま、中島貞夫がマナ板にのせた。

それも煮たり焼いたりの加工はしなかった「ナマ」のままのパーソナリティをストレートにはじき出した。

杉本美樹の女優として開花しないナマの魅力がうまくドラマに融合したといえる。

それだけに杉本美樹には無限の楽しみがある。





## 中島貞夫、自己を語る

### 1

くわしいことは知らないが、中島貞夫監督がATGで「鉄砲玉の美学」を撮るようになったのには、彼が契約している東映首脳部のかなり積極的な意向が反映しているらしい。つまり、彼は、東映とは無関係なかたちでこの仕事を実現したのではなく、むしろ東映もその結果を期待するようなかたちで「鉄砲玉の美学」にとりかかり、完成したのである。

これは、ATGと提携して仕事をする監督としては、特殊なケースといえるだろう。

もともと、ATGは、大会社のなかで思ったような仕事ができない作家たちの抑圧された創作意欲を思いきり発揮させる場の役割をもっていたし、現在でもATGのタテマエはそうであるはずだ。たとえば、岡本喜八監督は、東宝では企画にのらない「肉弾」をATGと提携することによって作品化した。「肉弾」は経済的には成功しなかったようだが、一九六八年度のキネマ旬報ベストテンの第二位にえらばれたし、同年の芸術祭では文部大臣賞を受賞した。

こんどの中島貞夫の場合は、そんなふうではなかったようだ。むしろ、東映が、ひとつのテスト・ケースとして、彼にATGとの提携作品を監督させた——といった意味合いが感じられる。

中島貞夫は、「鉄砲玉の美学」をやってみた結果の感想として、ATGの仕事は、「かなり自己規制が必要なんでしょうね……」と語った。

「そのへんでちょっと（自分が）甘かったなあという感じ、しますけどね。なにしろ、ほかからの規制にはなれきってたでしょ。それがドーンとひっくりかえりましたものですから……。終ってみてからつくづく思ったのは、それですね。もっともっと自己規制しな

くちいかんと……。」

「鉄砲玉の美学」は、中島貞夫にとって、東映以外でするはじめての仕事だった。それは、いい体験になったようである。

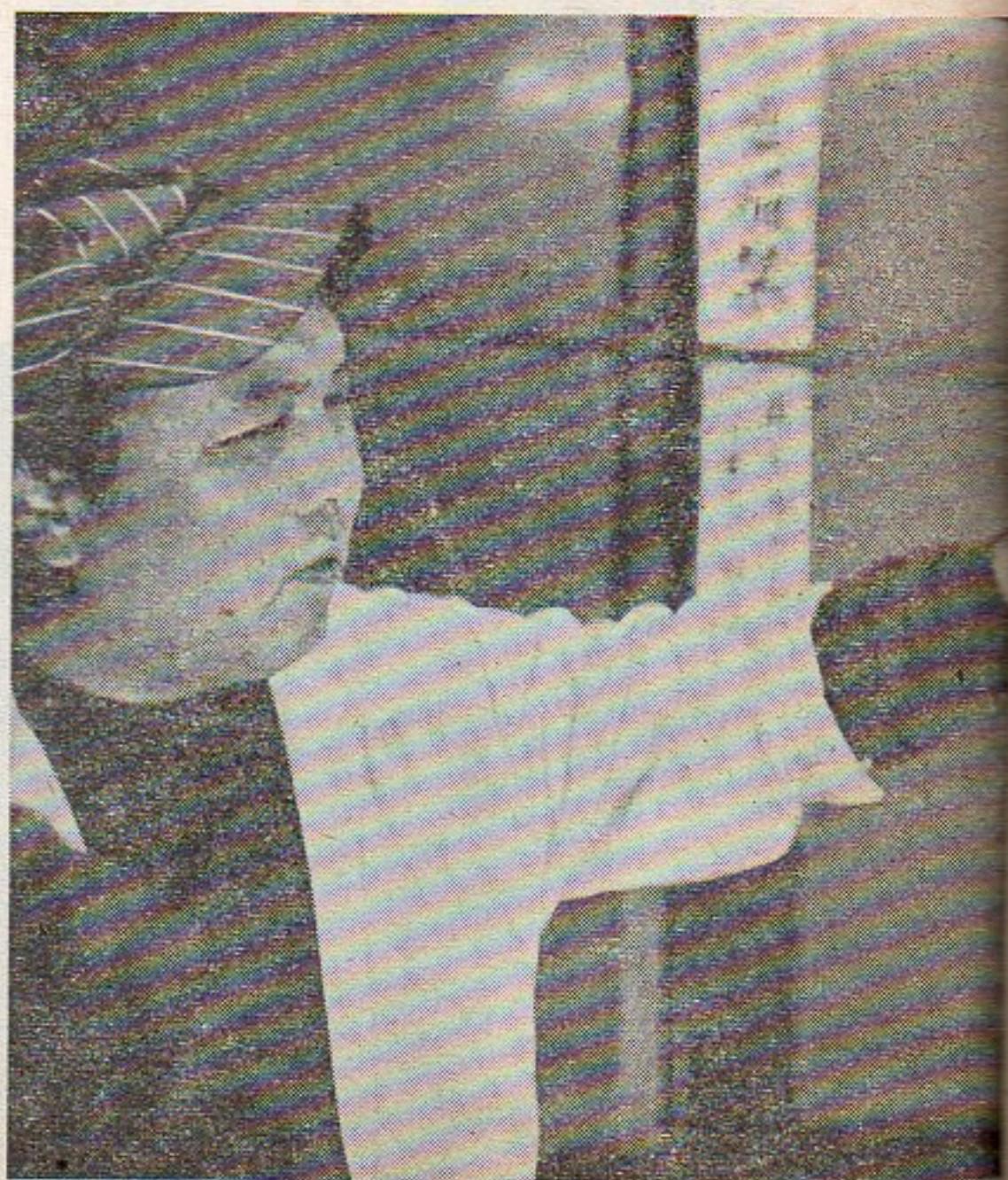
### 2

中島貞夫は、昭和九年八月八日、千葉県東金市（当時は町）で生まれた。家業は、醸造業であった。

「おやじが戦争で死にましたんで、その後はほとんどやってないような状態でしたが……。味噌ちょっとと、その原料になるコウジ……これが主体でした。」

そういう仕事をしている家は、東金に何軒かあった。「土地の旧家なんですか？」ときくと、

「そんなに旧家じゃないと思うけど、多少土地山林家作はあった。」と、答えた。いずれにしろ、地方のいい家の生まれであること





## 品田 雄吉

はたしかなようだ。五人兄弟で、彼のうえに姉がひとりいた。長男である。

昭和十六年、東金国民学校入学。その年から学制が変わって、小学校が国民学校と呼ばれるようになった。彼らが国民学校を出た翌年から、また学制が（敗戦によって）かわって小学校と呼ばれるようになったから、中島貞夫のクラスは、国民学校の第一回生であり一年から六年まで国民学校だった唯一の年代ということになる。つまり、大東亜戦争の推移とともに義務教育時代をすごしたわけだ。

だから、六・三・三・四制の最初の中学生でもあった。

「学制の変革にはぜんぶぶつかりました。新制中学へ入ったときも、しばらくは校舎がなくて遊んでられたというやつですよ。」

と、彼はいう。新制中学は、東金中学校である。

中島貞夫のしゃべり方は、やや早口で、自分のことを語るときに、ひとつとのように表現するくせがある。ただし、口数は多いほうではなく、そのしゃべり方には、照れが感じられる。早口なのも、自分のことをひとつとのないいい方でしゃべるのも、多分、そのせいなのだろうと思われる。そう大柄ではないが、肥り気味で、野性的なエネルギーを感じさせる風貌の持主だが、おそらく本質的にはシャイな人間なのではなかろうか。こういうタイプの人物は、自分主張や自己宣伝をあまりしたがないので、話をきき出すのは、あまりやさしくない。しかし、あまり大声でしゃべらないところが、かえって一種の人間的迫力になっているような印象もある。デリケートな神経を内にかくした野人——とでもいったらいいだろうか。

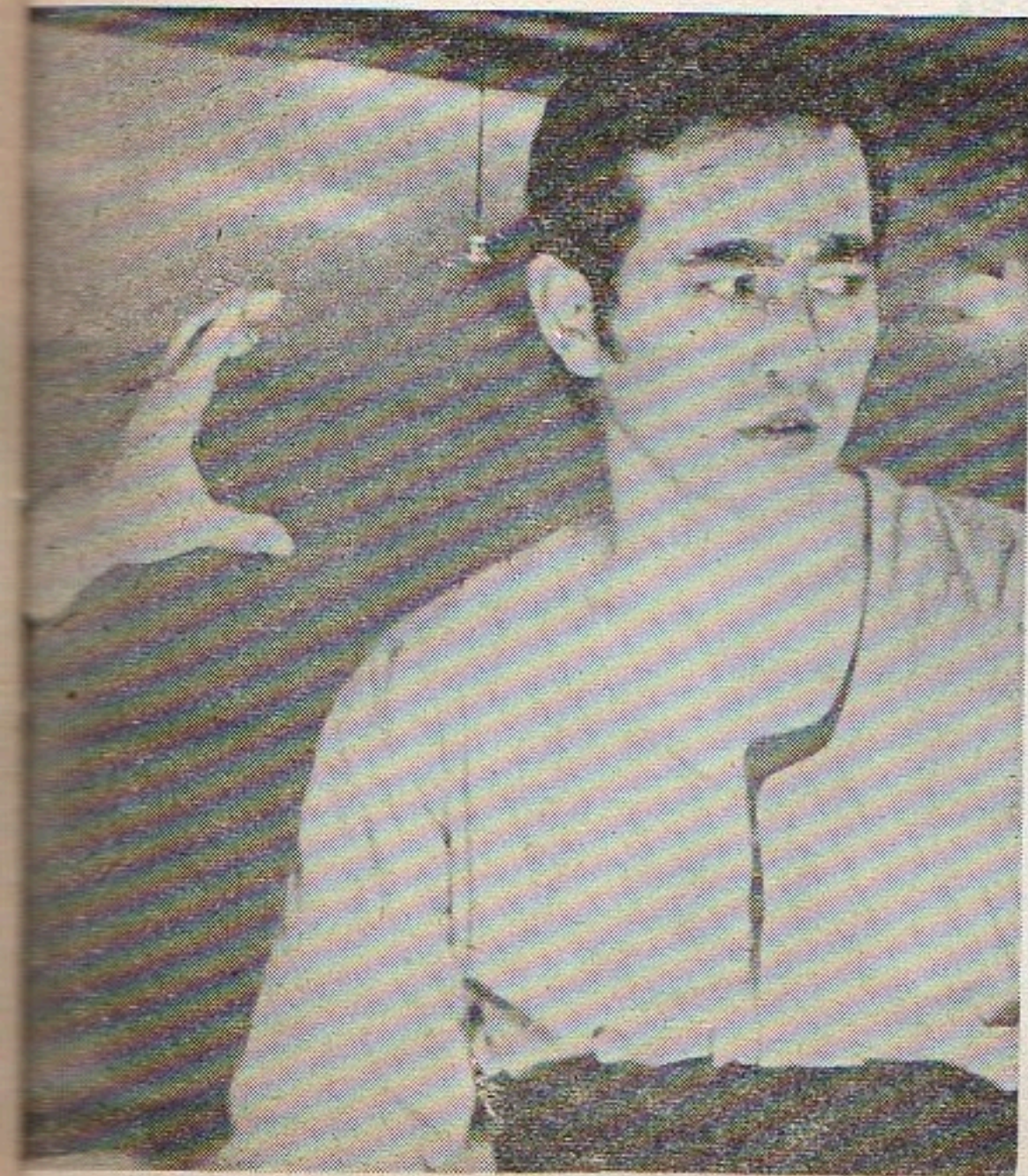
### 3

東金中学を卒業すると、東京の高校に入った。日比谷高校である。なぜ、地元の高校に入らなかったかというと、事情はつぎのようなことになる。

「地元の高校は、学区制ができて、もとの女学校へ行かなくちゃいけないんですよ、男女共学になって……。それが、おふくろや姉が出ている女学校なんですね。どうしても女学校、という観念から抜けきれないわけですよ。その学区内に男の中学が高校になったところもあったんですけど、ちょうど学制の変革期で、どうしても、地元の高校へ入れという、そういう圧力があまして、それならもういっそ女学校でないところへ行きたいと思ってですね。とび出してきちゃった……。」

と、彼は比較的こともなげにいうが、日比谷高校というのは名門であり、かんたんにだれでもが入れるという学校ではなかったのではなかろうか。しかし、彼は、

渡瀬恒彦を演出中の中島貞夫監督





「あの年は、英語の試験がなかったですからね。アルファベット、ろくにかけなかったんですよ……。」と、いう。

「ちょうど五年生（国民学校）になったときから、もう校舎とられちゃったんですよ、軍隊に。九十九里（浜）だったものですから、接收されちゃって……。だからもう竹槍と鍬<sup>くわ</sup>がついで毎日学校へ行くような状態だったでしょ。午前中竹槍訓練やって、午後から畑をやるって状態で……。とくにまた校長が熱心な人で、そういうことで表彰されたりなんかした人でしたから……。」

九十九里浜は、アメリカ軍の上陸作戦が予想されていた海岸であった。だから、学校の校舎はぜんぶ接收されて、軍隊が入った。

「うちなんかも、醸造やってたから精米の設備なんかありましたね、それがぜんぶ軍隊につかわれていましたからね。」

結局、彼は、「女学校へ行くのがいやで日比谷に越境入学した」というのだが、日比谷から東大というのは最高のエリート・コースではないか、ときくと、

「いや、そのキリのほうですよ。」と、彼は答えた。勉強はできたんでしょ、ときくと、「勉強、できなかったですね。」と、答える。ほんとにそうだったかどうかは、わからない。ただ、わかるのは、やはり、照れ屋だ、ということだ。その年の日比谷は、越境入学者がたいへん多かった。百人以上がそうだったように思う、と彼はいつている。

高校三年のときに、病気をした。したがって、大学に入ったのは、同期の連中より二年ほどおくられている。肺浸潤だった。

「受験に拒否反応しめしたんじゃないかと思うんですけどね、身体が……。」といて、彼は笑う。

「高校時代、野球やってましてね。夏の大会の地区予選がおわって、受験勉強をやるんで、だいぶおくられているからみんなよりよけいにやらなきゃいけないと思って夏休みにやったら、夏休みあけに、とたんにおっ倒れたですね。東映に入るときも、まだ跡があって、なんかガタガタいわれましたけど……」

野球は、ショートをやっていたという。

「こんな身体じゃなかったんですから、そのころは……。」

と、いうが、私は、この話をききながら、詩人で小説家の清岡卓行をちょっと連想した。現在の中島貞夫は、清岡卓行よりも肉がついているが、ともに、若いころは俊敏だったろうなと思わせるところがある。清岡卓行は、一高で名二塁手として鳴らした人だ——ということをも明証<sup>めいしょう</sup>無<sup>む</sup>からきいたおぼえがある。

あの当時、胸をやられる人は多かったのじゃないか、と彼はいう。

「野球やめたやつで、半分くらい（胸の病気に）なった……。」





日本は、まだ高度成長以前で、企業事情をはじめとして、生活状態はよくなかった。だから、ちょっと無理をすると、たいてい胸をやられることになった。

中島貞夫は、家に離れがあったので、そこで寝ながら家庭療養をした。すでに、ストマイやパス、などといった特効薬が出ていたので、胸の病気は、むかしのように“死病”ではなくなっていた。

「そのとき、やっと本読み出したんじゃないですか……まともに……。」と、答えながら、彼は例によってひとごとのようにいう。

二年くらい寝て、直った。それで、東大を受けた。だから、東大入学は、昭和三十年になる。東大は難関ではないかと思っているので、そんな感じはなかったのですか、ときいてみたら、

「なんかね、入るのがあたりまえの感じが半分ありましたね。百人以上（日比谷から）入ってましたから。病気になるまえの友だちがぼんぼん入っているから、なにかやってさえすれば入ると……。わりかしそういうところありましたですね。」

## 5

東大は、美学を出ている。入ったのは“文2”で、ドイツ語とフランス語をやった。ドイツ語をやったのは、

「病気ががりなんで、哲学へ行こうなんて考えましてね。」と、いうわけだ。しかし、

「そのうちに、なんかゴタゴタ芝居なんかはじめちゃって、流れ流れて、美学というところへ……。」

どうして、芝居をやる気になったんですか？

「ガキのころからあんまり嫌いじゃなかったんですね。高校んときも、よく三越劇場へ通ってしましたしね。あのころ、ちょうど、文学座とか俳優座とか、新劇がほとんど三越劇場でやってましたからね。」

映画は？

「映画も高校のころですかね、よく見出したのは……。『足摺岬』とか……感激したのはあの系統です。『真空地帯』なんかそうと

ういれあげたという……八回くらい見に行ってますね。外国映画は、ヴィヴィアン・リーのものならぜんぶ見に行く、といった……。あのころは、映画見るか、三越劇場へ行くくらいしかなかった。ひと月平均十本くらい見たんじゃないでしょうか。」

東大美学の同期には、脚本家の倉本聰や、テレビマン・ユニオンの村木良彦がいる。

「ちょうど、美学から映像関係のほうへわりとどんどん出はじめたころで、学校にのこった者も少なかった。」

かつて、美学は、あまり就職のことを考えない連中が行くところだったはずだが、このころから、美学が“商売”になるようになってきたらしい。

「東映でも、まだ助監督やってますけど、同期のやつが入ってますし、（美学も）われわれのころからぼちぼち定員に満ちた……。東宝で『戦争を知らない子供たち』を監督した松本正志も同期です。」

卒論は、ギリシャ悲劇研究会をやっていたから、「ギリシャ悲劇の実際的演出について」というものになった。

「なにか、大学へ入ったときとは（まったくちがった）とんでもない方向に走っちゃったんですね……。」

どうして、哲学から演劇へと変わって行ったのですか？

「結局、非常に単純にいうと、もっと人間くさいもののほうがええということになりました。それで、それが、芝居をやったりなんかしているとなんとなく……。美学に入った年に、佐々木能理男さんが映画の講座をもった。そして話しをしているうちに、君たち美学にきたらなにかやらなくちゃだめだよ、といわれて、じゃギリシャ劇でもやろうかということになりました。七、八人でグループつくって、それにのめっちゃった……。あの年あたり、ギリシャ劇の卒論が多かったんじゃないですか……。」

## 6

そんなわけで、中島貞夫は、大学を出たら芝居をやるつもりでいた。



「芝居をやるか……夏休みまえまでは、芝居をやるつもりだった。ぶどうの会へ行こうかなってね。行く気もあったんですけど……芝居へ行っても会えないぞってことになってまして、だったらそれじゃ映画へ行こうか…。テレビはあまり行く気がなかったですけどね。だから、東映と東宝だけ願書出して、そのころ松竹なんかもうコネがないと……。それに（試験の時期が）あとのほうだったし。東映がいちばん早かった。受かっちゃったら二つ目受けるの面倒くさくなって……。」

東映を受けたら入ったので、東宝は受けなかった。そんなふうにして、中島貞夫の進路は、きまって行った。

長男だったけれども、家業を相続しなければならぬというわけではなかった。

「戦後、農地解放があって、バンバンとられちゃいましたでしょう。で、おやじがいなかったもんですから、平地山林までとられちゃったんですよ、開墾の申請だかなんだかで……。それで土地はほとんどなくなっちゃった。商売もおふくろがひとりでやっていたけど、あまり見通しもないし、好きなようにしろっていうんで、好きなようにするって……。」

家業は、それでも、いまだにつづいているという。

「ほそぼそと……。おふくろ——というより、むかしから働いている人がいますんで、やめちゃうとその人たちが困るんで、その人たちができなくなるまでその人たちがやるというかたちですね。」

東映の同期には、東京撮影所のほうでいうと、内藤誠、山口和彦、高桑信などの監督がいる。

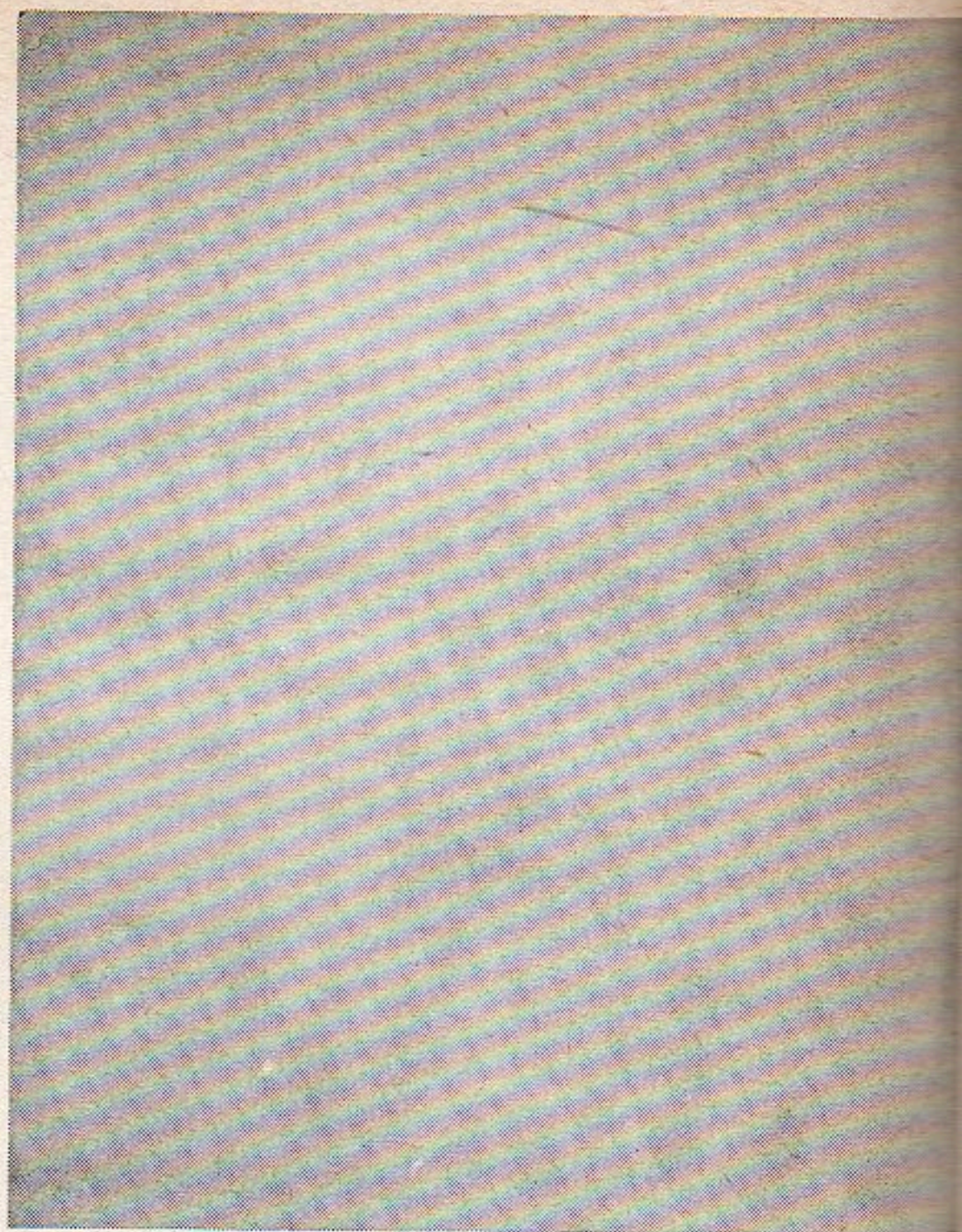
「監督になったやつは、多い。」

中島貞夫は、東映に入社すると、すぐ京都撮影所に配属された。

「ギリシャ劇やってたんだから時代劇向きだという、非常に単純な理由で……グウの音も出ずに行っちゃったんです。」

京都の同期には鳥居元博監督がいる。

中島貞夫が東映に入社した昭和三十四年は、日本映画の全盛期であった。日本映画界



が史上最高の入場者数を記録したのは、その前年の昭和三十三年のことだ。

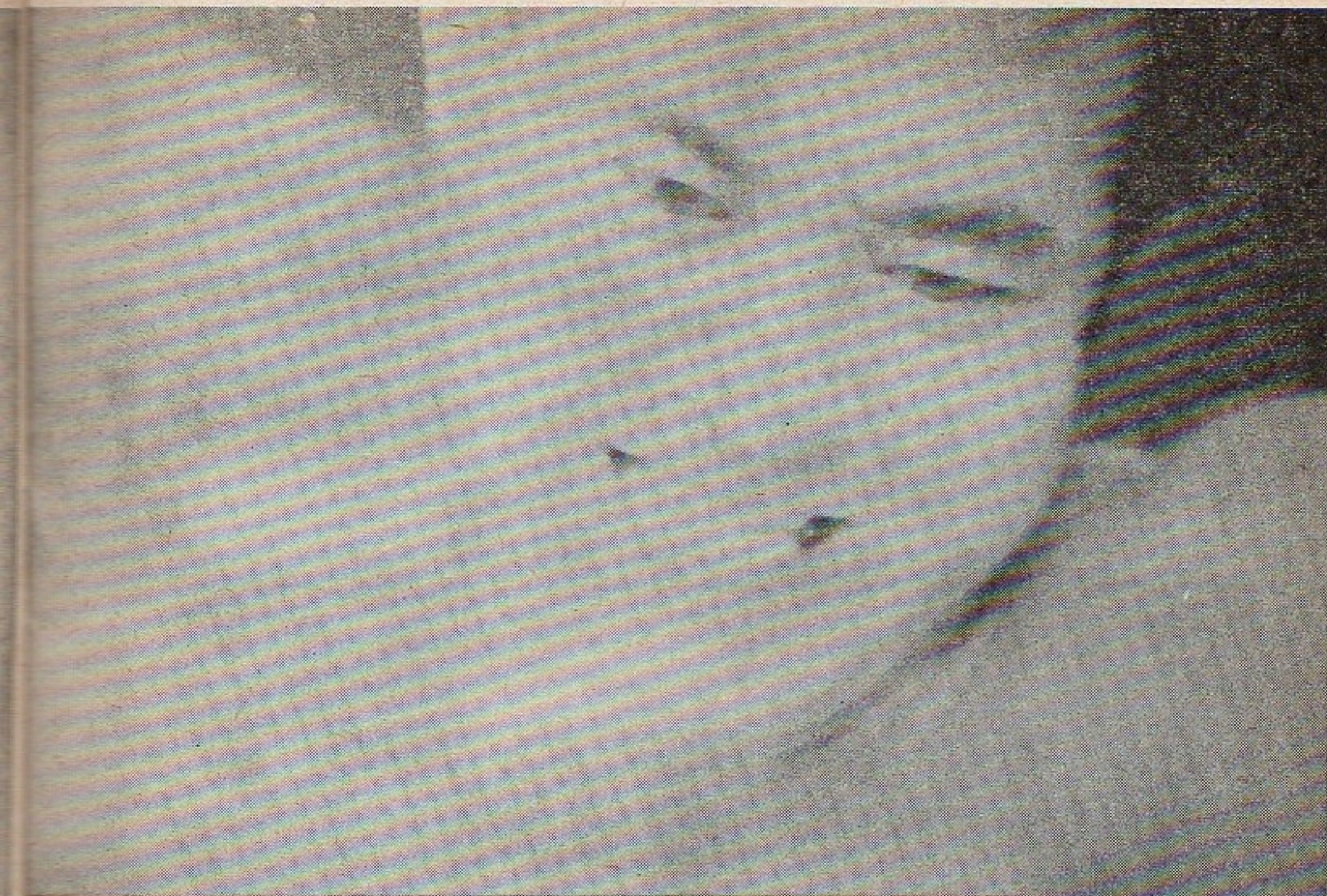
東映は、彼が入った翌年に、第二東映をスタートさせている。日本映画は黄金期だったが、なかでももっとも隆盛をきわめていたのは、東映だったのである。彼は、いう。

「（入社したときの）東映京都はすさまじかったですね。歩いているやつはいないといわれた時期のそのまっただ中だった……。沢島（忠）さんの組が多かったもんですから、走り廻されたです。沢島さん、マキノ（雅弘）さんが多かったですね。だから、“走らない運動”というのをはじめてましてね。」

しかし、その運動は、あまり効果をあげなかったようだ。

「第二東映ができてよかったのは、いちばん下っばからすぐ上になっちゃったことです。第二東映ができましたので、ガーッと（人を）入れましたからね。一年たらずで、すぐセカンドになっちゃった。だから、もう二年目に予告編つくらされたり、B班廻させられたり……。なんか、だから、それでよかったのかも知れませんか。」





沢島，マキノの両監督のほかには，田坂具隆，今井正監督にもついた。田坂監督の作品は「親鸞」<sup>らん</sup>「ちいさこべ」など，今井監督作品は「武士道残酷物語」であった。田坂監督の場合は，ついた本数は多くなかったが，撮影日数からいうとかなり長くなる。田坂監督は身体のせいで，夜間の仕事はほとんどしなかった。

彼自身は，この四人の監督からやはり影響をうけていると思う，と語っている。

「マキノさんとかやってますと，準備なんかぜんぶ助監督まかせになるでしょう。だから，やんなきゃいけないことはよけいふえますけど，それだけ，なんか身についてきますね。修業という意味では……。」

主演俳優のほうからいうと，中村 錦之助（最近，萬屋錦之介と改名したのは，ご存知のとおり）の作品が多かった。しかし，彼が監督になってからは，錦之助の作品は一本もとっていない。

「ぼくが撮るようになるころと，錦ちゃんが東映はなれていくのと，だいたいおなじころだった。」

錦之助はいい俳優でしょう，という私の質問に対して，彼は肯定した。そして，「彼からへんな権威主義が抜けたらかなりいいと思う。」と，いい，「生まれが生まれだからしょうがないでしょうが……。」と，つけ加えた。

## 7

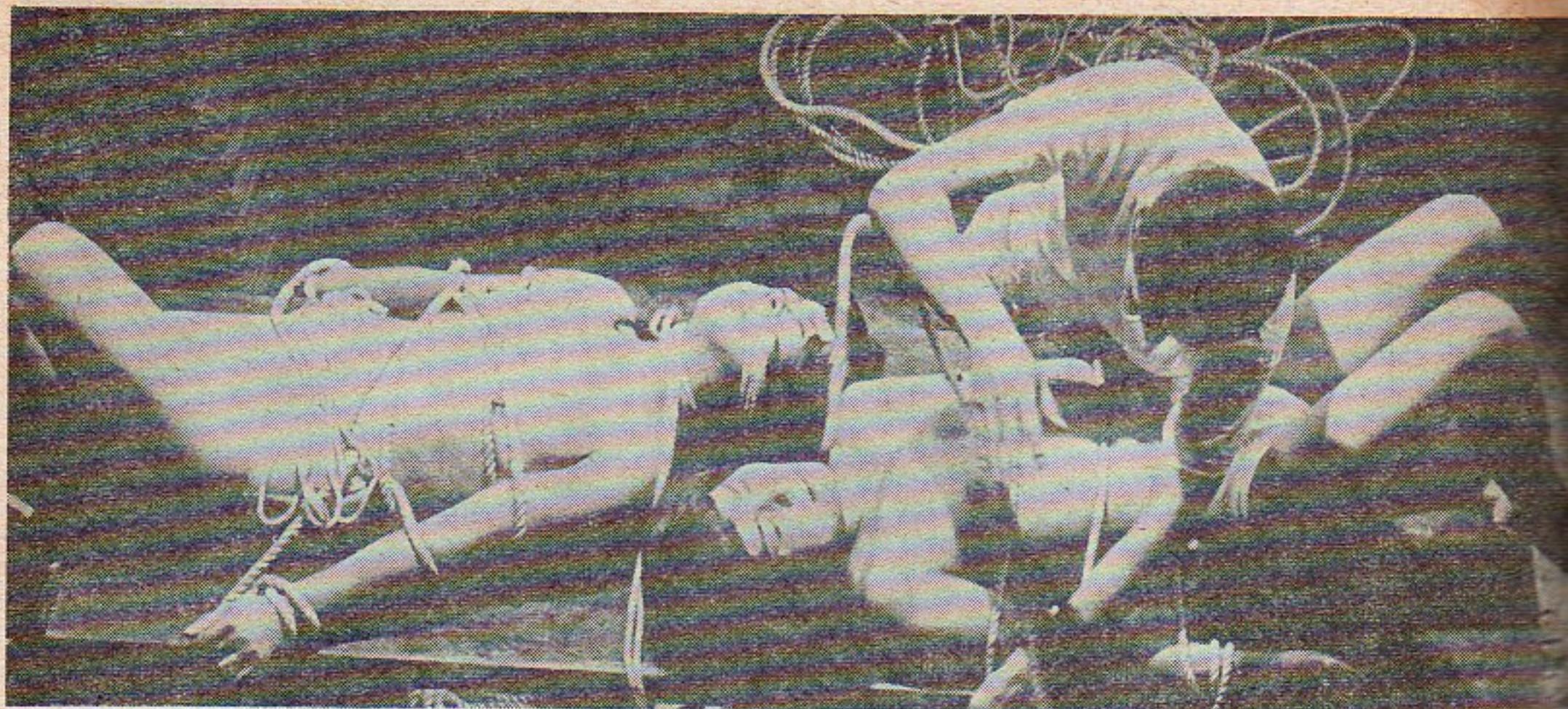
彼は，約五年で監督になったが，そのあいだに第二東映がつぶれた。映画界は，すでに下降期に入っていた。

「とくに京都なんかは大ゆれにゆれましてね。役者はどんどん交替していく，監督は交替していくという——そういう時期だったんじゃないスカネ。千恵蔵，右太衛門の両御大がだめになって，大友（柳太朗）さんがだめになり，東千代之介がだめになり，（大川）橋蔵の写真も入らない，ひばりちゃんのも入らない，なにしているのかわからない……かろうじて錦ちゃんでもっていた。」

東大ギリ研出身者にとって，撮影所とはどのような印象だったのだろうか。

「考えてもぞっとするな，あのころのこと





は……。えらいとこへきてしまったと思ったですよ。当時の京都の助監督というのは、あんまり人間扱いでもなかったし、適応しなきゃいかんのけど、その適応するのがちょっとシンドかったですね。だけど、なんとなく……酒ばっかりくらって……。」

適応できにくい人と、かんたんにできる人とがいるのじゃないか、ときくと、

「みんないたということは、なんとなく適応したってことでしょうね。」

という返事がかえってきた。

当時の京都撮影所は、東京よりも、はるかに古い気風がのこっていたらしい。「おなじ東映でも、京都ではスター・システムというやつが完全に確立してましたからね。」と、彼はいつている。中島貞夫は、京都に配属されたことによって、いわば、カッドウヤの歴史を実地に獲得することができたということになるだろう。

「錦之助と酒を飲む機会が実に多かったみたいですね。」と、いつて、彼は助監督時代を“総括”した。

## 8

中島貞夫の監督第一作は、山田風太郎原作の「くの一化粧」である。昭和三十九年、ちょうど五年で、彼は監督に“昇進”した。これは、同期の連中にくらべて早いほうだったが、その理由のひとつは、「脚本をかいてたってことじゃないでしょうかね。」と、いつ。

## 「性倒錯の世界」

「ホンかく……どうしても、ひとつの基準になっちゃうみたいですね。」

しかし、彼は、「くの一化粧」で、自分が監督するチャンスをつかむとは、じつは思ってもいなかった。

「これは、へんな話だったんですけどね、時代劇がこう（だめに）なっちゃったでしょ、なにやってもだめなんですね。それで、いまの社長の岡田茂が、東京の撮影所から京都の撮影所長になってきたばかりのことだったんだけど、東京へ行くまえは京都にいたんです。で、ぼくら助監督三年目くらいのころかな、そのころわりに京都の助監督勇ましかったもんですからね、所長と懇談会もったりして、つるしあげやったんですよ。で、それまで、岡田さんの主張は、東映の映画監督は個性をもってはいけなと……そういう主張だったんですよ。つぎからつぎへつづいていく東映の写真には、つくるやつの個性が表われてはいけなんだというのが彼の主張だったわけです。それで、京都を去って行くときにですね、はじめて、やはり映画は個性がなきゃいかんということをいいのこしてね、東京へ行ったんですよ。それで二年くらい東京にいてまたもどってきたんですね。そして、なんだおまえ、まだなにうろうろしてるんだみたいなことになりまして、なにかいい企画ないかというんでね、自分がやるとはまったく考えずにですね、やるんだったらこ



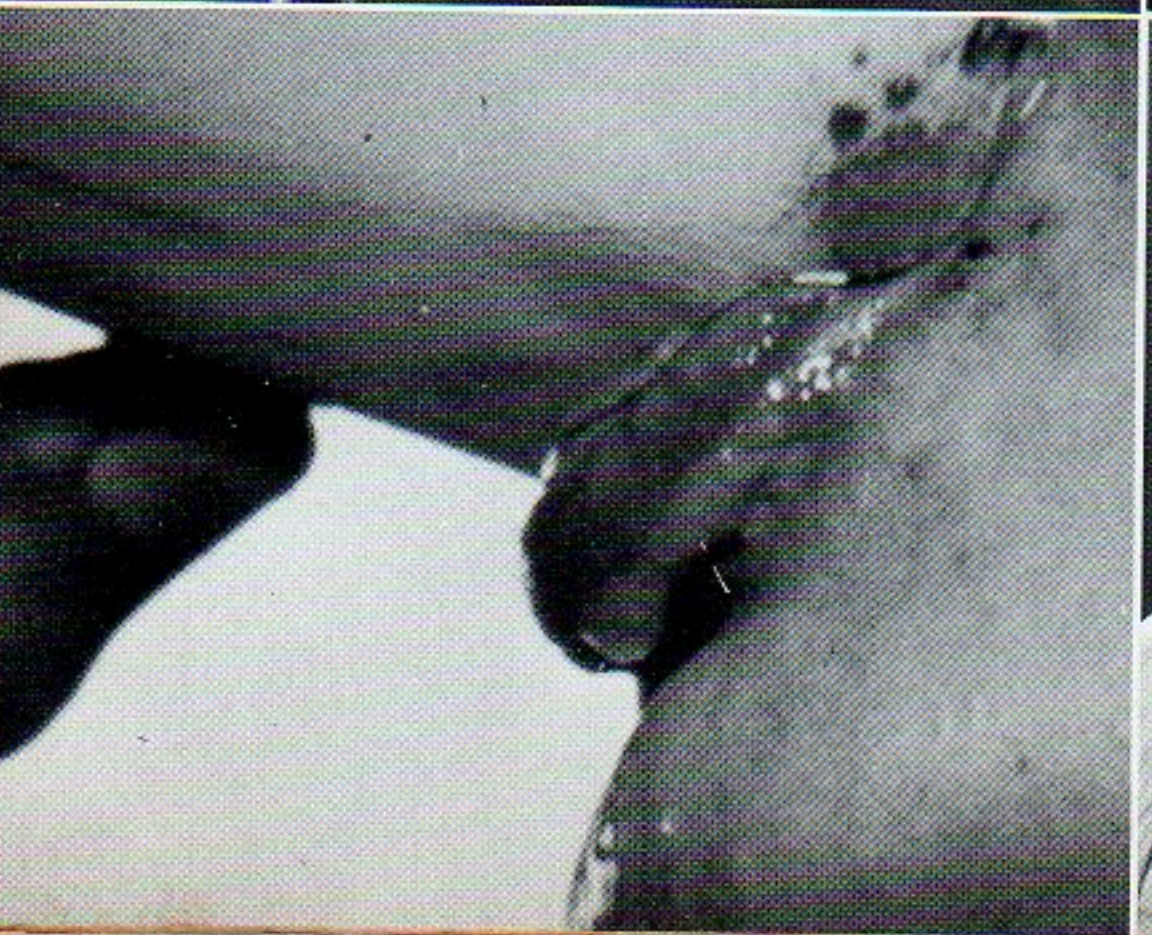
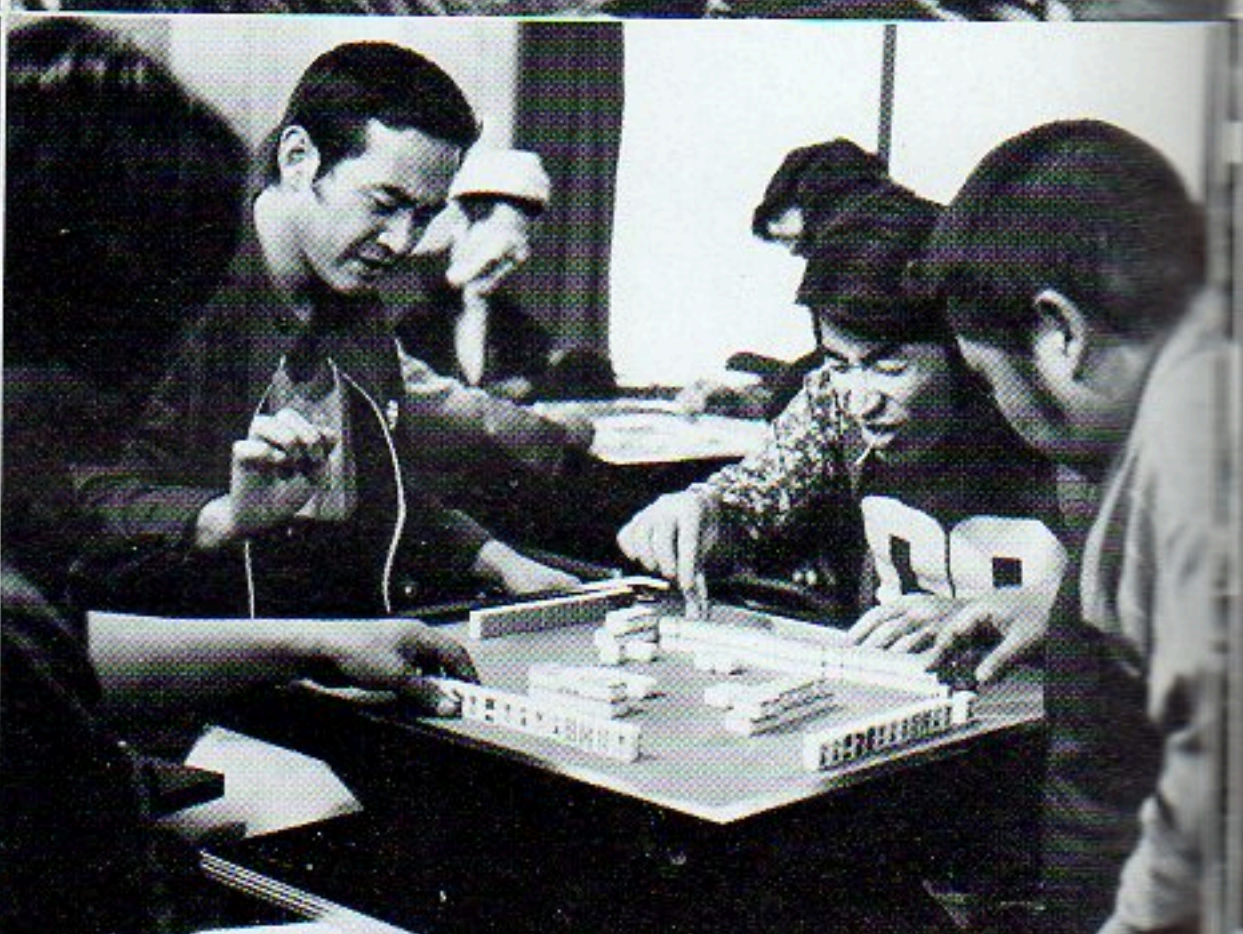
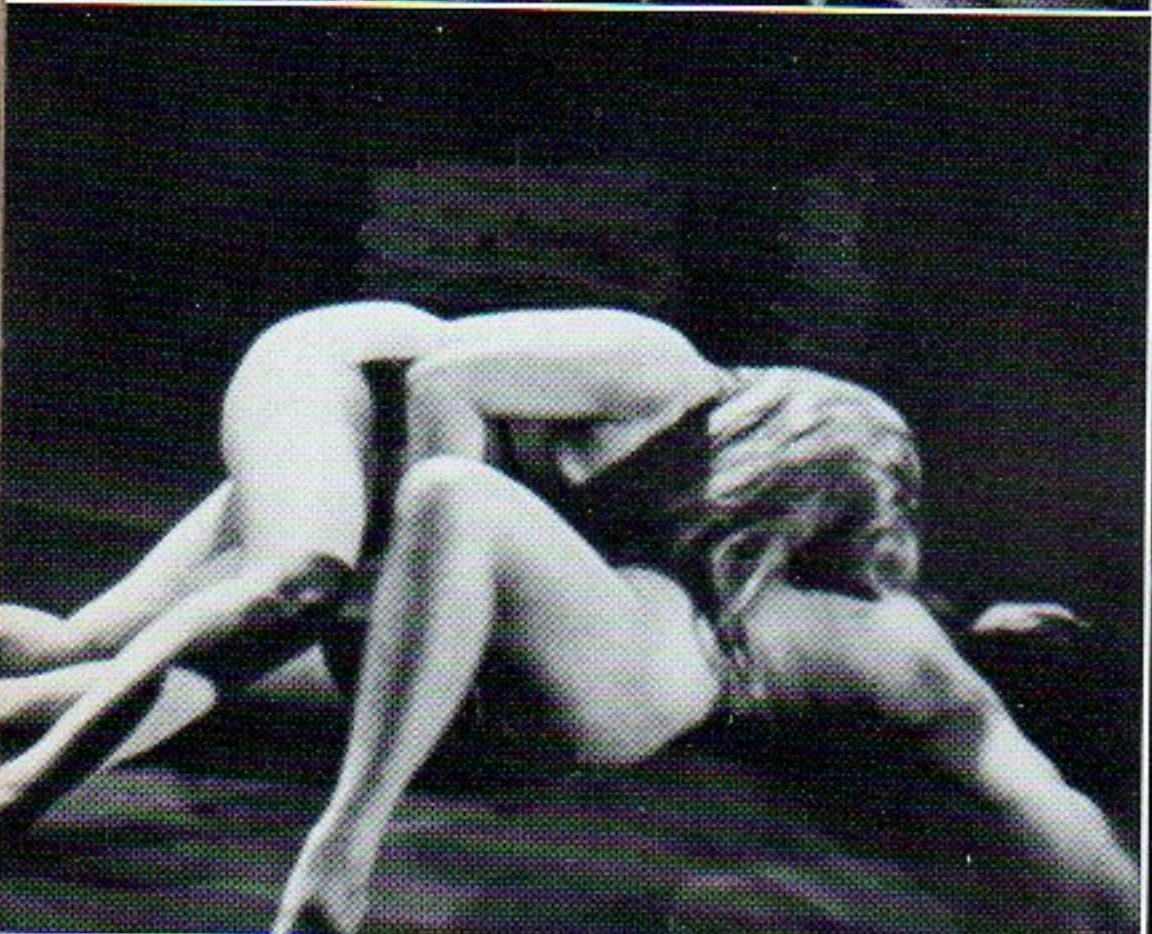
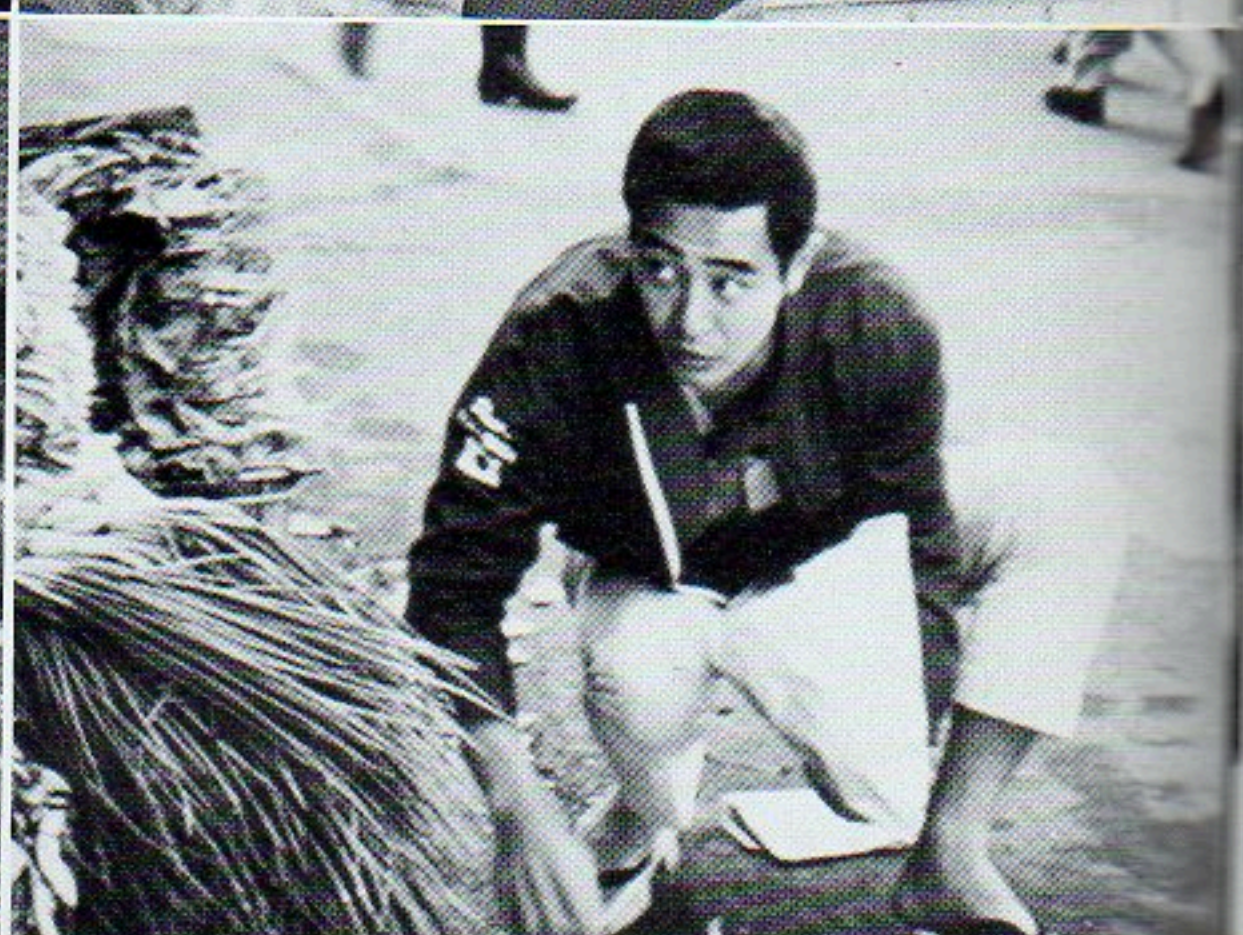
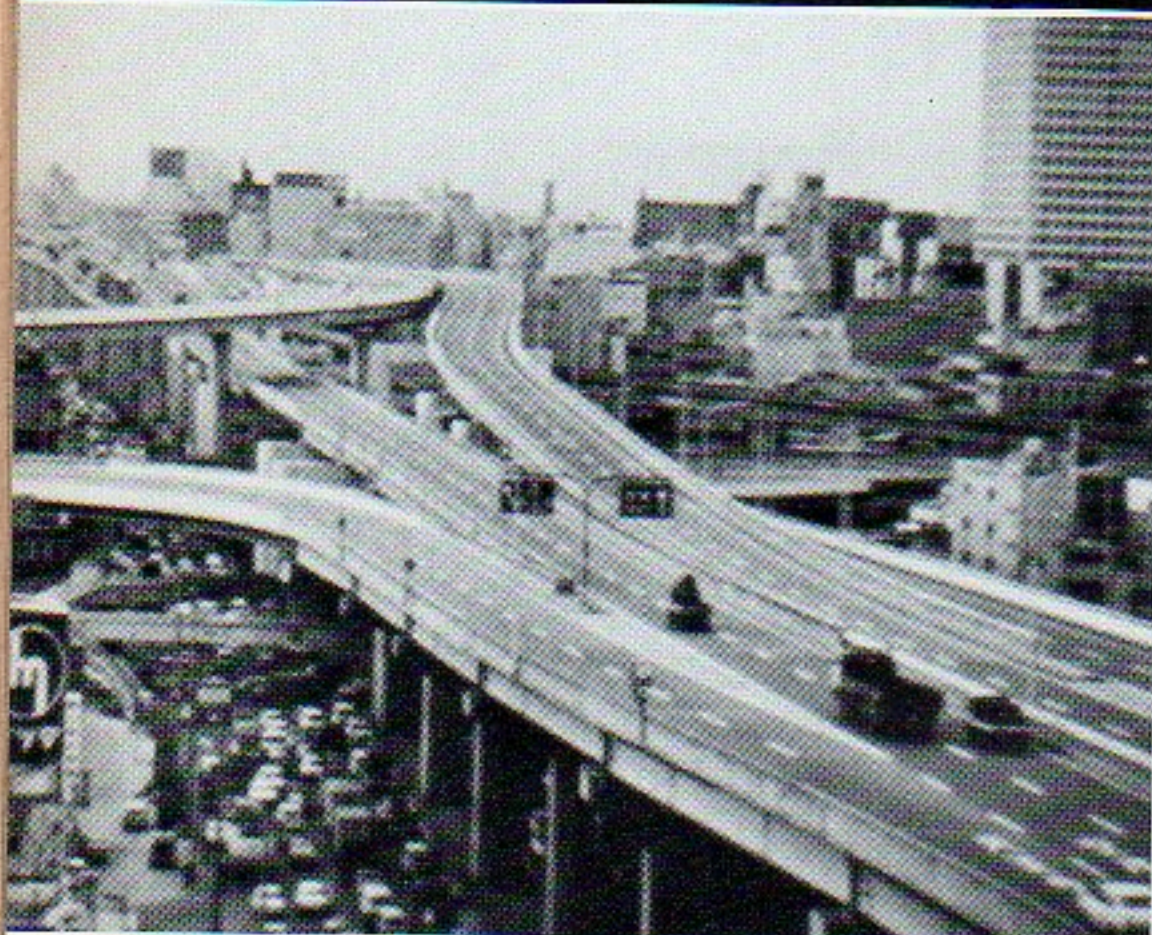


中島貞夫監督



# 鉄砲玉の美学

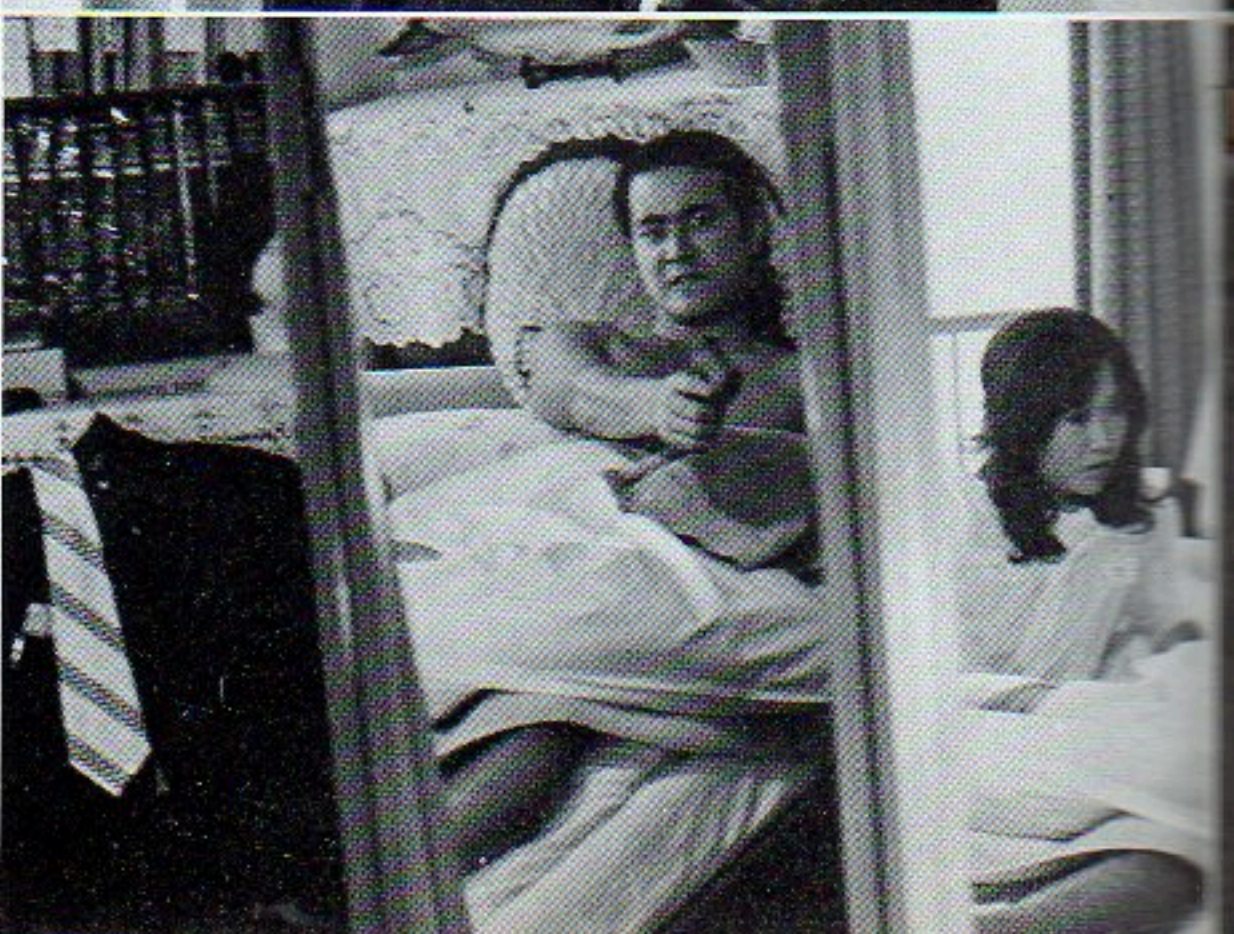
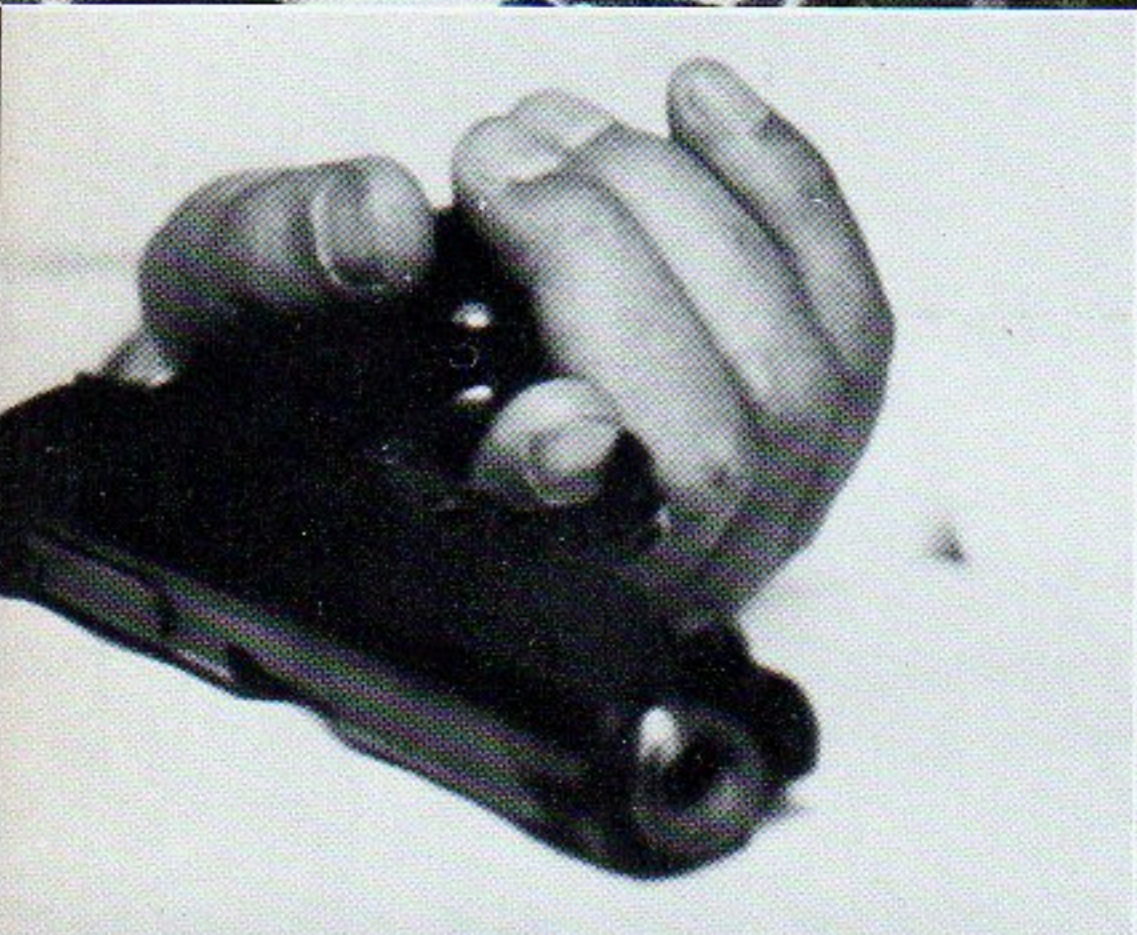
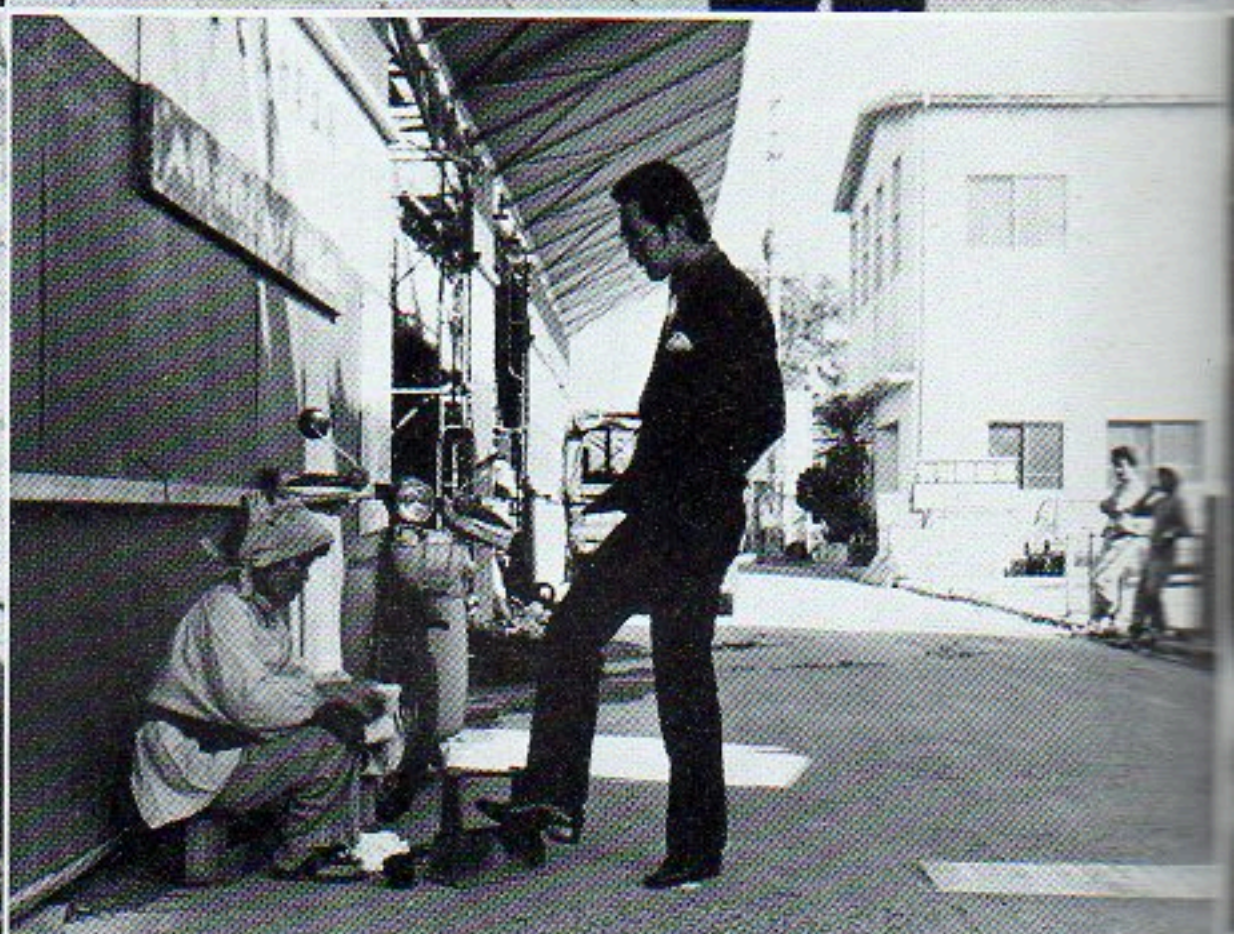
映画



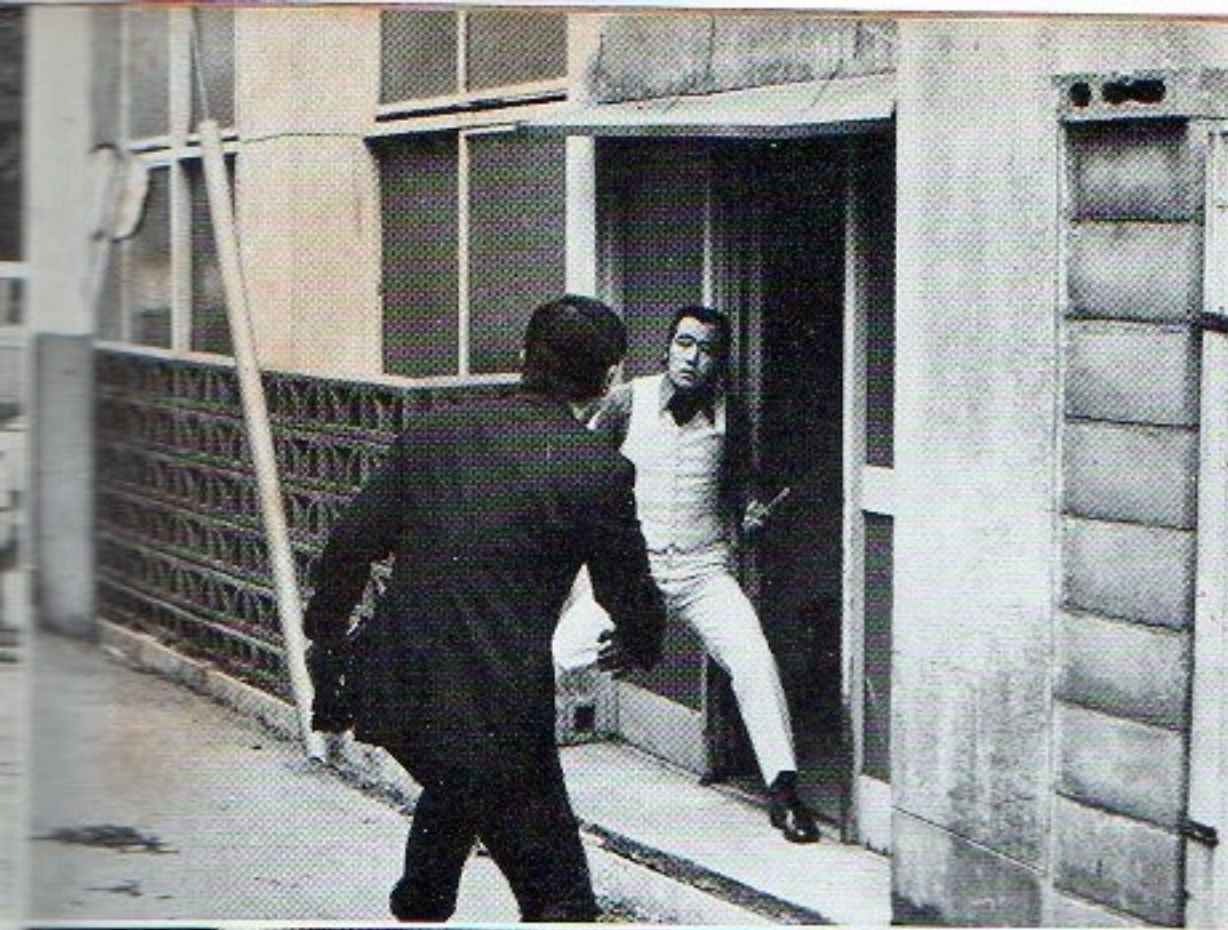




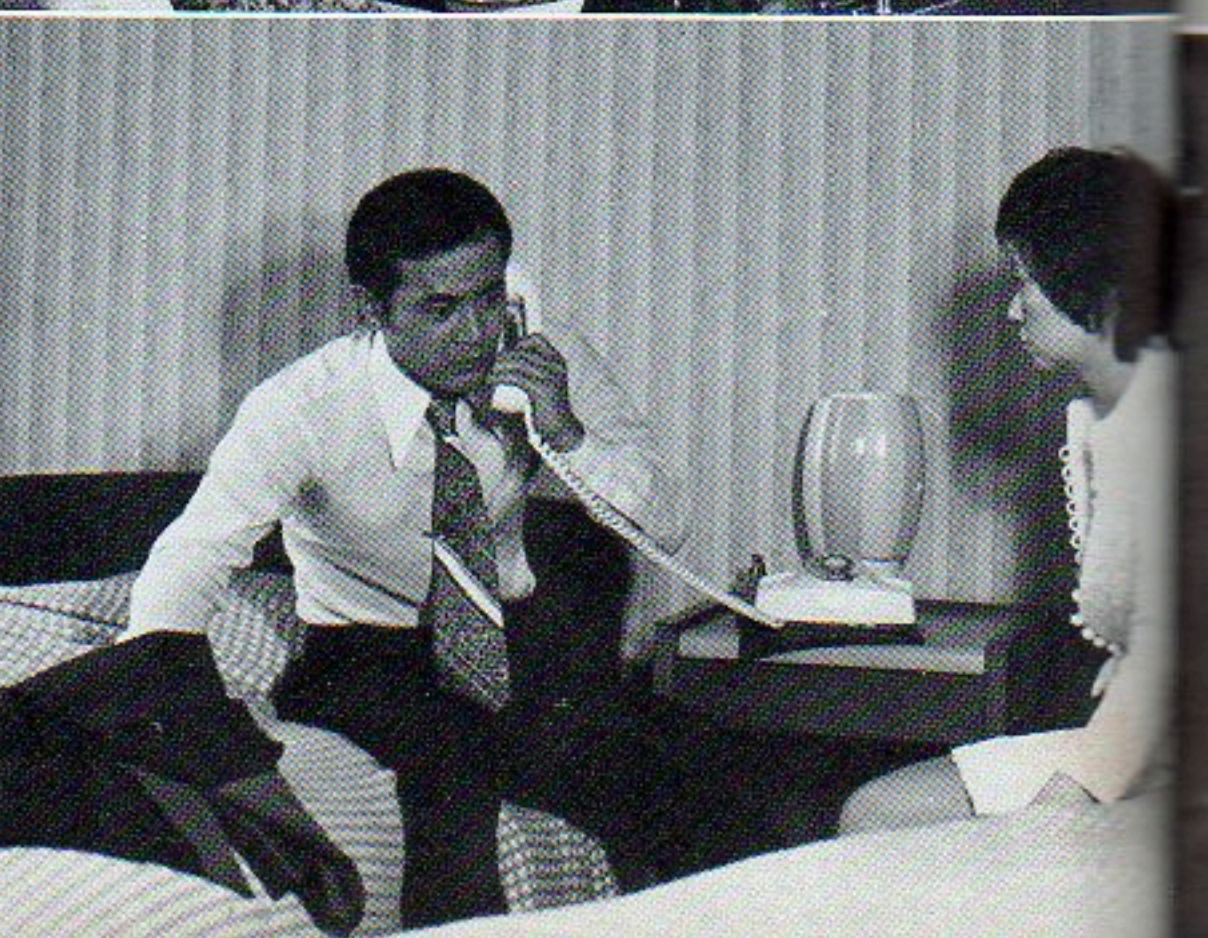
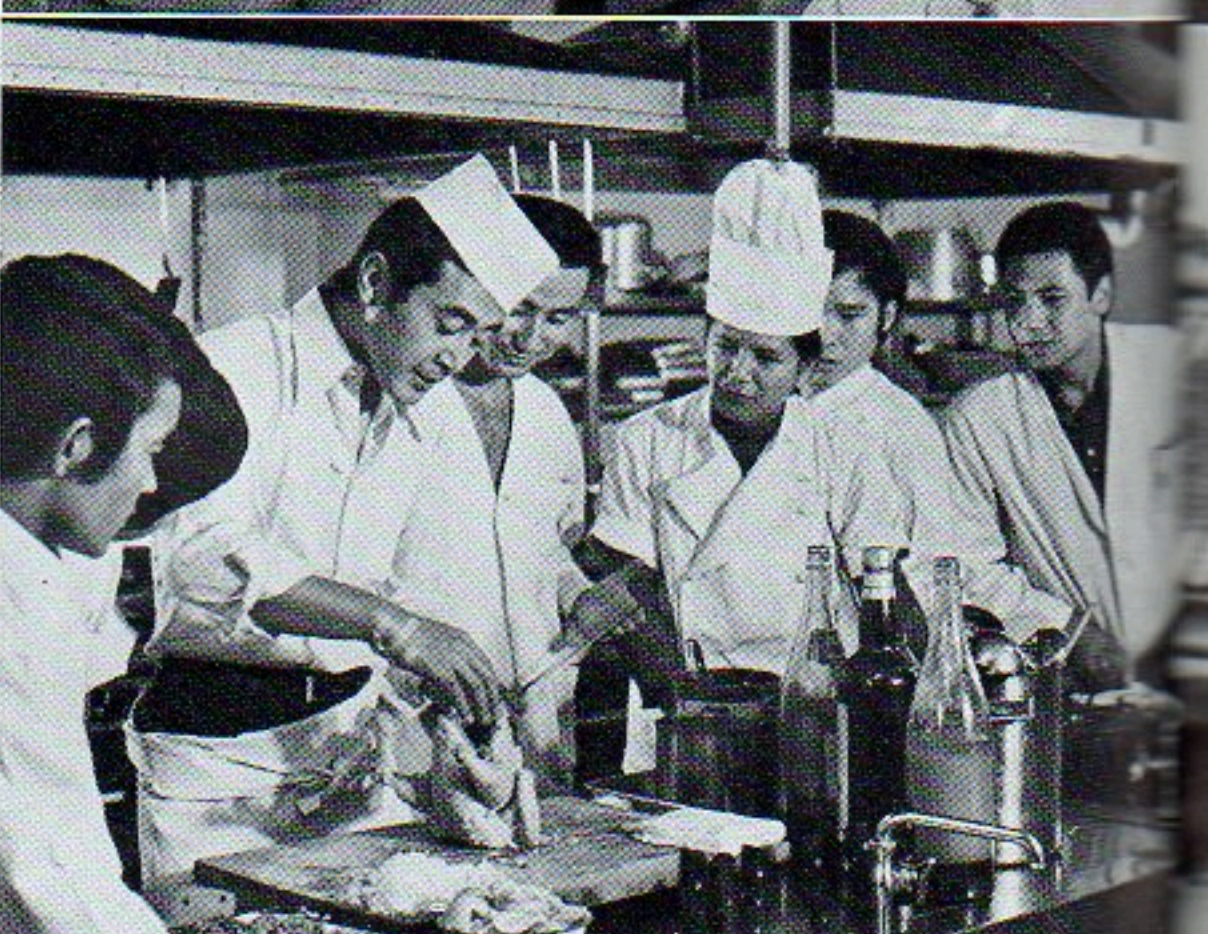




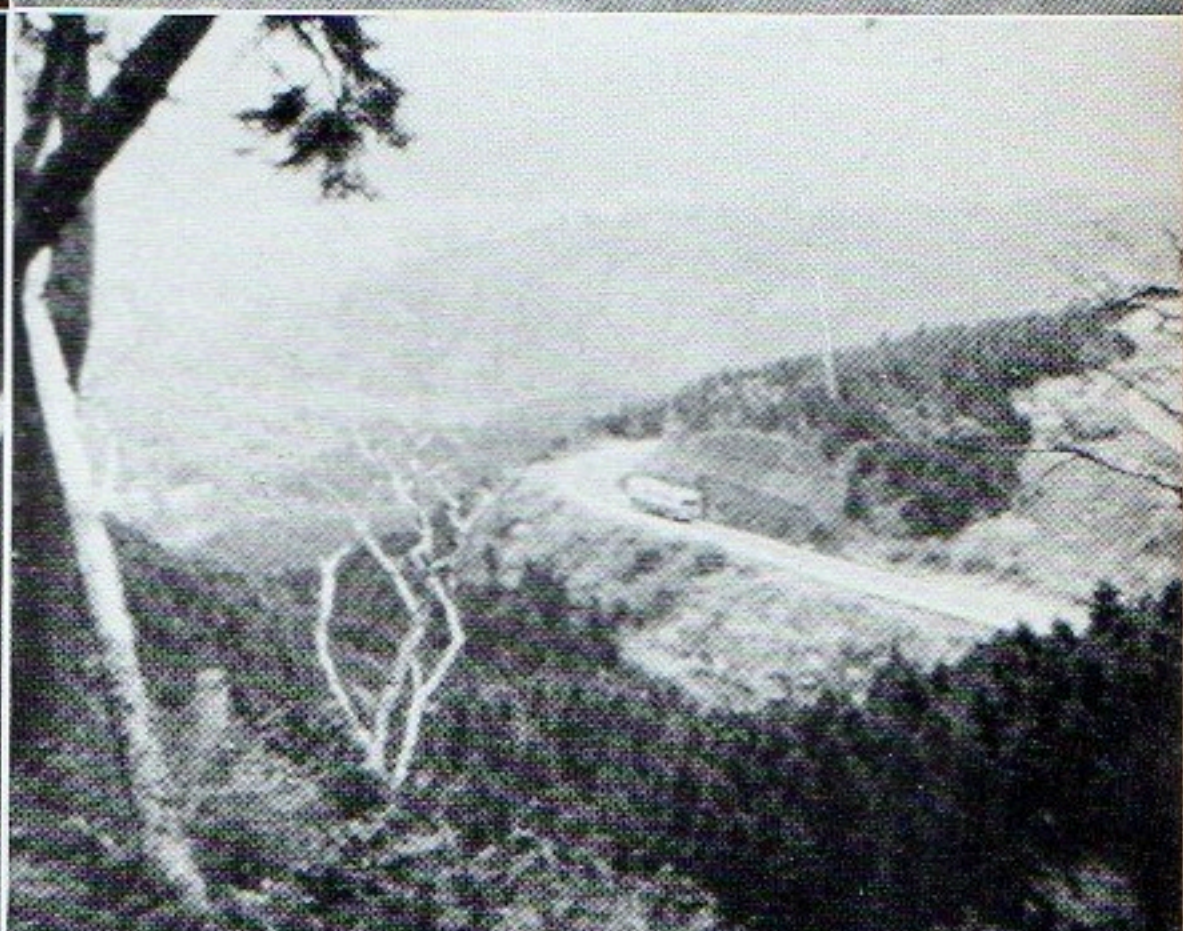
















渡瀬恒彦



杉本美樹



のくらのをやんなきゃ、だめですよっつて、『くの一』を出した。こんなもの映画になるか、ということになりましてね。それから、また飲み屋の女あたりに面白い、という話をきいてきたんじゃないでしょうかね、で、なるかならんかわからんけど、とにかく本だけかいてみるかということになったんです。かいてみましょうか、ということになってですね、かき出したら、急にいそいでやる、いそいでやるからいそいでかきあげてくれという……。で、だれが撮るかということになったら、ちょっとまわりに見当らなかつたんじゃないスかね、で、一本やってみろということになりましてね。これだけはかんべんしてくれとちょっとあやまったんですけどね、ちょっとどうやっていいかわかんないし……。だけど、まあいい出したんだからやれという……。ちょっと決心いったですね、あの時期あれやるのは……。そのまえに、山本周五郎の『ちゃん』とかといったものを脚本にしてあっためていたんですよ。若いプロデューサーとこれでアレしようかという話をしてたんですけども……。なんでもいいやと思って……。自分で撮るんだったら自分でかききれないから、いそいで倉本（聰）呼んで、一緒にかいて、それで撮っちゃったという……。」

古いしきたりが確立して、ものの考え方もそのようになっている京都で、「くの一化粧」のようなハレンチな時代劇をつくることは、たしかに、かなり革命的なことだったのではなからうか。そのへんのことについて、しかし、彼は、あまり、語らない。

「要するに、京都の撮影所ではじめて女がはだかになるわけですよ、そういう意味じゃいろいろあったですね。錦ちゃんなんか、なんでおまえそんなものやるんだとかね。」と、いっただけだ。

9

それから、すでに、中島貞夫は、二十一本の作品を監督している。年二本位のペースだが。

「ペースにはむらがありますから……。ゼロという年が一年あって、一本が二年、三年

で二本というのもあります。」と、いう。

そんなふうに間があいているときは、企画がつぶれたときなのだそうです。

「だいたいこっちで出した企画が本にまでなつて、その段階でつぶれたとき、だいたいフテ寝をしちゃう、ということ二年にいっぺんくらいやってましたから。」

二十一本の作品のほとんどが、会社企画であつて、自分の企画で実現したのは、「893愚連隊」一本だけだという。そのほかの自分の企画は、いいところまでいったけれどもぜんぶだめになった。完全に本にまでなつてつぶれたのが四本くらいある。キネマ旬報にシナリオが掲載された「山<sup>か</sup>嵩」や、やくざ映画の「<sup>せん</sup>殲滅」は、いまでもやりたいし、できるのではないかと思う、と彼はいう。「<sup>せん</sup>殲滅」は、スター主義の内容ではなかったためにつぶれたのだという。「893愚連隊」も、企画が実現するまでには、かなり迂余曲折があつた。

「『山<sup>か</sup>嵩』がOK・ゴーノのサインが出ましたので、ロケハンすませて、女の子と男の子と新人をつかい、山のなかにプレハブ建ててやるつもりで、タイアップもとって、整地をすませたら、その段階でストップくらった。脚本が、倉本と凝りすぎたところもあるんですけどね、ト書きシンプルにしましたし、セリフが非常に少なかったし、登場人物が少年とか少女とかで名前がない。大川さんが読んで、そういうところから、非常に単純な理由でこれはだめということになった。半年くらいフテ寝してたのかな、社員だったから、月給もらってますからね。フテ寝しててもしょうがないと思って、釜ヶ崎にはいったんですよ。釜ヶ崎もの一本かいて、もってきて本読みしたらですね、おまえここは映研とちゃうぞって、やられましてね。またひきさがって、またぶらぶら……。なんかやんなきゃいかんし……。京都でぶらぶらしている愚連隊の連中がいましたんで、そいつらと、知り合つて、そいつら取材して、これもまたどうせあかんだろうと思ってたんですがね、本読みしたら、これはいい、これはいけるかも知れんということになりましてね。ゼニやすいし、



あんまりつぶすのも可哀想だと思ったんじゃないですかね。非常に安かったんですけどね、当時……。」

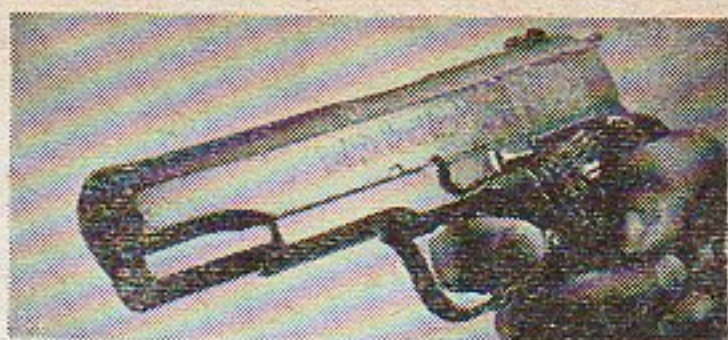
「山嵩」は、倉本聰と共同でやったが、だめ。釜ヶ崎ものは神波史郎にたのんだりしたが、だめ。

「みんなつぶれるでしょう。気の毒になっちゃって、人にたのめなくなりましたね、『893』は自分でかいたんです。」

10

現在、中島貞夫は、東映と年間二本の優先本数契約、というのを結んでいる。この契約は、作品をつくらないと金にならない。つまり、保証もないし、拘束力もない。作品をつくらなくても手当てが出るような契約は、どんどんなくなっていくようだ。それだけ、映画界の事情はきびしくなっているのだろうが、逆にいえば、そのほうが、かえって、監督にも緊張感をあたえて、いい成果をもたらすことになる可能性がある、ともいえるだろう。

「鉄砲玉の美学」は、彼がまえにつくった「血桜三兄弟」をやったときに、やはり“鉄砲玉”を描いたのだが、そのとき、脚本家の野上竜雄と、「ほんとうのチンピラでこの鉄砲玉をやったらおもしろいだろう」と話し合ったところから出たものだ。「ほんとうのチン



ピラで、これやったら、もう少しいろんなことを描きかかえられるだろう……。」と思ったのだという。これまでの自作のなかで、やって面白かったのは、「893愚連隊」と「性倒錯の世界」と、それから「血桜三兄弟」のときもわりと面白かったです。」

ドキュメンタリーをやって痛感したのは、画をつくるとかなんとかいうことの一種のたよりなさだという。「被字体に近づかなきゃ、どうにもならんから……。」

ドキュメンタリーとフィクションはちがうのだろうか？

「それは、かんたんにことばで分けますとね、ドキュメンタリーは、力のある被字体をさがす。フィクションは、力のある被写体をつくる。だから、ドキュメンタリーやるときは取材だけに全精力をつぎこんじゃう。」

「鉄砲玉の美学」のあとで、彼は、すでにドキュメンタリーを一本つくりあげている。去年から今年にかけて、中島貞夫は、その風貌にふさわしい精力的な活動を展開していきそうである。







1964~1973

## 中島貞夫監督作品表

### 1. くの一化粧 (39年)

原作	山田	風太郎
脚本	倉本	聰
	中島	貞夫
	金子	武郎
出演	緑	魔子
	三島	ゆり子
	弓	恵子
	春川	ますみ
	小沢	昭一
	西村	晃

### 2. 893 愚連隊 (41年)

原案	菅沼	照夫
脚本	中島	貞夫
出演	松方	弘樹
	ケン・サンダース	
	荒木	一郎
	三島	ゆり子
	稲野	和子
	高松	英郎
	天知	茂

### 3. 旗本やくざ (41年)

脚本	倉本	聰
	中島	貞夫
出演	大川	橋蔵
	藤	純子
	春川	ますみ
	青島	幸男
	千秋	実夫
	三島	雅夫
	大木	実

### 4. あゝ同期の桜 (42年)

原作 海軍飛行予備学生14期  
会編「あゝ同期の桜」  
(毎日新聞社刊)より

脚本	須崎	勝弥
	中島	貞夫
出演	鶴田	浩二
	松方	弘樹
	千葉	真一
	佐久間	良子
	藤	純子
	高倉	健

### 5. 大奥秘物語 (42年)

脚本	国弘	威雄
	佐治	乾
	金子	武郎
	掛札	昌裕
出演	佐久間	良子
	岸田	今日子
	藤	純子



高橋昌也  
岩崎加根子  
山田五十鈴

6. 続・大奥<sup>秘</sup>物語 (42年)

脚本 国弘威雄  
中島丈博  
出演 小川知子  
緑魔子  
桜町弘子  
西村晃  
木暮実千代  
小沢栄太郎  
東山千栄子

兄弟仁義

7. 関東兄貴分 (43年)

脚本 村尾昭  
鈴木則文  
出演 北島三郎  
村田英雄  
安部徹  
北林早苗  
鶴田浩二  
(特別出演)

8. 尼寺<sup>秘</sup>物語 (43年)

脚本 西沢裕子  
出演 藤純子  
津川雅彦  
大原麗子  
桑原幸子  
若山富三郎  
三田佳子

にっぽん'69

9. セックス猟奇地帯 (44年)

構成 中島貞夫  
竹中労  
協力 唐十郎  
タイトル・デザイン 横尾忠則  
ナレーター 西村晃

10. 日本暗殺秘録 (44年)

原作 鈴木正  
脚本 笠原和夫

中島貞夫  
出演 千葉真一  
田宮二郎  
鶴田浩二  
若山富三郎  
三益愛子  
高倉健

戦後秘話

11. 宝石略奪 (45年)

原作 菅原通済「昭和秘録・ダイヤ  
モンド大蒙古の行方」より

脚本 中島貞夫  
金子武郎  
出演 菅原文太郎  
丹波哲郎  
片岡千恵蔵  
橘ますみ  
若山富三郎  
菅原通済

12. 温泉こんにゃく芸者 (45年)

脚本 掛札昌裕  
金子武郎  
中島貞夫  
出演 女屋実和子  
小池朝雄  
荒木一郎  
殿山泰司  
上田吉二郎  
小松方正  
(特別出演)

13. 男の勝負 (45年)

原作 紙屋伍平「浪花大平記」(デ  
ィリースポーツ連載)より

脚本 鳥井元宏  
中島貞夫  
出演 村田英雄  
天知茂  
北島三郎  
藤純子  
藤山寛美  
高倉健

驚異のドキュメント

14. 日本浴場物語 (46年)



構成・脚本 金子 武郎  
中島 貞夫  
出演 大木 正司  
女屋 実和子

懲役太郎  
15. まむしの兄弟 (46年)

脚本 高田 宏治  
出演 菅原文太  
川地 民夫  
安藤 昇二  
葉山 良二  
天津 敏美  
佐藤 友美

セックス・ドキュメント  
16. 性倒錯の世界 (46年)

構成・脚本 中島 貞夫  
掛札 昌裕  
金子 武郎  
関本 郁夫

現代やくざ  
17. 血桜三兄弟 (46年)

脚本 野上 龍雄  
出演 菅原文太  
河津 清三郎  
小池 朝雄  
渡瀬 恒彦  
松尾 和子  
荒木 一郎

まむしの兄弟  
18. 懲役十三回 (47年)

脚本 高田 宏治  
中島 貞夫  
出演 菅原文太  
川地 民夫  
天知 茂也  
光川 環也  
三島 ゆり子  
嵐 寛寿郎

まむしの兄弟  
19. 傷害恐喝十八犯 (47年)

脚本 佐治 乾  
蘇武 路夫

出演 菅原文太  
川地 民夫  
渡瀬 恒彦  
北林 早苗  
北村 英三  
待田 京介

20. 木枯し紋次郎 (47年)

原作 笹沢 左保  
脚本 山田 隆之夫  
中島 貞夫  
出演 菅原文太  
伊吹 吾郎  
渡瀬 恒彦  
小池 朝雄  
江波 杏子  
笹沢 左保

21. 木枯し紋次郎 関わりござんせん (47年)

原作 笹沢 左保  
脚本 野上 龍雄  
出演 菅原文太  
田中 邦衛  
中村 英子  
市原 悦子  
待田 京介  
大木 実

22. 鉄砲玉の美学 (48年)

脚本 野上 龍雄  
出演 渡瀬 恒彦  
杉本 美樹子  
松井 康子  
森 みつる  
碧川 ジュン  
荒木 一郎  
小池 朝雄

セックス・ドキュメント  
23. エロスの女王 (48年)

構成 金子 武郎  
中島 貞夫  
ナレーター 金子 信雄



# 鉄砲玉の美学

カラー・ワイド



## スタッフ

企	画	.....	天	尾	完	次
脚	本	.....	野	上	龍	雄
監	督	.....	中	島	貞	夫
撮	影	.....	増	田	敏	雄
照	明	.....	金	子	凱	美
音	楽	.....	荒木一郎と頭脳警察			
助	監	督	.....	依	田	智 臣

## キャスト

小池	清	.....	渡	瀬	恒	彦
潤	子	.....	杉	本	美	樹
よ	子	.....	森		みつる	
律	子	.....	碧	川	ジュン	
杉	町	.....	小	池	朝	雄
ゆ	き	.....	松	井	康	子
五	郎	.....	荒	木	一	郎
		.....	大	木	正	司
修		.....	広	瀬	義	宜
安	夫	.....				



## ○ 大阪

肥大した都会。  
その繁栄と欲望。  
豪華なディスプレイ。  
ファッション・ショー。  
焼けるステーキ。  
山のように積まれた塵芥。  
ネオンの渦。  
脂の滴るステーキを食べる女の口。  
ゴミを呑み込む清掃車。  
人と車の洪水。  
脂でべっとりと光る朱い唇。  
塵芥の山。  
場末の盛り場。  
ホルモン料理の大鍋。  
太腿を強調したヌードの絵看板。  
局部に落書きがされてある。  
休みなく廻る清掃車の歯車。噛み砕かれ、押し潰される塵芥。

## ○ その大都会の片隅

ちんぴらの小池清(23)が、兎を売っている。  
清 あこにもあるここにもいる兎とちゃうでエ、トルコの首府はアンゴラから、たった今、飛行機で届いたばかりの、これ以上大きくならんちう純血のアンゴラ兎や。えらいもんやんけ、高度成長あかんでエと、己れのカラダで教えてくれてはる……見てみイなこの眼、この感触……(頬にこすりつけて) うっふん、ええわア、食費は最低、ペットに最高、ルミカリンダか真理ちゃんか、男なら泣いて喜ぶオナペット、嫁はんいらすのマイペットてなもんや、ハハハ……(ポンポンと手を打って) よっしゃ、今日は出血サービスや、全機開放打ちどめなしで、一匹二千円のところを、たったの千……いやいや、思いきって、ええい、三百円、どや三百円、三百円々々々!!  
市民の流れ。  
全然、売れない。

## ○ 盛り場(夜)

暗がりでごそごとと生きるちんぴら達の生態。  
エロ写真を売る奴。  
かつあげをする奴。  
パチンコの景品買いの小屋で、ぼそっと坐っている奴。  
ポン引きをする奴。  
ホステスから金をせびる奴。  
E T C, E T C  
中途から、ドスの利いた声がWり始める。  
「誰か、若い者ンを一人えらべ」  
「何に使うんだす」  
「鉄砲玉として宮崎へ飛ばす」  
「鉄砲玉……(勢い込んで)じゃ、いよいよ九州へ進出……」  
「宮崎には大きい組織がない。小さい組が幾つかあるだけだ……鉄砲玉が殺されたら、それを口実に、一気に踏み潰せる……誰かいのはいないか」  
「そうでんなあ……」  
ちんぴら達——  
血の気が多くて……糞度胸があつて……出来るだけどでかい音を立てて、ハジける奴を探せ」  
ちんぴら達——

## ○ 八百屋

清が駆け込んで来る。  
清 おっさん、掃除手伝ったるでエ。  
いきなり、落ちていた屑を拾い集める。  
八百屋、苦々しげに、それでも清には判らぬよう  
八百屋 ケッ!  
屑を見る眼付きだ。  
また、声がWってくる。  
「それと何より大切なのは、腕っ節やアタマのわりには、己れのことを恵まれてないと思ってる奴だ……」  
「(含み笑い)」



## ○ 安アパートの二階の一室

壁に派手なネグリジュが吊されている。

部屋の一隅を仕切って、その中に二十羽ほどの兎がいる。

清が、その上に、野菜の屑をパラパラと撒くと、ガス台の前に戻って、器用な手付きで焼きソバを炒め始める。

「（含み笑いが続いている）」

「何がおかしい？」

「血の気が多くて、糞度胸があつて、己れのことを恵まれんと思うとる奴……（尚も笑い続けて）若い者ンは、みんなそうだっせ」  
与えられた餌を、目の色を変えて奪いあう兎。その前で、山のように盛り上げたソバを食べる清。

清 ええ加減にしィ、お前ら、腹一杯食ったらあかんで。

脂で光る唇を拭き、盛大にソバを頬ばり乍ら。

清 お前ら、それ以上大きうなってみィ、買い手なんかつかへんで……ええな。なんぼハラがへっても眼エつむってじっと我慢せい。この世は一に我慢、二に我慢、三四がのうて五も我慢、それしか生きられへんのや。

旺盛な食欲で、食べ続ける。

## ○ 麻雀 荘

ちんぴら仲間と麻雀をする清。いづれ劣らぬ熟練したその牌捌き。

五 郎 こないだの話やけどな。

修 ララミーのあのスケか？

五 郎 あかんわ、あれ……結婚して、もう店をやめてしもうた。

清 ほんまかいな……誰や、相手は。

五 郎 店の客で、車のセールスマンとかいうとったな。

修 くそったれ。

夫 安 （唄う）へ希望という名の、あなたを尋ねてエ……

清 あーあ、ツイとらんわ……なんぞえ

え話ないのんか。

安 夫 へ遠い国へと、また汽車に乗るウ。

五 郎 兎のバイ、儲ってるのか、あれ？

清 さっぱりや。四時間がとこ突っ立って、声からしてたったの二匹や。

修 阿呆か、お前。

ゲラゲラ笑う。

清 そやかて元手かけたさかい、今更、アトにひけんし……

五 郎 兎より犬のほうがええのとちゃうか

清 犬……？

修 あ、ポンや、ポン！

清 どないすんのや、犬？

五 郎 子を産まして、売るのや…、ええのになると二、三十万するちうで。

安 夫 二、三十万で、犬はいっぺんに五、六匹産みよるで。

清 ほな、百万やんか。ゴツイで、そら

安 夫 少し話がウマすぎるのとちゃうか。

五 郎 その代り、普通の犬とちゃうで……血統書のついたバリバリや。

修 ポン！

五 郎 よう啼くな、お前。

修 ああ、啼いたる、わいはどうせ毛並みが悪いさかいな、ヤタケタに啼いたる。

五 郎 ヤタケタか…ま、しゃあないな、血統書がなきゃそれしかテはないわな。

沈黙。リズムカルに手が進む。

安 夫 へ希望という名の、あなたを尋ねて、寒い夜更けに、また汽車に乗る。

清 （どなる）なんや、このツモは……知らんわ、もう！

修 ツイとらんな、今日は。

清 今日だけやない、生まれた時からずっとや…くそったれ！あーあ、ジャブジャブ金をつこうて、スケとドバドバやりまくって、会う奴みんなに頭を下げさせて……

安 夫 何、寝言言うとんや

五 郎 ガンバラナクッチャ……

五 郎 リーチや。

清 いったれッ（振り込む）

五 郎 ロン！ 一発やさかい七七や。<sup>ななな</sup>

安 夫 へ悲しみだけが、私の道連れエ……

清 やめとけ、しんきくさい！



清　　また振り込む。  
清　　二五六か。  
　　点棒を払って、牌をかき廻す。  
五　郎　何やっとなねや。今のが大ラスやで  
清　　あ……（納得して）よっしゃ、もう  
　　ひと廻し行こ。  
　　誰も手を出さない。  
清　　？  
五　郎　今回の回、精算して欲しいな。  
清　　冷いこと言いな……わいがオケラに  
　　なったの知っとるやんか。  
五　郎　（冷く）今日はオールキャッシュい  
　　うのが初めのキメやさかいな。  
清　　ほんの一、二時間も待てへんのか。  
修　　キメはキメや。  
安　夫　お前、なんぼ負けたんや？  
　　清の点箱をのぞこうとする。  
清　　なんや、人の箱を！  
　　向ッ腹で、乱暴に突きとばす。  
安　夫　（ガタッと立つ）やる気か、お前。  
　　清も立つ。  
　　一瞬にして、陰悪な空気になる。  
　　安夫は元より、わざとらしく自分  
　　の爪を見ている五郎も、無表情に  
　　見上げている修も、完全にヤクザ  
　　の顔になっている。  
清　　……  
安　夫　表へ出よか。  
清　　わいの勘定はわいがするといふとん  
　　のや。ややこしい真似はやめとけ……（点  
　　箱をガシャッと置いて）四千二百円や。都  
　　合してくるさかい、一寸、待っとれ。  
　　出て行く。

#### ○ トルコ風呂・裏手

　　清、苛々して待っている。  
　　仕事着のままのトルコ嬢（よし子・  
　　27）が出て来る。  
よし子　忙しいのよ、今。  
清　　一万ばかりねえか。  
よし子　麻雀？　負けたの？  
清　　急いでるんだ、出せよ。  
　　よし子、金を渡す、千円札が八、  
　　九枚。

清　　大きに。  
　　行きかけて、すぐ振り向く。  
清　　おい、本番はやめとけよ。  
　　駈け出す。  
よし子　（嬉しそうに）早く帰って来て。

#### ○ 麻雀 荘

　　雀卓の上に、四千二百円が置かれ  
　　る。  
清　　文句ねえな……さ、行こ行こ。  
　　勢い込んで、牌をかき廻す。

#### ○ 安アパート・表（深夜）

　　清が帰って来る。  
　　負けたらしい。  
清　　くそったれッ！  
　　転がっていた空缶をガーンと蹴と  
　　ばすと、中へ駈け込んでいく。

#### ○ 同・一室

　　清、入って来る。  
　　よし子が即席ラーメンを食べてい  
　　る。  
よし子　お帰んなさい……食べる？  
清　　いらねえ。  
　　ドタンとひっくり返る。  
よし子　全部とられたの？  
清　　……  
よし子　やだ……あんたはここん所ずっと下  
　　がり目なんだから。  
清　　おい、ウイスキー買うといたか？  
よし子　うん。  
　　清、勢いよくハネ起きる。  
　　新しい瓶の封を切り乍ら  
清　　わい、今度、犬、飼うで。  
よし子　犬？  
清　　そや…血統書のついとる奴や。  
　　上機嫌で、飲み始める。  
清　　五郎の知っとるのが、ドーベルマン  
　　……知っとるやろ、足の長い奴ちゃで。あ  
　　れに仔を産ませて、四匹八十万で売りよっ  
　　たんやて。  
よし子　（興味なく）ふうーん。  
清　　親犬は貸してくれるんや。そやさか



い餌代ぐらいい、元手も大したことあらへん。第一かっこいいやんか。血統書づきやで、血統書。長い鎖つけて二人でひっぱるか、ハハハ……趣味と実益をかねるちう奴ちゃで。

よし子 うまい話はアテにならないわよ。いつも誰かが儲けるだけで、あたし達の方に廻って来たタメシがないんだから。

清 ひがんだらあかんで、ひがんだら……そら、この兎は失敗やったけど。

何気なく兎を見て、あッとなる。  
兎が全部モリモリ餌を食べている。

清 お前……

よし子 勘忍。

清 阿呆んだら！

気遣いのように片端から餌をとりあげる。

清 でかくなったら売れへんやんけ！  
あんなに言うといたのに、お前……（はっと思ひ当る）おい、今迄にも、餌、やっとな！ 何度やったんや！

よし子 あんた……

清 何遍や！ 言わんかい！ 二回か、三回か！

よし子 （小さく）二……二回……

清 （探るように）もっとやな……四回か。四回やな？

よし子 うん……

清 この餓鬼、四回も、（言いかけて）嘘や……もっとやな？ 何遍やッ？

よし子 もういいじゃないの。

清 何がええのや！

よし子 だって……いつもおナカすかして、可哀想だったんだもん。

清 阿呆ッ！

いきなり蹴倒す。

清 こいつらがデブデブと育ってみィ、売れへんで。生きとられへんで……物には夫々、値打ちいうもんがあるんや。こいつらはこまいのが値打ちや。お前は男の摩羅なぶって銭かせぐのが値打ちや！

よし子、キッと見る。

清 なんや、そのツラ……ほかに値打ち

があるんやったら言うてみィ！

よし子 あんたの値打ちは何よ。

清 何やて。

よし子 判らなきや教えてやるよ！ あんたの値打ちは、あたしと兎に威張ることだけだよ！ 何さ、ちんぴらのくせに。

清 （顔色が変わる）このガキ！

よし子の髪を掴むと、強烈なビンタを食わせる。

金切声をあげてひきずられるよし子。

清は容赦しない。

散々に痛めつけると、突き放してウィスキーを瓶ごと叩る。

部屋の隅にうづくまって泣いているよし子。

清 うるせえな。

よし子 （泣きじゃくって）あんたなんかと知り合わなかったら……あたしは集団就職のまんま、ずっと真面目に働いていられたんだ……

清 ふん、何いうてけつかる、コナかけて来たのはそっちからやで。わいかて、あのまんまやってりゃ、今頃はちゃんとしたコックになっとる……お前みたような女と一緒にいるさかい、いつまでたっても芽が出えへんのや。

よし子 悪かったわね……じゃ、出てって！

清 何。

よし子 出てってよ……出てけったら！

傍の座布団を投げつけると、わっと泣き伏す。

清 勝手にさらせ、阿呆ッ。

ガンと膳を蹴倒すと、とび出していく。

泣くよし子。

兎が怯えようにかたまっている。

## ○ 深夜スナック

耳も聾せんばかりのジュークボックスの喧騒な音楽に包まれて、ウィスキーを叩る清。

おもろくない……おもろくない……グラスをドンと置く。



例の会話の声が大きくWる。

「そやッ、いませッ！ びったり  
なのが一人いませッ」

○ 鈍い光を放つ拳銃を握るこわばった右手  
画面につきつけられた銃口は、ま  
さに、武器の持つ無気味さを感じ  
させる。

清である。

夜の河原に立って闇の彼方に銃口  
を向けている。

その左手は札束を握っている、百  
万円。

振ってみたり、頬を叩いてみたり  
する。

厳しかった顔の表情が緩む。

右手の拳銃。

左手の札束。

その重量感と豊かさに、興奮し、  
頬を紅潮させている清。

画面外から男の声。

「百万円の現ナマに、ハジキを一  
挺つけてやる……」

「(清の声) ひや、百万、わいが  
使えんでっかッ！」

「何に、使ってもいい。宮崎へ行  
って思いっきり暴れて来い……骨  
は拾ってやる」

「(清の声) ほ、ほんまに百万で  
んね」

「そうだ」

「(清の声) 兄貴ッ」

「やるか」

「(清の声) やりまッ！」

× ×

清が来る。

土堤下の道に、車が一台停って、  
その前に立っている長髪の学生風  
の若者が三人。一人はズボンをは  
きかけている。清と眼があう。

と、その時、車内から短く、声に  
ならぬ女の叫び声があがる。

車内に、下半身を露わにした女  
(律子)の上に、必死で蔽いかぶ

さっている若者が見える。

清 ……!!

若者たち、車窓を塞いで立つ。

学生A 眼をつぶってな。おとなしくしてり  
ゃ、大ラスでお前にも少しさせてやる。

清 ……

学生B なんや、ぼさっと突っ立ってからに  
……大きにぐらい言えんのかいな阿呆。

清 (カチンと来る) なんやて、このガ  
キ。

学生たちの間から笑いが消える  
と、チラッと目配せをする。

一人がいきなり清を殴りとばす。

不意をくらって、ふっとぶ清。

学生B やってまえ。

抵抗する清、多勢に無勢で、忽ち  
叩きのめされる。

カサにかかった学生達、突然、あ  
っとひるむ。

清の手に拳銃。銃口が不気味に光  
っている。

学生達 ……

ガタンノ とドアがあいて、律子  
がとび出すと、何か喚めき乍ら駈  
け去っていく。

車外に落ちかけて、床にひっかか  
ってとまっているパンティ。

清には、そのパンティを見るゆと  
りが出来た。

清 わいを誰や思うとるのや、天佑会の  
小池清やでエ。

ぐいと拳銃をつきつける。

学生達、ぎょっと身をひく。

清、今は、拳銃の持つ力を知った。

清 こら、オモチャとちゃうのや。

蒼ざめる学生達。

清 何やったら、人のバラし方、教えた  
ろうか。

絶句、ブルブルと、学生達は震え  
だす。

清 手ェつけ……両手ついて謝まらん  
か、阿呆んだらッ!

学生達、一斉に大地にひれ伏す。

清の眼が、鋭い光を放つ銃口へ向



く。何か酔ったような清の顔。

## ○ 西へ飛ぶジェット機（昼）

## ○ 宮崎空港

ジェット機から下りて来る乗客の中に清がいる。新調のダークスーツが、昨日までの清とすっかり外見を変えている。

× ×

正面玄関。

清が出て来る。

タクシーを求めて見廻した眼が、ふと彼方の一点にとまる。

同じ飛行機で来たらしい律子が、やはり、車を探すような感じで立っている。互いに気付く。

一瞬、動揺した律子、逃げるように背を向ける。

その前に乗用車が停まると、運転席の男がドアをあける。

律子、乗る。車はすぐ走り去る。

清 ……ケッ！

タクシーに手を上げる。

## ○ 車窓を流れる風景

タクシーの坐席に、ふんぞりかえっている清。

運転手 宮崎は、どちらへ!?

清 一番いいホテルへ着けろ！

## ○ 宮崎

さんさんと降りそそぐ陽光の下、白く広い道路と、青々としたフェニックスの群列。

清の乗ったタクシーが、勢よく、南国の街へ走り込んで行く。

男たちのザワザワした会話が始まる。

「天佑会が鉄砲玉をとばして来た」

「若い奴だ」

「構わねえ、叩き出せ」

「待て、それはマズイ」

「天佑会の思う壺だぞ」

以下の会話が、タクシーに悠然と坐った清とその眼に映る宮崎の街、更には土木・建築・観光・芸能・金融など組関係の事務所とその看板に、途切れ途切れに流れる。

「若い奴だと言ったな」

「狂犬みてえなもんだ」

「何をするか判らねエぞ」

「ほっとくわけにもいくまい」

「どうするんだ……」

「慌てるな…慌てるんじゃねえ！」

交錯した言葉が、意味を持たないザワザワした音となって、次のシーンへ流れていく。

## ○ ホテル・一室

強い陽光が差し込む。

ベッドに腰をおろす清、百万円の札束から、指に唾つけ、ていねいに一万円札を十枚抜きとり、も一度かぞえて財布につめる。

残りの金を、バックの奥深くしまい込み、いとおしいものを扱うように拳銃をベルトに差し込む。

「何をしやがるか、とに角、もう少し様子を見るんだ……奴から眼を放すな！」

窓を開ける清。

グアーン、と、街の騒音がとび込んで来る。

眼下に広がる宮崎の街。

噴る清。

と、その耳にとび込むノックの音。

ハッと緊張する清、思わずその手がベルトの拳銃に。

清 誰だ!?

声が、上づっている。

ドアが開き、魔法ピンを手にしたボーイが入って来る。

緊張した自分が恥かしい。

鏡に向って口許を歪めたり、ファイティングポーズをとってみる。



昨日までの自分でない自分を必死に作りだそうとしているのだ。  
どうやら満足出来るポーズを見つけたようだ。

清 (呟く) いけてるやないけえ。

### ○ ネオンの光茫

日本列島，地方都市繁華街のどこにでもある夜の表情。

警戒と緊張の為に身を固くした清が歩いて来る。

チラッと，一軒の小ざれいなバア・××を見やる。

貫禄をつけて入って行く。

人影が走って，清の入った店を確認する。

チンピラの芳夫だ。

### ○ ××・内部

清が，カウンターに腰をおろす。

バーテン いらっしゃい。

荒れた感じの女，みどり(23)が，べったりと清の傍に坐る。

みどり 何になさる!?

清 水割りや，アッ，そっちの奴ちゃで。

スコッチを指さす。

みどり まあ，デラックス。

清 よかったら，お前も飲みいな。

みどり ほんと!?

煙草を取り出す。

みどり，急にいそいそと煙草に火を点ける。

清，おうように煙を吐き，

清 ここは，どこのシマヤ!?

みどり えっ!?

清 この辺しきっとるのは，何ちゅうチンピラか聞いとるんや。

ハッと，顔見合せるバーテンとみどり。怖いものでも見るように清を見る。

貫禄を意識して，ゆっくりとグラスを口に運ぶ清。

### ○ クラブ・〇〇

女達に囲まれている清。

テーブルには，スコッチのビンが立てられ，華やいだ雰囲気。

ゆき ねえ，空けなさいよ，さっきから，まだ一杯しか飲んでないじゃない。

清 慌てるんじゃねえよ，夜は長いで。実は，酔うのが怖いのだ。

「いただきちゃお」

年増のホステス，晴美が，ビンを取り上げ，ガバガバとコップに注ぐ。アッとなる清。

しかし，ここで慌てちゃチンピラだ。

清 フン，ガツガツしやがって。空になったら，もう一本貰いな。

ゆき うわア，かっこいい。

清，満更でもない。

ドアが開き，三人づれの，一眼でやくざと判る男達が入って来る。

清の顔が，緊張する。

ゆき いらっしゃい。

迎えに立とうとする。

その手をグッととる清。

清 いかんでもええ。

男達，眼がけわしくなる。

清 (背を向けたまま) 坐っとったらええのや。

ゆきを強引に坐らせる。

ツカツカと清に近づく三人，陰悪だ。

(A) おう!

清 何やねん。

(A) このガキ

清 わいは，天佑会の小池清や。あんさん等は!

一瞬，三人の顔色が変わる。

清，つと立上り，財布から一万円札を三枚，ゆきの前に放る。

清 残りは，あんさん達に飲んでもらい。

スタスタと店を出て行く。

思わず，顔見合せる男達。

(A) (怒り) あのガキ!



三万円を、力一杯に叩きつける。  
ゆき 何すんの!?  
慌てて、その札をひろう。

○ クラブ・△△・表

足どりはゆるやかだが、緊張の度を増した清が来る。  
ふと、背後が気になる。  
ふり向く。  
人影が、慌てて物陰へ消えた。  
清 ……  
こわばる。  
クラブ・△△ドアを開け、どび込むように中へ入る。  
人影が、物陰から出る、芳夫。  
瞬間、閉ったドアが開く。  
清が覗いたのだ。  
二人の眼と眼が、瞬間、ぶつかり合う。  
互いの顔に走る恐怖。

○ 同・内部

「いらっしゃい」  
ホステスやボーイの声にかまわず、清はフロアをよぎる。  
足早やに、トイレへとび込んで行く。

○ 同・トイレ

息使いが、思いなしか荒くなっている清。  
ベルトから拳銃をぬきとり、手ごたえを確かめる。  
黒い銃口。  
フーッと、吐息。  
拳銃を納い込み、今度は、財布をとり出す。  
残りの札を調べる。  
一万円札が四枚。  
と、いきなりドアが開く。  
勢よくとび込んで来るホステス。  
アッと、清が思う間もなくドアが閉される。  
「ごめんなさい!!」

ア然と、財布をかかえ込んでいる清。

○ バー街

清が来る。  
依然、人影（芳夫）があとをつける。  
清の顔に、やけくその決意。  
路地を曲る。  
人影も、警戒深げに路地を曲る。  
清、走る。  
人影も、走る。  
再び、路地を曲る清。  
人影も。  
その顔前へ、ヌッとつき出される拳銃。  
愕然となる芳夫。  
その胸ぐらをとる清。

清 われっ、何でわいのあとをつけとるのや。天佑会の小池清やと知っとるのけ?

芳夫 ……

清 何とか言わんかい。

芳夫 ……

清 組の奴等によう言うとき、わいは×××（ホテル）に泊っとる、いつでも相手になつたさかい、会いに来いとな!

いきなり銃尻で、芳夫の脳天をなぐりつける。

恐怖から逃れるために狂ったように殴り続ける。

崩れる芳夫。

チラッと別の人影が走ったようだ。

清、急に恐怖感がこみ上げて来る。

○ 小路から小路へ

走る清。  
転がるように走る。  
顔がひきつっている。

○ 大通り

とび出して来た清が、タクシーを停める。



とびのる。  
走り去るタクシー。

### ○ ホテル・一室

ドアが開き、清が、とび込むように、入って来る。  
嚴重に、ドアに鍵をかける。  
カーテンも閉し、そのスキ間から階下を見やる。  
改めて、ホッとし、上着のポケットからハンカチを取り出し、汗をふく。  
水を飲む。  
ドッカーと、ベッドの上に腰をおろす。  
拳銃を手にする。  
いつかの声が、蘇って来る。  
「思いきりあばれて来い、骨は拾ってやる」  
× ×  
脳裡をよぎるイメージ。  
鮮血にまみれた清。  
× ×  
清の顔が歪む。  
激しく歪む。  
拳銃を、ベッドの上へ叩きつける。  
そして、自分の身体も、ベッドの上へ叩きつけるように、ひっくりかえる。  
そのまま、じっと、うづくまったまま清は動かない。

### ○ 大阪・よし子のアパート

暗がかりの中、ガツガツと餌をむさぼっている兎。  
足をおっぴろげ、ラーメンをすすっているよし子。  
兎とよし子の物を食う音だけが、静かな夜の空間に流れている。

### ○ 朝の陽光

### ○ ホテル・内部

清が寝ている。  
広いダブルベッドの上に、身をよじり足を曲げ、昆虫のように小さくなって寝ている。  
ただ、拳銃だけは、しっかりと握りしめて。  
電話のベルが鳴る。  
はね起きる清、一瞬、電話を睨む。  
鳴りつづけるベル。  
清、受話器を取る。

声 清か……  
清 兄貴ッ……（なつかしさがこみ上る）  
声 どやった？ ゆうべだよ。  
清 へえ、ま、ボチボチ。  
声 ボチボチじゃあかんで。ズバッと行け、ズバッと……ええか、〇〇町にアモール言うクラブがある。南九会の杉町言う男がやっとるクラブや。  
清 アモールでんな。  
声 何でもええ、そこへ行ってアヤつけたれ、ゴチャゴチャめかしたら、構う事あねえ、ハジキを二、三発ぶっ放してこい！  
清 ……  
声 どうしたい!? ビビったのか。  
清 と、とんでもねえ。  
声 派手に暴れるんだ。いいか、出来るだけ派手にな。  
清 何か言いかける。  
が、その前に、ガチャンと電話は切れる。

清 ……  
仕方なく受話器を置く。  
その顔に、ぶつけられる音楽。

### ○ クラブ・アモール（夜）

ビートのきいたバンド演奏。  
例によってスコッチのびんを立てた卓で、四、五人のホステスに囲まれている清、精一杯の貫禄を示して、

清 杉町や、南九会の杉町。  
朱 実 マスターを知ってるの！



ミ チ 素適でしょ、マスター。

清 まだ逢うてへん。

神経がピリピリしている。さり気なく店内を見まわし乍ら、

清 えげつない男らしいな。ゼニになることやったら、何でもしよる奴ちゃ、聞いたで。

朱 実 (話をそらすように) ねえ、踊らない。

清 (構わず) 今日は来てるのか? 杉町!?

ミ チ まだ見かけないけど……

清 あんなチンピラのやっとなる店、そのうち潰れるで……どや、おまいら、早いとこ店変えた方がええのとちゃうか。わいが世話してやってもええで。

向うのドアの前で、清を見て何かボーイに囁いていたやくざ風の男が、奥へ消えて行く。

清、もう後には引けない。ヤケクソで声が大きくなる。

清 ほんまやで……目下、東から台風が着々と接近しつつあるんや。風速100メートル、920ミリバールちゅうごつい台風やで、杉町がここでどれだけでかい顔してるか知らんが、こんなもんにおち当ってみいイチコロのペシャ。

ホステス達、すっかり白けている。

清 悪いことは言わんよ、て、さ、早いとこ店、やめ。流れ小弾に当って、そのハクイ顔に傷でもこさえてみろ、商売上ったりなるで。

いつか音楽もやんでいる。

清の声だけが、明瞭にピンピンと響いている。

清 (糞度胸が据ってしまった) 杉町だけやないで、露島会、南天組、名前だけは一人前でも、みんなチンピラの集りやないけ、大阪へ来てみい、鼻の先にもひっかからん奴ばかりや。

ボーイがシャンペンを運んで来る。

清 ……!? 何や、これ、この店は、頼まんもの無理矢理飲ますのか!?

ボーイ マスターからでございます。

清 なに…… (一瞬、絶句)

杉町が来る。

中年の眼の鋭い貫禄のあるやくざだ。

ホステス達、総立ちになる。

清も、はじかれたように立つ。

ベルトの辺りを押えた手に、コチコチに力が入っている。

杉 町 天佑会の小池さんですね。

清 われは、何じゃい。

杉 町 南九会の杉町です。

清 ……

杉 町 おいでだと知っていたら、もっと早く御挨拶に上ったんですが、失礼しました。つまらん店ですが、どうかごゆっくり遊んでいって下さい。

清、氣勢をそがれて、呆然としている。

杉 町 (ホステス達に) 何をしてるんだ。そそうのないよう、おもてなしをするんだぞ。

去ろうとする。

清 おい、待たんかい。

杉 町 (ふり返る)

清 なんや、この酒は……ややこしい真似はせんとき。われアまだこないなことするには貫目不足や。

杉 町 ……

流石に頬がピクッとするが、辛うじて自制して、ボーイに眼で合図する。

ボーイ、シャンペンを運び去る。

杉 町 申しわけございませんでした。

清に一礼して踵を返したその傍らへ、パッと大輪の花が咲いたような美貌の女(潤子)が寄って来ると、二人で連れ立って店を出て行く。

生気を吹き返すバンド。

ホステス達、急に騒がしく席に戻る。

清、ドデンと坐って、

清 ええかっこしてからに……おう、飲



むで、飲んだるでエ。

### ○ ホテル・一室

清の情事。

性急な、それだけに激しく、貧乏  
のような愛撫から逃げようとする  
みどりに、札を撒き散らす清。

清 欲しけりゃなんぼでもやる！ 気ィ入  
れてつとめ！ わいはもうすぐ死ぬんや。  
ぶち殺されるんや！ そやさかい……そや  
さかい……なア……なア……（次第に哀願  
の感じになって来る）逃げたらあかん……  
どこへも行かんといてや……なア……なア  
ひしと抱きしめて、顔を埋める。  
サイドテーブルに置かれた拳銃。  
その上に、白い裸身の動物のよう  
な呻きが流れて――

### ○ 街

サングラスの清が、肩をそびやか  
して歩く。

あちこちに立つそれらしい男たち  
を、睨みつけるようにして歩き続  
ける。

「いつまでほっとくんだ？」

「若い者んの身になってみろ、た  
まったもんじゃねえ」

「まるで、自分のシマ内みてえに  
ノシ歩いてやがる……」

「でかいツラさらしてよ……」

「知らんぞ、俺はどうなっても、  
少くともウチの組は、もう若い者  
をとめとけねえ！」

### ○ 日南海岸

明るい陽差し。

疾走するスポーツカー。

ゆきを抱き寄せながら、ハンドル  
を握っている清。

図にのりやがって、小僧！

### ○ 堀切峠

スポーツカーが停っている。

その中で、ゆきを抱きしめ接吻し

ている清。

ゆ き ……夢みたい。

清 ……

ゆ き だって、あんたみたいな人が、あた  
しなんか相手にしてくれるなんて、考えて  
も見なかったもん。

清 ……

ゆ き どうしたの？ 何をイライラしてん  
のよ。

清、プイと車から下りていく。

？となるが、気にもせず、コンパ  
クトを出して口紅をぬり始めるゆ  
き。

断崖の縁に立って煙草に火をつけ  
る清。

その眼下に広がる日向灘の絶景。

清 ……

放心したように見ていたが、す  
ぐ、まだ長い煙草を捨てて、踏み  
にじる。

清 （ゆきの方に）おい、今度はもっと  
ブッ飛ばすで！

車に戻りかけて、はっと一方を見  
る。

彼方のドライブインから潤子が出  
て来ると、止めてあった派手なス  
ポーツカーに乗り込む。

清 ……

強烈な印象を残して、あッという  
間に走り去る潤子。

清の眼に、何も知らずにまだ口紅  
をひいているゆきが、急にみすぼ  
らしく見える。

ゆ き どう、このルージュの色……1200円  
もしたの、違うでしょ、やっぱり。

清 （車に乗り込んで）買うたる！

ゆ き え……何を？

清 ルージュや、その倍のヤツを買うた  
るで。

乱暴にスタートさせる。

### ○ アモール・内部（夜）

朱実と踊っている清。

朱 実 なんだ、潤子さんのこと？



清 潤子って言うのか。  
朱 実 マスターの彼女よ。  
清 ホステスカ!?  
朱 実 ううん、東京で写真のモデルをやったのを、マスターが口説いて連れて来ちゃったって話だけど……いつもお高くとまってさ、評判悪いわよ。

清 ……

朱 実 どうしたの!? 馬鹿に気にしちゃって、やな人!

清の足をふむ。

清 いて!

バンド演奏。

清が、!? という顔になる。

朱実が熱っぽく軀を押えつけて来る。

清、「この女も!」という顔になる。

清 (囁く) ええのんか? すぐ後家になるかも知らんで。

朱実、すました表情で尚も押しつけてくる。

清、ニヤリと笑うと、いきなりひき寄せる。

顔と顔が、間近になる。

間近かに、二人の眼が逢う。

いたづらっぽくウインクし、清の胸に顔を埋める朱実。

又一人、女がなびいて来た……

清、こらえきれぬ充足感に、表情がゆるんでいる。

#### ○ 街 (昼)

清が昂然と来る。

こっちを見て、ヒソヒソと何か話をしているチンピラが二人。

清 ……

ふん! といった顔になると、

靴みがきに近寄る。

黙って、足をのせる。

みがいている老婆の前に、マッチ棒三本、つき出す。

清 ひけ。

老婆 ……!?

清 いいから引くんや、一本。

老婆、引く。

清 (呟く) 朱実か……

#### ○ 赤電話

清が、かけてくる。

清 あ、わいや……これから行くさかい、肉でも買うとけ、スキ焼き食いたいんや……え、美容院? そんなもん行かんでもええ、ほな、二十分位したらそっちへ行くで。

#### ○ 朱実のマンション・室内

ベットの中の二人。

清は拳銃を磨き、朱実は爪を磨いている。

清 杉町の御機嫌はどや?

朱 実 さあ、マスター 神戸へ行ってたから。

清 神戸!?

朱 実 もう帰ってる筈だけど。

清 何しに行ったんや。

一瞬、言葉がきつい。

朱 実 知らないわよ、でも、新しいお店出すと言ってたから、その事じゃないの。

清 ……わいらと違うて、商売人やさかいな、あいつ。

拳銃で、天井に狙いを定めたりしている。

清 (呟くように) いつでもやったるで。

朱 実 (鼻声で) ねえ、いつまで待たせんのよ。

拳銃をとろうとした手をピシャリとやって、

清 女のさわる物やない……言うとりやろ、いつも。

大事そうに、サイドテーブルに置いて、朱実に向き直るが、

清 なんや、どないしたんや?

コケティッシュに背を向けている朱実。

清 怒ったんか!?……おい、こっち向きイな。

手をかける。



朱実、布団の中へもぐり込む。  
清　こいつ……（笑い乍ら）出て来い、  
怒るで、ほんまに……よっしゃ、ずっとそ  
うしてろ……ええな。

猛然と、布団にもぐって行く。  
激しく揺れる布団。  
嬌声。

×　　　×  
隣室の食卓。  
豊富に食べ残されたスキ焼鍋に、  
西陽が当って、キャッキョッとた  
わむれる二人の声が聞えて来る。

### ○ 大阪・よし子のアパート

ここにも西陽が一杯さし込んでい  
る。  
ラーメンの丼を傾けて、最後の汁  
を音を立てて啜り込んでいるよし  
子。  
片隅の兎。  
かなり大きくなって、ガサガサと  
餌を食べている。

### ○ 朱実のマンション・階段

腕を組んで降りて来る清と朱実。  
情事の余韻が、二人の素振りの中  
にただよっている。  
突然、全く突然、踊り場の陰から  
一人の男がとび出す。  
その手に、キラッと光る七首。  
本能的に清の蹴上げた足が、顎に  
入って、壁によろめく男……芳夫  
だ。  
眼がつり上っている。  
七首を立て直し、再度猛然ととび  
かかって来る。  
朱実の悲鳴。  
拳銃を出すゆとりもない清、丁度  
持っていた朱実のバックを叩きつ  
ける。  
口金が外れ、中味が散乱する。  
一瞬たじろいだ芳夫にとびかか  
り、七首を持った腕をねじ上げる  
清。

清　このガキ！  
七首が、ポロリと落ちる。

### ○ ある地下室（夜）

（あるいはそれに近い場所）  
芳夫を殴る杉町。  
凄まじい剣幕だ。  
芳夫の顔面に、鼻血が吹き出る。  
蒼ざめた表情で噴める清。  
杉町、なおも容赦せず、芳夫を床  
に叩き伏せる。  
汗を拭く。

杉町　小池さん、これで許してくれとは云  
わねえ。

芳夫の七首を、清の前に、

清　……!?

杉町　この馬鹿を、おめえさんの好きなよ  
うにして下さい。何をされてもあっしの方  
に異存はねえ。

清　……

杉町の手で光る七首。

杉町　その代り、大阪の方には、今日のこ  
とを黙っていてももらいてえ、後生だから、  
黙っててくれませんか。

清　……

年配のやくざが二人、いづれも息  
をつめて清を見ている。  
身じろぎもしない芳夫。  
息苦しく、重い空気。

杉町　（促すように）さ、どうぞ！

清　……

清、いきなり杉町の手から七首を  
奪うようにとる。  
虫けらのような芳夫の眼が、清に  
向けられる。

清　……

不意に、七首を投げ出し、その場  
から逃げるように去って行く。

杉町　小池さん！

追おうとした鼻先に、バタンとド  
アが閉まる。

不安げに顔を見合う三人。

年配のやくざ　どう思う……野郎、大阪へ知  
らせるかな。知らせたらえらい事になるぜ



……この馬鹿野郎。

憎々しげに、芳夫を蹴る。

### ○ ホテル・一室

ベットの上に大の字になっている清。

己れが、今、チンピラであることをいやと言う程知らされた。

だが、それを自覚したくはない。

腹が立つ、無性に腹が立つ。

清 クソッ。

居たたまれずにハネ起きる。

拳銃を、フトンの上に叩き捨てる。

その時、電話が鳴る。

清 ………

清の耳に、ベルの音がやけに大きく響く。

清 ………もしもし

声 フロントでございます。田中さんとおっしゃる方が、おいででございます。

清 田中!?

声 はい、ロビーの方でおまちになっておられます。

電話が切れる。

たとえ誰であろうと、のめり込んで行くしかない。どうにでもなれだ。

拳銃をベルトに押し込んで、立ち上る清。

### ○ 同・ロビー

清、緊張して来る。

その眼が、釘づけになる。

ニッコリ微笑んで、椅子から腰を浮かすのは、潤子。

### ○ 走るヘッドライト

その強烈な光茫。

### ○ スポーツカー・車内

ハンドルを握る潤子。

その横に清。

清 どこへ連れてくつもりや?

潤子 都城……

清 何や、それ!?

潤子 一時間位かな……静かな街よ……宮崎だと、いろいろ人の口がうるさいでしょ

清 そこで、誰が待っとんのや?

潤子 誰も……あたしとあんた、二人っきり……

清 ………

### ○ 強烈なヘッドライト

### ○ 再び・車内

対向車のヘッドライトが、潤子の整った顔を闇に浮かせる。

じっと睨めていた清、

清 そうか……判ったで。あんた杉町に言われえ来たんやな。

潤子 (あっさり) ええ……今日のことは、天佑会には内緒にしてくれるように、あたしからも、もう一度頼んでくれって…

清 ………

急に、ゲラゲラ笑い出す。今までの緊張ぶりが、バカバカしくなったのだ。

カーステレオをつける。

陽気なリズムが流れ出る。

清 (チラッと潤子を見やり) おまえが頼んでも、わいが厭や言うたらどうなるんや?

潤子 (平然と運転を続けながら) 知らない、そんなこと……私に関係ないもの。

清 関係ねえって……じゃ、なんでわいと!?

潤子、プーンとステレオを消す。

潤子 間違えないで……いくら杉町に行けって言われても、私には断る自由はあったのよ。

清 ………

潤子 杉町は、あんたに無条件降伏したんですよ。

清 そや。

潤子 だから、私、来たの……私ってその時々最高の男性にしか興味がないのよ。かすかな笑い。



逆に、清の顔から、笑いが消える。

○ 都城・Gホテル

スポーツカーが止り、潤子と清が降り立って来る。

○ 同・廊下

二人来る。

一室の前、潤子が鍵の一つを清に渡して、

潤子 じゃ、あとで。

向いの部屋に入っていく。

○ 同・一室

灯がついて、清が入って来る。

ドアをロックすると、拳銃を枕許において、ドンとベットに転がる。

何か、納得がいかない。

鼻毛を抜く。

ハネ起きる。

窓の外を見やる。

ホテルに附属したボーリング場が見える。

室内を歩く。

立ち止る。

鏡の前だ。

得意の表情を作って見る。

潤子の声。

「私って、その時々、最高の男性にしか興味がないのよ。」

清 (呟く) 最高の男性……フン、アホか。

口とは裏腹に、頬がゆるんで来る。

急に元気よく洋服を脱ぐ。

ベッドの上に放る。

ズボン、パンツ。

浴室にとび込む。

勢よく、シャワーを浴びる。

○ 同・廊下

清が出て来る。

向いの部屋の前、一瞬のとまどいの後、ドアをノック。

○ 同・向いの部屋

スイート・ルーム。

清 (ドアを開け) どや、下のバアへ行って少し飲ま……

あとの言葉を飲み込む。

いきなり、食卓が眼にとび込む。

純白のテーブルクロスに、シャンペン、ワイン、洒落れた料理。

潤子の姿はない。

清 ………!?

その眼が隣室へ。

ゆっくりと近づき、境のドアを開ける。

暗いベツトルーム。

かすかな光を浴びたベツトの上に、潤子。

裸身だ。

清 ………

潤子の両の手が、誘うようにゆっくりと差しのべられる。

潤子 好きにしていいわ……あんたの好きなように……

○ ボーリング場

ピンが、はじけとぶ。

○ ベツドイン

潤子に挑む清。

激しい。

組みしだかれ、喘ぐ潤子。

清、噴る。

潤子の喘ぎが高まる。

清の眼、強い。

× ×

盛り場・料理屋・表。

コック姿の清が、ゴミを棄てている。

露地を通して――

あるいは露地を――

流れる華やかで楽しげな人々の群。



肩を寄せあって歩く、トップモードの若いカップル。  
ラケットを抱えた健康そうな女学生のグループ。  
コンパの帰りか、騒々しくわめき散らしながら通る男女大学生。  
ボンヤリと、それを瞋める清。  
× ×  
洗濯物が吊された住込部屋。  
垢じみた万年床に床らばる猟奇的な雑誌。  
ヌード。  
若者達のフリーセックス……の見出し文字。  
× ×  
便所。  
しゃがんでいる清。  
前の板壁に、丹念に女の絵を刻んでいる。  
その強い眼。  
画面が、白っぽくなる。  
× ×  
昼。  
強い陽光が差し込んでいる。  
ベッドの上。  
のけぞりうねる潤子の肉体。  
白い豊かな四肢。  
清、征服への欲望。  
× ×  
みぞれの降る露地を、ジャンパーのえりを立てて歩く清。  
× ×  
くわえ煙草の、だらしのない女から小遣いをもらう清。  
卑屈に、それを受けとっている。  
× ×  
走る清。  
路地から路地へ。  
喧嘩をして、逃げているのだ。  
曲がった途端、ガッと敵に道をふさがれる。  
強烈なパンチにのけぞる。  
忽ち、鼻血にまみれるその顔。  
画面が、急速にハレーションをお

こして——  
白く豊かな四肢がうねる。  
歯を噛いしばり、歓喜の声をこらえる潤子。  
× ×  
投石して走る清。  
規制する機動隊。  
投石、投石。  
画面、ストップ。  
× ×  
場所は定かではない。  
拳銃を清がうっている。  
(スローモーション)  
× ×  
はじけるボーリングのピン。  
× ×  
絶頂へのぼりつめる潤子。  
× ×  
清。  
× ×  
果てる潤子。  
清の充足。

#### ○ 都城

平和で落ち着いた夕暮の町のたたずまい。  
互いの腰に手を廻し、優雅な恋人同士のように散歩する二人。

#### ○ Gホテル・バスルーム

裸身の潤子が清を洗う。  
王者に従える侍女のように。  
× ×  
ロビイに貼られた霧島岳のポスター。  
散歩から帰った二人が見ている。

清 この山から、神さんが下りて来はったんやな。てっぺんはどないなってんやろ。

潤子 さァ。

清 一丁、登ったろやないか、どや？

潤子 ええ、いつかね。

× ×

清を洗う潤子。

腕を——



背中を――

清の放心したような眼。

× ×

トルコ風呂。

薄暗い照明の下、よし子が客にスペシャルをしている。

事務的な、無感動な、その表情。

× ×

バスルーム

清が、いきなり潤子の腕をとる。

清 やれ！

股間に、引きづり込む。

### ○ 同・ベッドルーム

清が、潤子をつきとばす。

清 はえ！ はいまわるんだ！

潤子 ………！？

潤子の首を押え、四つんばいにならせる。

清 歩け！ 歩かんかい！

潤子の尻を足でける。

のろのろと、はいまわる潤子。

清 もっと早く！

馬乗りになられて潤子のスピードが上る。

清 ほえろ！ ワンと云ってほえろ！

潤子 ワン！

清 もっとだ！

潤子 ワン、ワン、ワン！

清 うおーッ！

清の全身を歓喜が突き上げる。

突然、笑いだす。

馬乗りのまま、狂ったようにゲラゲラ笑いだす。

清 最高や……ハハハ……最高やで！

潤子も笑いだす。

清 最高やでエ、最高やでエ、ハハハ……

二人のはしゃいだ笑い声が室内に満ちて……

### ○ 同・ロビー

結婚式を済めた新郎新婦が、ホールから来る。

通りがかった清と潤子が、足をと

めて見ている。

清、？となる。

新婦は、律子だ。

潤子 (女の余裕で) わりときれいな花嫁じゃない。

清の顔に、浮んでいる笑い。

潤子 どうしたの!?……知ってる人!?

清 ちょいとな。

指をパチンと鳴らして、通りかかったボーイを呼びとめる。

清 バラの花二三十本買って、あの花嫁さんに贈ってくれ。(チップを渡し) 誰からって聞かれても、判らんと言うんやで。ええな。

ボーイ かしこまりました。

ボーイ 去る。

清 (呟く) 女は魔ものやと、よう言うたもんや。

潤子 ………!?

清 あのスケな……

潤子の耳に何か囁く。

潤子 あら……。 (笑い) 交通事故ね。

清 せやけど、ほんまにしっかりしとるで、すましくさって……男こそええつらの皮や、アハハ……

余裕たっぷり、如何にも楽し気な笑いだ。

### ○ 霧島岳 (三日後)

晴れた空に、くっきりと浮んでいる。

### ○ Gホテル・スイート・ルーム

ベッドの中で、髪をブラッシングする潤子。

清が、とび込んで来る。

清 おい、やっと晴れたで、霧島へ行こ。

潤子 (笑って) 霧島、霧島って子供みたいに……

ドサッと、潤子の傍に坐り

清 今、十月やな。

潤子 そうよ。

清 しかも、今日は、二十日やろ。

潤子 ええ。



が最高幹部会を開いてくれてな」  
「正式に決ったんだな、我々をバックアップして天佑会に対抗してくれるというのは」  
「その通りさ、……今度のこたア、全く杉町の力だ。当分頭が上らんぞ、杉町には……」

○ 同・屋上

都城の美しい街並。  
遠く、霧島岳。  
清が立っている。  
男達の声、なおも流れる。  
「ところで、奴はどうする。天佑会の鉄砲玉は！」  
「もう遠慮するこたアねえ、宮崎へ一步でも足をふみ入れてみろ、今迄の礼をたっぷりさせえもらうぜ！」

○ 同・スイート・ルーム

ローストチキンの周囲に、数人分のナイフや皿を、いそいそと並べている清。  
ノックの音。  
清 おう、来たか……待ってたでエ。  
ドアを開けて驚く。  
よし子が立っている。  
清 お、お前……！  
よし子、ぐいぐい押すように入ってきて来る。  
よし子 午前中に宮崎へ着いて、それからずっと探し廻ってたのよ……早く逃げたほうがいいわ、キヨシ！  
清 逃げる？ なんや、そら。  
よし子 何も知らないの？ 宮崎の連中が、連合会を味方につけたのよ！  
清 夢見とんのかお前は……そうなったら大デイリになる。連合会にそんな度胸はあらへん。  
よし子 度胸のないのは天佑会のほうよ。連合会がついたんで九州へ進出するのを諦めたんだから。  
清 (少し真剣になる) 誰から聞いたん

や。

よし子 みんな知ってるわよ、知らないのはあんたぐらいなもんでしょ。こんな所にいるから判んないのよ！

清、電話に向う。

よし子 どこへかけるの。

清 大阪や……確かめてみる。

よし子 バカなことを言わないで！（電話の前に立って）やめて！ 天佑会はあることカンカンなんだから。

清 ……

よし子 あたしの友達が鹿児島で働いてんだけど、そこへ行けば当分は何とか……

清 それで来たんか、お前。

よし子 だって、あんたはどこへも行く所が

清 阿呆……お前に何が判るんや。今度のことじゃ、わいはやるだけやったんや（自分に言い聞かせるように）そや、やるだけやったんや！ そら、宮崎の奴等が連合会と手組んだんは知らなかったが、人間、誰かて一度や二度ドジを踏むことが。

思わず出た本心に、はっと言葉を飲む。

沈黙——

清、突然よし子を押しのけて、受話器を外す。

よし子 キヨシ！

清 大阪の××××番（よし子に）何も怒られるスジはねえ。

興奮を鎮めるように、ウイスキーを飲む。

電話が鳴る。

清 モシモシ……あ、わいだす、今、妙なことを耳にしたんですが。

声 そんな所で何をしてるんだ、お前。

清 別に、その……

声 清、お前、南九会の身内に狙われたってのは本当か。

清 ほんまだす……そやけど、向うから詫びを入れて来たさかい……

声 阿呆んだら！ お前、己れを何サマだと思ってやがるんだ。百万持って観光旅行へ行ったつもりでいやがるのか！

清 兄貴……



声 鉄砲玉てのは、てめえでハジキを撃  
って、向うの弾に当らなきゃ何の値打ちも  
ねえんだ。それ位の事も判らねえのか。

清 わい、これから杉町をやりまノ

声 阿呆ッ、手打ちだと言ってるんだ、  
そんな事は許さねえぞ。いいか、すぐ帰っ  
て来い、すぐだぞノ

向うから、ガチャンと切れる。

呆然と受話器を置く清。

よし子 ね、あたしの言った通り……

清 (激しく) うるせえッ。

隣室へ入ると、上衣から財布を出  
して中味を調べる。

三十万円ほどしかない。

清 おい、そこにあるウイスキーを持っ  
て来い。

よし子、運んで来る。

その前に、五万円を投げ出す清。

清 持ってけ。

ウイスキーをひったくって呷る。

よし子、手を出さない。

清 持ってけよ……どうせあらへんのや  
ろ。

ベッドの上で、ガボガボ飲み始め  
た清、ふと潤子が忘れていった香  
水のスプレー瓶に気がつく。

嬉しそうに取り上げると、散らば  
った五万円に、シューッと香水を  
ふりかけて足で押しやる。

清 持ってけ、早う……これからパーテ  
ィが始まるさかい、邪魔やいうてるんや  
で。

よし子、のろのろした手付きで札  
を拾い乍ら、

よし子 あんたの兎、大きくなったよ。

空中に香水を撒き散らしていた清  
？と見る。

よし子 餌を山盛りにして置いて来たから、  
また大きくなっちゃうね、きっと。

出て行く。

清 ふん……阿呆か、あいつ。

よし子がワゴンを押して入って来  
る。

清 ？

よし子 少し食べないと毒だよ。

× ×

ウイスキーが殆どカラになっている  
る。

清 (電話に) 来ると言うたやんけ、お  
前……(どなる) ゴチャゴチャ言うな、来  
るのか、来んのか、どっちや？……よっし  
ゃ、もうええノ

ガチャンと切って、またウイスキ  
ーを呷る。

完全に眼が据わっている。

また電話をとる。

清 もう一本のほうはどうしたんや、宮  
崎の××××番や……何？ 何も言わんと  
すぐ切る？ ……かまへん、ちゃんと出る  
まで何遍でもかけろノ

よし子が部屋の隅から見ている。

清 おもろがっとなのか、お前。

よし子 ううん。

清 じゃ、何や……何を見とんのやノ

よし子 到頭、誰も来ないじゃないの。

清 ……(呷る)

よし子 霧島、霧島って、何があるの。

清 ……(呷る)

よし子 ちっとも変ってないね、あんた。

清 ……

爆発寸前の清の顔。

よし子 誰もいないんだったら、あたしが一  
緒に霧島へ行ったらいいんだよ。

じろっと、よし子を見る清。

その凄い眼。

よし子、思わず身をすくませる。

立ち上がる清。

よし子 勘忍。

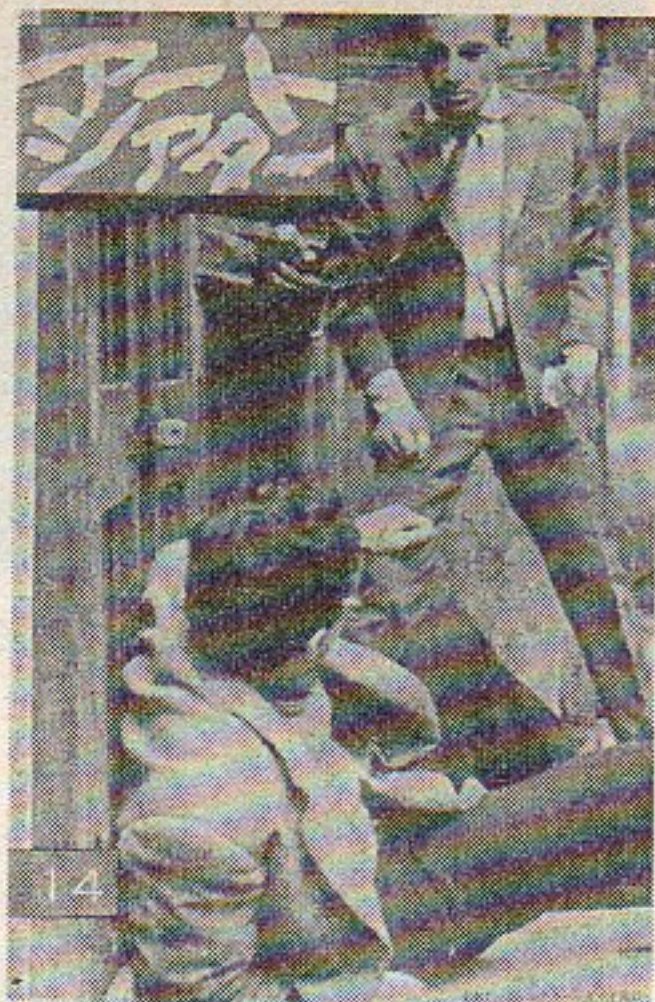
清 (意外に静かに) 折角やけどな、わ  
い、スケには不自由してへんのや……来  
い。

よし子 (腕を掴まれえ) 痛ッ……どこへ行  
くのよ。

清 すぐそこや……そこに、わいと一緒  
に霧島へ行くスケがおるんや……はくいス  
ケやで……来いノ わいが昔のわいとどれ  
だけちゃうかよう見せてやるさかい、来い  
ちうとるんやッノ



# 南部圭之助 有楽町編集者の回想



No.14「ピアニストを撃て」

■編集者の頁へ招待原稿を書かされるなんて私が初めてかな。私は1927年に慶大在学中のまま、『映画世界』の（「映画の友」の前身）編集部へ入った。ふつう雑誌の編集者というと、編集会議で決められた執筆者に原稿を依頼して、締切日に（たいがい4、5日、ひどい人は一週間以上おくれる）原稿をもらって、それをレイアウト・スタッフにまわす。あとは校正をみればよい。ところが『映画世界』という、その当時ただ一つの洋画ファン雑誌は、なにしろ原稿料も出ないくらいだから、何から何まで一人でやらねばならない。今でもこのスタイルは変わらず、映画雑誌の編集部は大体、レイアウトが出来るのだが、淀川長治君が神戸から上京して、『映画世界』編集部を手伝いで、入れてくれと言ってきた時は、たしかその雑誌が休刊する半年ぐらい前ではなかったかと思う。だから私は彼にレイアウトを教えるヒマがなかったし、彼が戦後「映画の友」の編集長として同誌の黄金時代をつくった時も、小川博という、私の後輩が技術部長、つまりレイアウトのヘッドをやっていたので、それをやらなくてすんだのだろう。ATGの宣伝部長の多賀祥介君はやはり同じ雑誌社の邦画専門の「映画ファン」の編集長だったからレイアウトが出来る。私はただ彼に洋画のムードとこの細長い小雑誌レイアウトの基本をおぼえてもらうだけでよかつ

た、ただ弱ったのは、私が引受ける前に表紙のデザインをきめ、それで題字も依頼済みだということであった。14号の「ピアニストを撃て」で、タテエにいい写真があったので、やっとこれで表紙のスタイルを変えた。

■いまATGへ来て最初の方の号の編集後記を読むと、われながら面白い角度で勝手なことを書いているのに気がつく。

■『映画世界』をやめて、高給でパラマウントにスカウトされ、邦楽座（今の丸の内のカデリー劇場）の文芸部長に就任した。仕事は16頁ほどの無料配布プロ、パンフレット、それに毎週ぼう大なスペースの新聞広告である。当時は興行会社が新聞広告をつくっていたので、当時のSP（松竹・パラマウント・チェーン）の年間予算が49万5千円。今の金に直すと、ざっと九億ぐらいか。これからSY（松竹洋画チェーン——まだ東宝は出来てない）の宣伝部長で、戦前最大の映画雑誌「スタア」の編集長を兼ねた。このオフィスが帝劇で戦争直前、雑誌の統合で、「新映画」「映画旬報」（キネマ旬報）などを扱った雑誌社の代表で邦楽座裏の事務所1、2階の主人になった。ATGは有楽町のほぼ中央だから、私の40年近くの編集キャリアは、殆んどこの三角地点にあったことになる。

▶このページに、今回は特別に南部圭之助先生に原稿をお願いしました。その理由は、先生の原稿をよんだ方はおわかりと思いますが、ATGが出来たとき、その上映作品の鑑賞にプラスになるようなものを出すことになり、タイトルはすぐ「アート・シアター」ときまり、大きさ（体裁）については私が案を出すことになり、個性的なものにしたいと思い、その時に川喜多かしこさんからお借りしていた外国の映画関係の雑誌からヒントを得て、我が国にはない現在のサイズとヨコ組のスタイルがきまったのです。しかし用紙の企画寸法からすると無駄の出るサイズなのですが、それが個性になればということで、それを持って伊丹十三さんのところにうかがい、字体とデザインの相談をしたのです。南部先生に編集をお願いしたのは、その後でしたので、初めは少しおやりにくかったようでした。

▶そして、しばらく編集について教えていたいたたのです。が、その間（30号ぐらいいまで）の編集後記に（K）とあるのは南部先生だったのです。

▶読者の皆様、執筆を下さった皆様、これからもよろしくお願い致します。（多賀祥介）



革命だ！

頭の固い君たち！

今は昨日の

今じゃない！自由を愛する

天才詩人フリッツの

強烈な個性と行動力が

現代の袋小路を

つき破る

〈ポスト・ポルノ〉の

スーパー・アニメ！

# フリッツ ザ キャット

カラー作品

長篇アニメーション

製作＝スティーブ・クラント

原作＝ロバート・クラム

監督・脚本＝ラルフ・バクシ

音楽＝レイ・シャンクリン

〈主題曲サントラ盤〉

ファンタジー・レコード

東和提供

アメリカ＝S・クラント作品



悪名(?)高きアングラのポルノ・スター《フリッツ・ザ・キャット》が  
腐敗しきった現代に投げつけた爆弾とは？ 公開近し！

★近日特別ロードショー

FRITZ THE CAT



市川崑監督作品

# 股旅

MATATABI ●カラー作品

撮影—小林節雄  
美術—西岡善信+加門良一  
編集—平野三郎兵衛  
衣裳考証—上野芳生  
殺陣—美山晋八

atg

●シナリオ—谷川俊太郎+市川崑 ●崑プロダクション+ATG提携作品  
出演—小倉一郎+尾藤イサオ+荻原健一+井上れい子+常田富士男+大宮敏充

